

福岡市埋蔵文化財調査報告書第560集

博 多 65

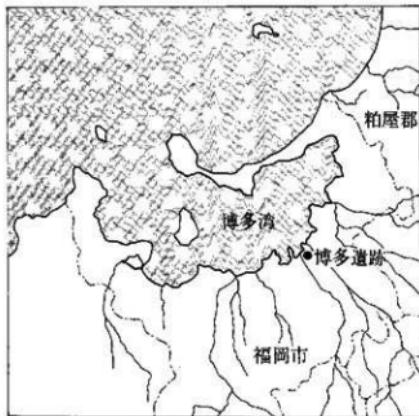
— 博多遺跡群第99次・第101次調査報告 —

1998

福岡市教育委員会

博 多 65

— 博多遺跡群第99次・第101次調査報告 —



博多99次

遺跡略号 HKT-99

遺跡調査番号 9633

博多101次

遺跡略号 HKT-101

遺跡調査番号 9660

1998

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による博多遺跡群第99次・101次調査では多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

- 本書は博多区祇園町59・60、2-1地内におけるビル・駐車場建設事業と博多区下呂服町484におけるビル建設に伴い、福岡市教育委員会が平成8年度（1996年度）に実施した博多遺跡群第99次調査と第101次調査の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測は長家伸が行った。
- 遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
- 製図は長家、山野妙子、戸畠智恵子が行った。
- 遺構写真は長家が撮影した。
- 遺構番号は各調査毎に通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は掘立柱建物（S B）・竪穴住居跡（S C）・土坑／土坑墓（S K）・溝（S D）・井戸（S E）・石組遺構（S X）・ピット（S P）である。
- 遺物番号は各調査毎に1からの通し番号とした。なお挿図中の遺物番号のうち博多遺跡群第99次調査分については遺物番号461～560が欠番である。
- 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6° 21' 西偏する。
- 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
- 本書の執筆・編集は長家があたった。

博多遺跡群第99次調査

遺跡調査番号	9 6 3 3		遺跡略号	H K T - 9 9	
調査地地籍	博多区祇園町2-1、59		分布地図番号	4 9 - 0 1 2 1	
開発面積	262.49m ²	調査対象面積	262.49m ²	調査面積	160m ²
調査期間	平成8年8月19日～平成8年10月21日		事前査定番号	7 - 2 - 5 3	

博多遺跡群第101次調査

遺跡調査番号	9 6 6 0		遺跡略号	H K T - 1 0 1	
調査地地籍	博多区博多駅南4丁目86番		分布地図番号	4 8 - 0 1 2 1	
開発面積	331.31m ²	調査対象面積	331.31m ²	調査面積	180m ²
調査期間	平成8年12月16日～平成9年1月14日		事前査定番号	8 - 2 - 2 9 2	

博多遺跡群第99次調査

本文目次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II調査報告	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	11
(1) 古墳時代～古代	11
(2) 中世	18
(3) その他の遺物	47
3. 小結	48

挿図目次

第1図 調査区位置図 1 (1/50,000)	2
第2図 調査区位置図 2 (1/5,000)	3
第3図 調査区位置図 3 (1/500)	4
第4図 調査区北壁十層実測図 (1/40)	5
第5図 I面全体図 (1/100)	6
第6図 II面全体図 (1/100)	7
第7図 III面全体図 (1/100)	8
第8図 IV面全体図 (1/100)	9
第9図 SC026・027・065 実測図 (1/40)	10
第10図 SC026・065 出土遺物実測図 (1/3)	11
第11図 SK020・021・022・048・049・061・063・064・066 実測図 (1/40)	12
第12図 SK020・021・022・048・049・061・063・064・066 出土遺物実測図 (1/3)	13
第13図 SB032 実測図 (1/60)	16
第14図 SB032 出土遺物実測図 (1/3)	17
第15図 SD062 土層図及びSB032・SD062 配置図 (1/40、1/100)	18
第16図 SD062 出土遺物実測図 (1/3)	19
第17図 SE016・033・034 実測図 (1/40)	20
第18図 SE016 出土遺物実測図及びSE033 出土遺物実測図 1 (1/3)	21
第19図 SE033 出土遺物実測図 2 (1/3)	22
第20図 SE034 出土遺物実測図 (1/3)	23
第21図 SE043 実測図 (1/40)	24
第22図 SE043 出土遺物実測図 1 (1/3)	25
第23図 SE043 出土遺物実測図 2 (1/3)	26

第24図	SK008・025・036 実測図(1/30)	27
第25図	SK008 出土遺物実測図(1/3)	27
第26図	SK004・005・011・012・013・015・017・018・019・038 実測図(1/40)	28
第27図	SK004・005・011 出土遺物実測図(1/3)	29
第28図	SK012 出土遺物実測図 1(1/3)	30
第29図	SK012 出土遺物実測図 2(1/3)	31
第30図	SK013 出土遺物実測図及びSK015 出土遺物実測図 1(1/3)	32
第31図	SK015 出土遺物実測図 2(1/3)	33
第32図	SK017・018・019 出土遺物実測図(1/3)	35
第33図	SK038 出土遺物実測図(1/3)	36
第34図	SK039・040・044・045・046 実測図(1/40)	37
第35図	SK040・044 出土遺物実測図(1/3)	38
第36図	SK045 出土遺物実測図 1(1/3)	39
第37図	SK045 出土遺物実測図 2(1/3)	40
第38図	SK045 出土遺物実測図 3(1/3)	41
第39図	SK050・051・052・053・054・055・058・059・060 実測図(1/40)	42
第40図	SK050 出土遺物実測図(1/3)	43
第41図	SK051・052・053・054 出土遺物実測図(1/3)	44
第42図	SK055・057・058・060 出土遺物実測図(1/2、1/3)	45
第43図	その他の遺物実測図 1(1/3)	46
第44図	その他の遺物実測図 2(1/2、1/3)	47
第45図	1期検出遺構配置図(1/150)	48
第46図	2期検出遺構配置図(1/150)	49

写 真 目 次

- 写真1 作業風景
- 写真2 調査区北壁土層
- 写真3 I面全景（東から）
- 写真4 II面西半全景（東から）
- 写真5 II面東半全景（東から）
- 写真6 III面西半全景（東から）
- 写真7 III面東半全景（東から）
- 写真8 IV面西半全景（東から）
- 写真9 IV面東半全景（東から）
- 写真10 SC026（南から）
- 写真11 SC027（東から）
- 写真12 SC065（北から）
- 写真13 SK021（北から）
- 写真14 SK022（北から）

- 写真15 SK063 (北から)
 写真16 SB032 柱穴北半 (西から)
 写真17 SB032 柱穴南半 (西から)
 写真18 SD062 (東から)
 写真19 SD062 土層
 写真20 SE016 (西から)
 写真21 SE033 (南から)
 写真22 SE034 (北から)
 写真23 SE043 (東から)
 写真24 SK008 (東から)
 写真25 SK025 (南から)
 写真26 SK036 (南から)
 写真27 SK004 (西から)
 写真28 SK005 (北から)
 写真29 SK011 (南から)
 写真30 SK012 (北から)
 写真31 SK013 (西から)
 写真32 SK015 土層
 写真33 SK015 (北から)
 写真34 SK017・018 (東から)
 写真35 SK038 (北から)
 写真36 SK044 (北から)
 写真37 SK050 (西から)
 写真38 SK053 (東から)
 写真39 SK055 (西から)

博多遺跡群第101次調査

本文目次

Iはじめに.....	59
1. 調査に至る経過.....	59
2. 調査体制.....	59
II調査報告.....	61
1. 調査概要.....	61
2. 遺構と遺物.....	61
3. 小結.....	80

挿図目次

第1図 調査区位置図(1/500)	60
第2図 調査区全体図(1/80)	62
第3図 SB057・058・059・060 実測図(1/80)	63
第4図 据立柱建物出土遺物実測図(1/2、1/3)	64
第5図 SK003・004・006・013・014・016 実測図(1/40)	65
第6図 SK003・004・006・013・014・016 出土遺物実測図(1/3)	66
第7図 SK018・021・022・023・025・026・027 実測図(1/40)	68
第8図 SK018・021・022・023・025・026・027 出土遺物実測図(1/2、1/3)	69
第9図 SK030・031・032・033・039・043・044・045・047 実測図(1/40)	71
第10図 SK030・032・033・039・043・044・045・047 出土遺物実測図(1/2、1/3)	72
第11図 SK052・054 実測図(1/40)	74
第12図 SK052・054 出土遺物実測図(1/3)	74
第13図 SX015・028・029・034 実測図(1/40)	75
第14図 SX015・028・029・034 出土遺物実測図(1/4、1/3)	76
第15図 SX035・037・038 実測図(1/40)	78
第16図 SX035・037・038 出土遺物実測図(1/2、1/3)	79
第17図 SD053・056 断面図及びSD056 出土遺物実測図(1/40、1/3)	80
第18図 その他の遺物実測図(1/3)	81

写真目次

写真1 作業風景
写真2 全景1(北西から)
写真3 石組造構群(西から)
写真4 全景2(北西から)
写真5 北端部全景(西から)
写真6 SX015(南から)
写真7 SX015 北壁
写真8 SX028(西から)
写真9 SX028 土層
写真10 SX029(東から)
写真11 SX034(北から)
写真12 SX035(西から)
写真13 SX037(南から)
写真14 SX037 東壁
写真15 SX038(西から)

博多遺跡群 第99次調査報告



写真1 作業風景

I は じ め に

1. 調査にいたる経過

平成8年3月25日付けで株式会社中村屋代表取締役中村正雄氏より埋蔵文化財課宛に博多区祇園町2-1、59の物件(262.49m²)に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。(事前審査番号7-2-534)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群(分布地図番号49-0121)に含まれている地域である。

このため埋蔵文化財課では平成8年6月12日に申請地内で試掘調査を行い、その結果現地表から80cmの灰褐色土上面から地表下120cmの黄白色砂までに3面の遺構面を確認した。埋蔵文化財課では遺跡の存在する旨を回答し、埋蔵文化財の取扱について協議することになった。協議の結果ビル・立体駐車場建設により遺構の破壊が避けられないため申請地全体を対象として発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立した。これを受けて委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成8年8月19日~平成8年10月21日の期間で行った。調査対象地は262.49m²で、搬入口確保等のため調査平面積は160m²となった。また遺物はコンテナ78箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、事業主体である株式会社中村屋専務取締役永島征男氏をして関係の皆様には調査についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 株式会社中村屋

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口謙治

調査庶務 第1係 西田結香

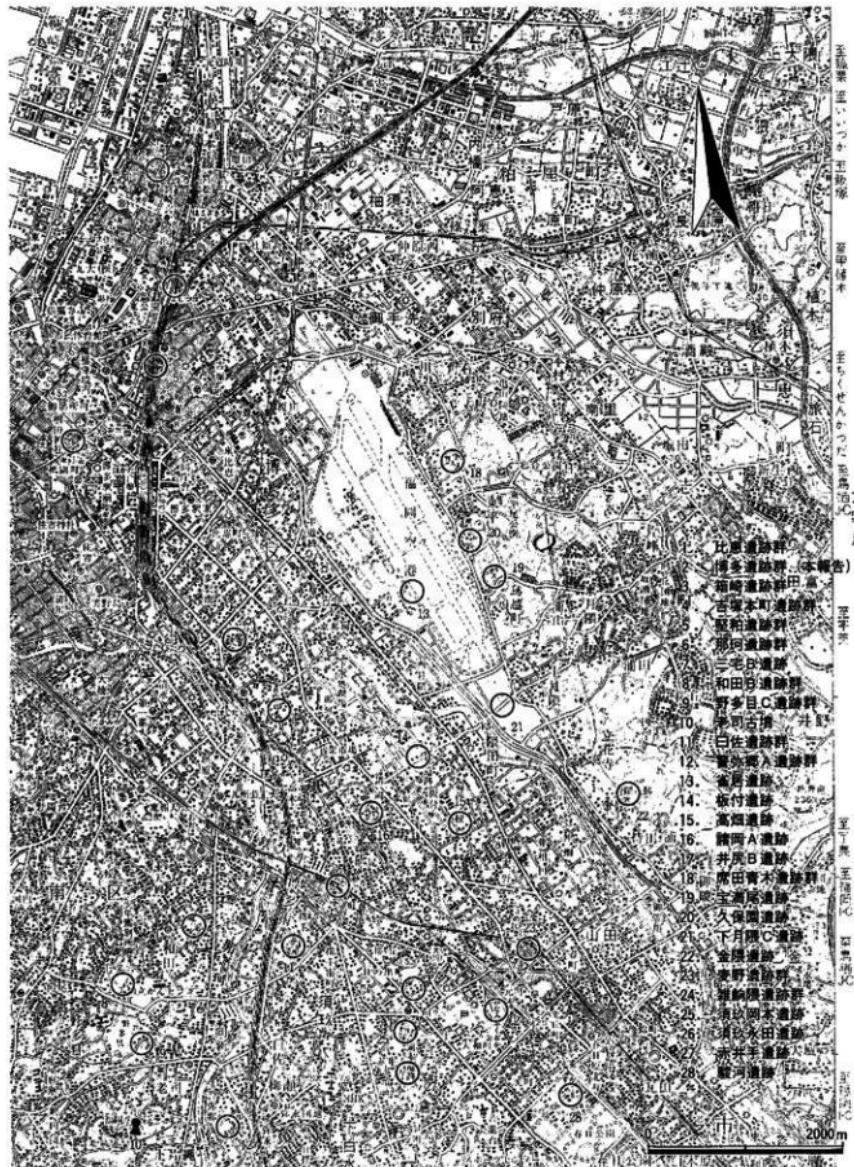
調査担当 第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村本義夫 小路丸嘉人 安元尚子 平本恵子

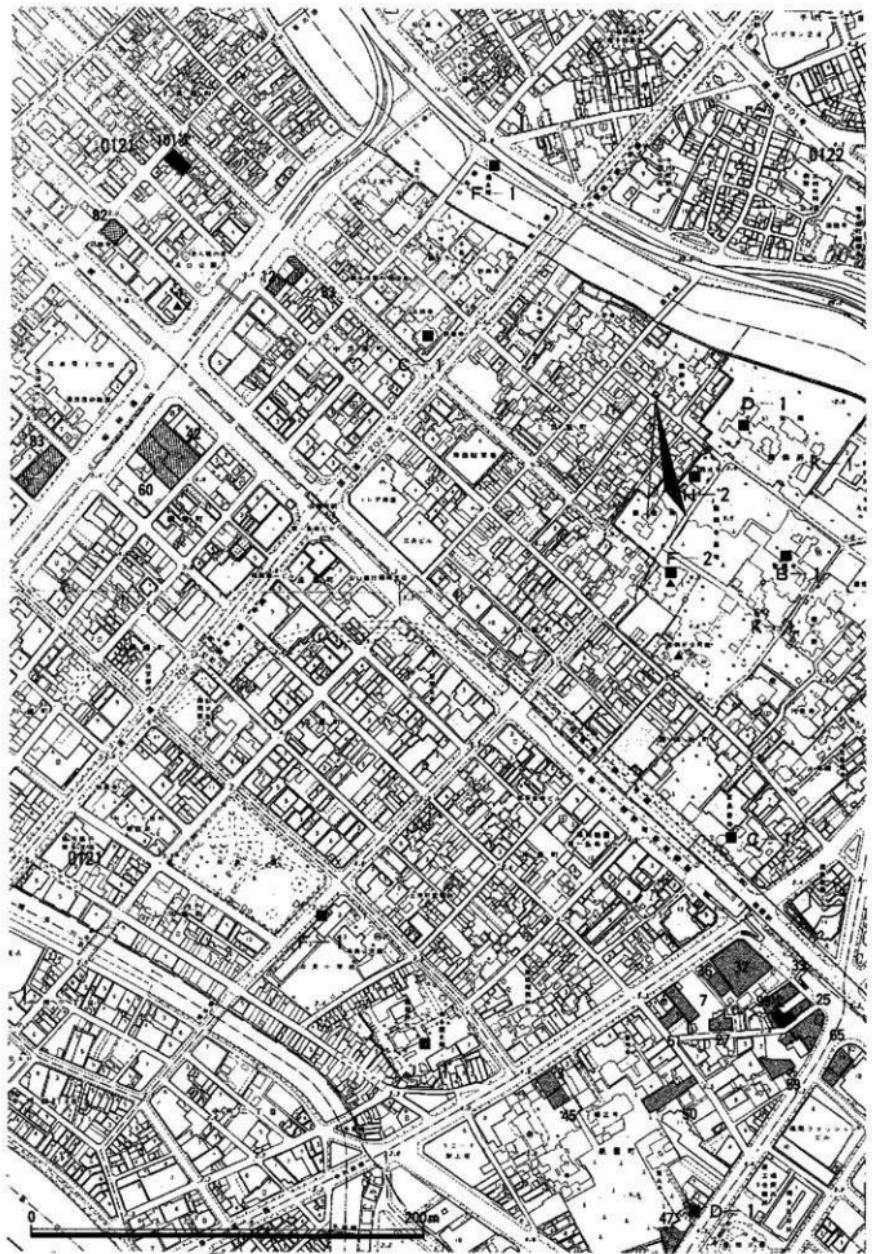
整理作業 水田優子 指原始子 花田則子 池聖子 大音輝子 吉村智子 小池温子 中村翠子

増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 小路丸良江 山野妙子 今林加津江 梅本洋平

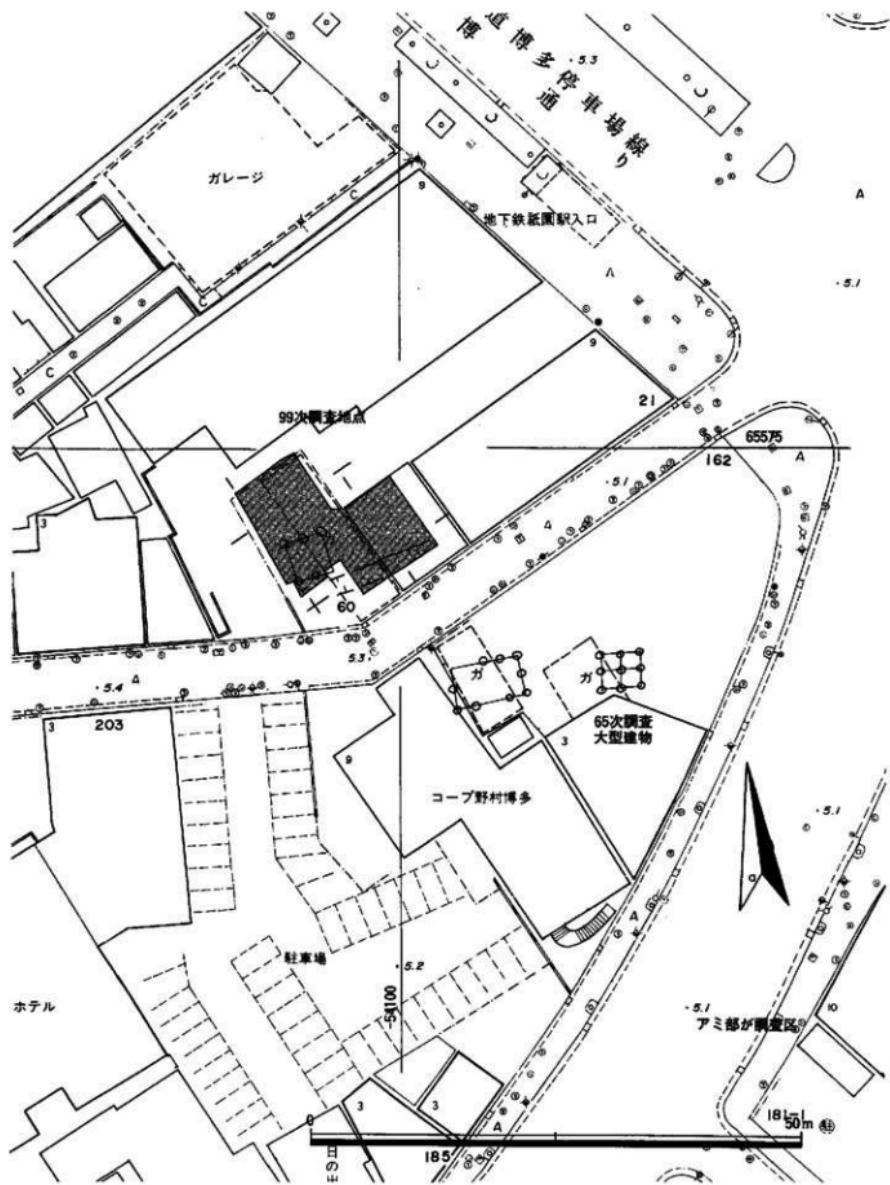
太田次子 石谷香代子 星野明子



第1図 調査区位置図1 (1/50,000)



第2図 調査区位置図2 (1/5,000)



第3図 調査区位置図 3 (1/500)

II 調査報告

1 調査概要

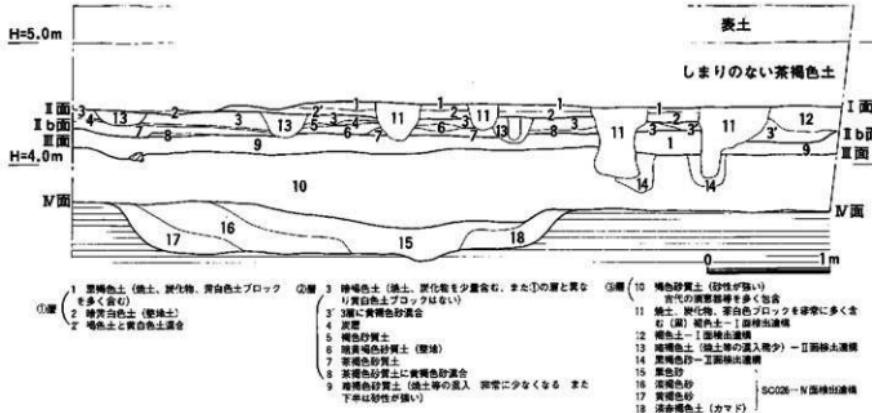
博多遺跡群は縄文海進以降に形成された砂丘上に占地する遺跡である。砂丘は南西～北東に長い3列が形成されており、内陸側から海側に砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ばれている。また比較的形成の早い内陸側砂丘Ⅰ・Ⅱを「博多浜」、陸化の遅れる砂丘Ⅲを「息の浜」とも呼びならわしている。

対象地は砂丘Ⅰの頂部から南側の緩斜面にかかる地点で、25次・33次・59次・65次等周辺の発掘調査も密に行われている地点である。博多遺跡群の概要・周辺の調査についてはここでは割愛するため各報告書等を参照していただきたい。

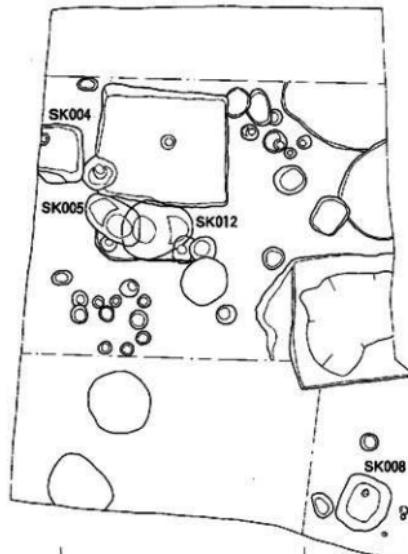
調査地点は着手直前には整地済で標高約5.3mであった。調査地点は試掘調査の結果から近世以後掘り込みがほんんどなく良好な状態で中世以前の遺構・遺物が残されていることが推定されていた。造成土・耕作土状の結まりのない茶褐色土を機械で除去した黒褐色土上面(標高4.5m)を第Ⅰ面として調査を開始した。なお江戸元禄期の絵図によると祇園町一帯は建造物がなく畠地として表現されており、今回機械で除去した茶褐色土がこれに当たる可能性がある。また近世のこのような土地利用により、結果として遺構面までの盛上がりが浅いにもかかわらず中世以前の遺構が比較的良好な状態で遺存している。調査は廃土の搬出等の関係から、西側を調査した後反転して東側を調査するという方法をとった。また遺構面はⅠ面～Ⅳ面の4面を設定して行った。なお基盤砂を調査終了後だめ押しに1m掘り下げを行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

調査区土層

遺跡群の基盤は黄白色の風成砂でこの上面をⅣ面とした。この砂丘面では隣接する65次調査区で古墳時代初頭の竪穴住居・鍛冶関連遺物などを検出しており、本調査地点でも関連遺構の存在が想定されたが、Ⅳ面では古墳時代前期以前の遺構は確認できず、古墳時代後期～古代の竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物・ピットを検出している。掘立柱建物SB032はⅢ面検出のSD062と一緒に遺構と考えられ、本来はⅢ面で検出されるものであろう。

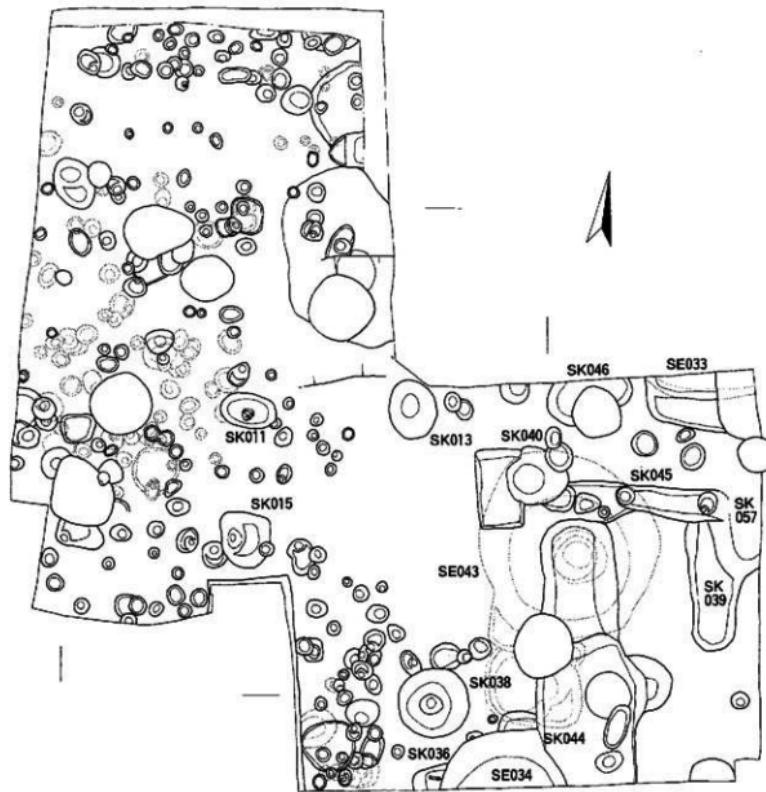


第4図 調査区北壁土層実測図 (1/40)



0 5m

第5図 I面全体図 (1/100)



*アミ部は IIb面で検出

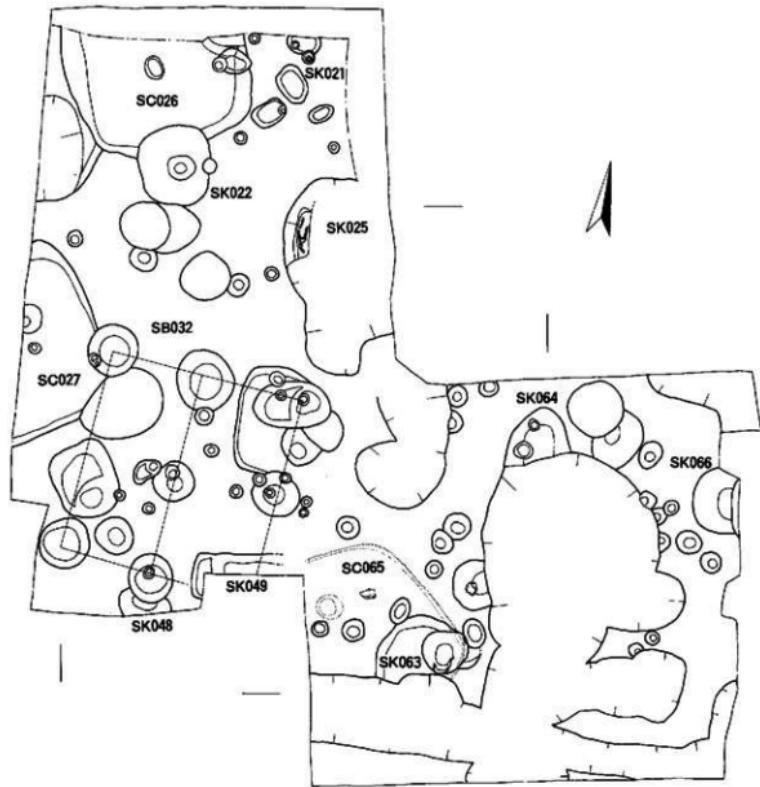
0 5m

第6図 II面全体図 (1/100)



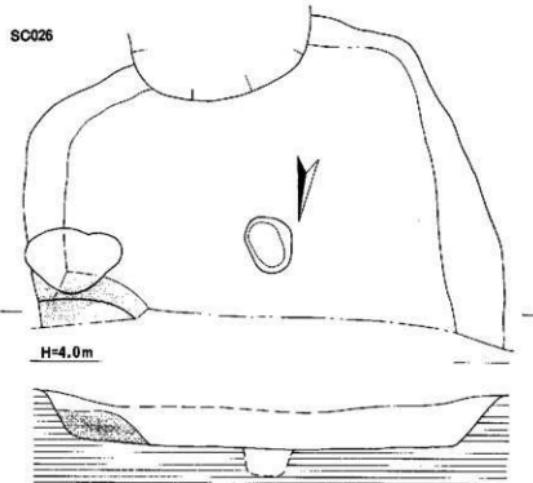
0 5m

第7図 Ⅲ面全体図 (1/100)



0 5m

第8図 N面全体図 (1/100)

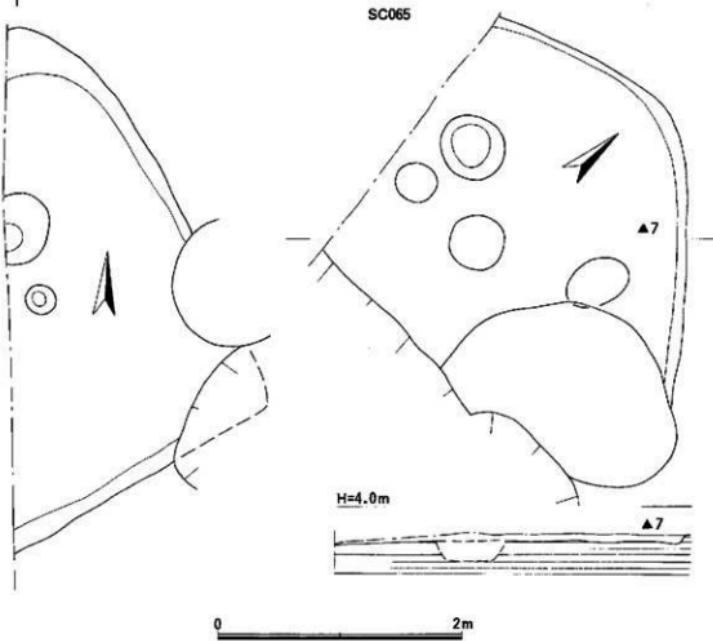


SC027



H=4.0m

SC065



第9図 SC026・027・065 実測図 (1/40)

基盤砂上面には厚さ40cm～60cmで古代に属する土師器・須恵器を多く包含している褐色砂質土(10層)が調査区全体に均一安定的に広がり、この10層上面をⅢ面とした。Ⅲ面は溝・土坑・ピットを検出している。出土遺物は土師器・須恵器・鉄器等で8世紀代の遺構面と考えられる。

Ⅲ面の上面には暗褐色土(9層)が厚さ20cm程で全体に広がるが、この上層は焼土・炭・粘土を含む土砂での整地が細かな単位で行われている。機械で除去した墨褐色土(1層)上面をⅠ面、黄白色粘土を多く含む2層を除去した3層上面をⅡ面、3層以下の細かな整地層を除去した9層上面をⅡb面として調査を行った。Ⅰ面・Ⅱ面・Ⅱb面では、井戸・土坑・ピットを検出し、遺物は白磁・青磁・青白磁・天目・陶器・土師器・銅鏡他青銅製品・釘・かすがい・小刀等鉄製品・鍛冶滓等多種多様な遺物が多量に出土している。Ⅰ面で検出した遺構が少なく各面の細かな時期がかえって不明となっているが時期的には11世紀後半～14世紀前半に位置づけられる遺構面である。

また各遺構面掘り下げ時にも多くの遺物が出土しており、包含層出土遺物として取り上げている。取り上げはⅠ面掘り下げ(1・2層)を「①層」、Ⅱ面掘り下げ(3～9層)を「②層」、Ⅲ面掘り下げ(10層)を「③層」で行っている。

2. 遺構と遺物

(1) 古墳時代～古代

Ⅲ面及びⅣ面で検出する。周辺の調査で確認されている古墳時代前期以前の遺構は本調査区内で認められなかった。検出遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・ピットである。埋土は黒(褐)色砂基本とし、土壤化していない。

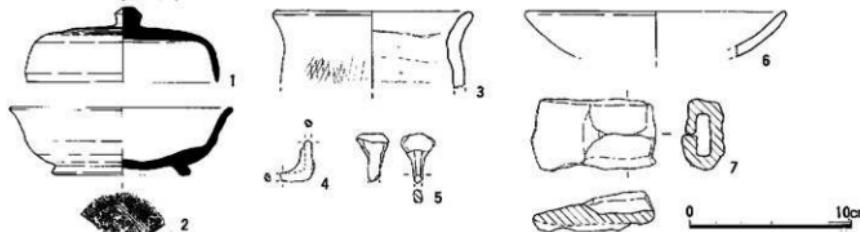
竪穴住居跡(SC)

SC026(第9図)

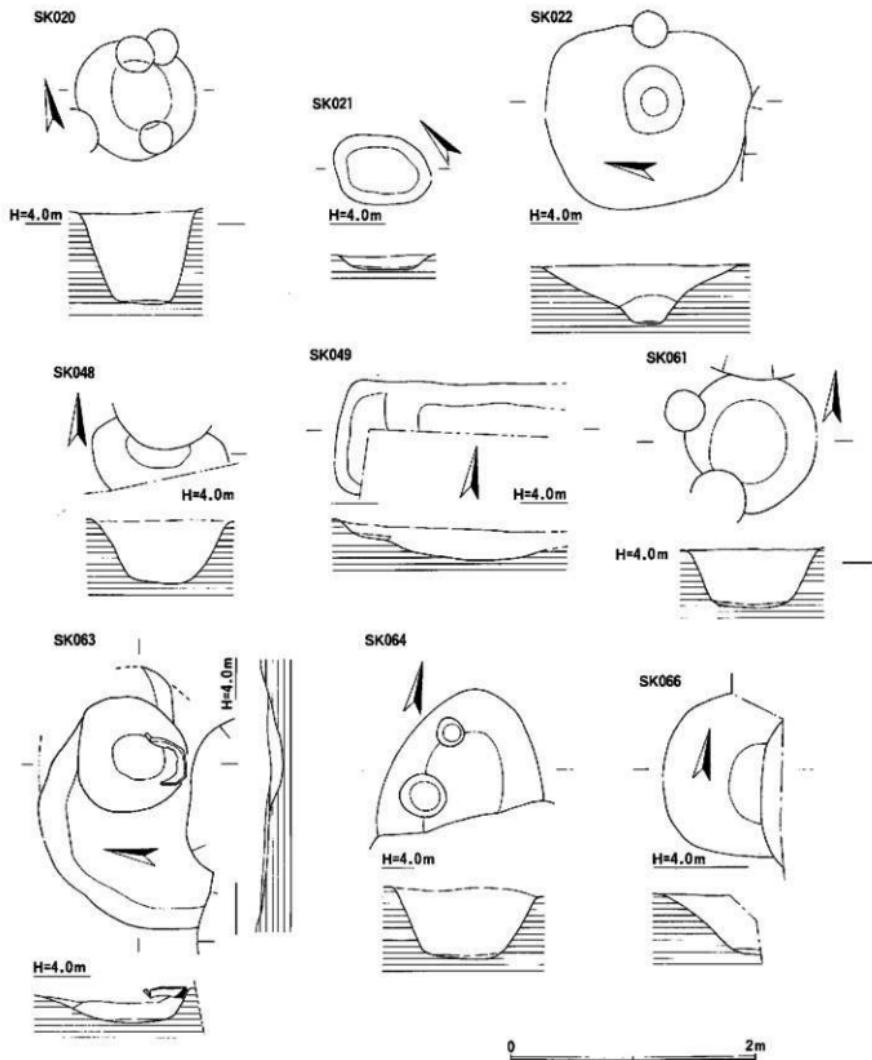
IV面調査区北端で検出する。東西長4m、復元南北長4mの隅丸方形を呈し、壁高40cmを測る。中央部分に竪穴構造しているが袖等は不明瞭である。埋土については第4図の土層を参照。主柱穴は確認できなかった。土師器壺・須恵器蓋壺・鉄器が出土している。

出土遺物(第10図 1～5) 1・2は須恵器蓋壺である。1は擬宝珠形のつまみを有し、大口部外面にはカキ目を施す。2は高台付きの壺である。胴部は屈曲部分から反転して外反し聞く。また高台は底部のやや中程に貼り付けられ、外側に強く張り出す。3は土師器壺である。調整は粗く外面継刷毛、内面は横方向のヘラ削りを行う。胎土は精良で雲母を含み、焼成は堅緻で色調茶褐色を呈する。4・5は鉄器である。4は径4mmの棒状の鉄器で矩形に折れ曲がる。5は釘状の鉄製品である。頭は平べつたく潰れる。棒部分は断面はしっかりとした長方形を呈す。

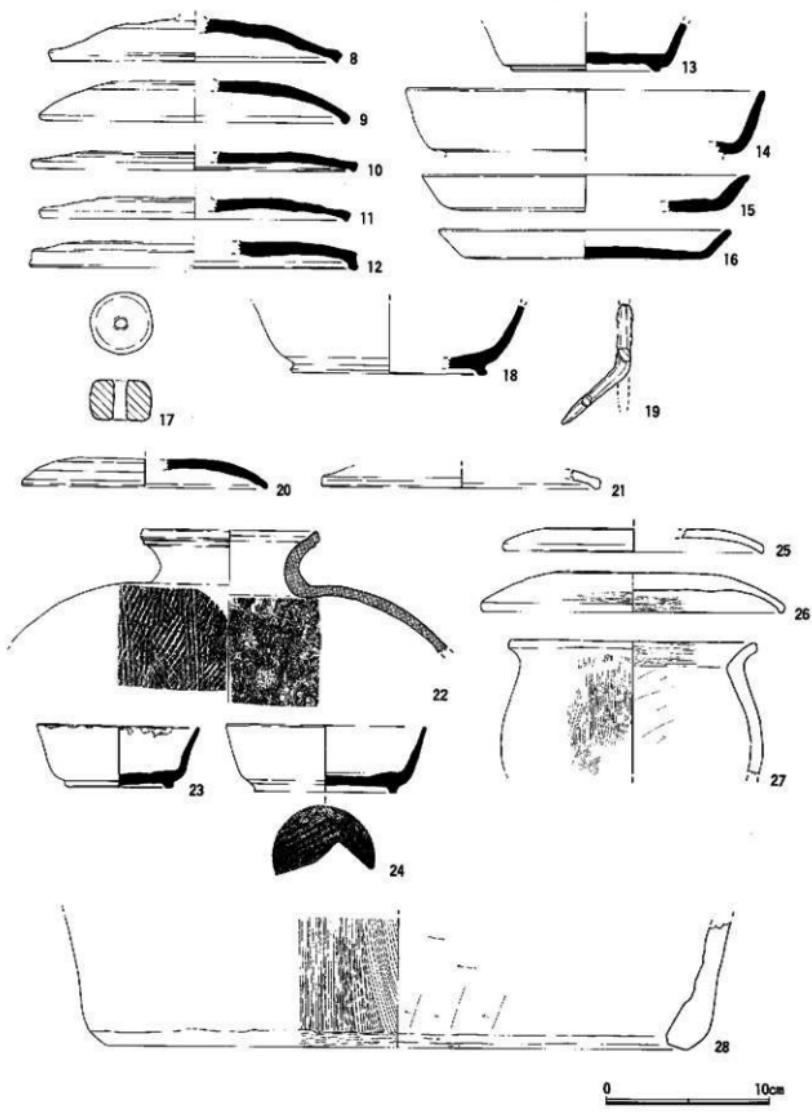
SC027(第9図)



第10図 SC026・065 出土遺物実測図 (1/3)



第11図 SK020・021・022・048・049・061・063・064・066 実測図 (1/40)



第12図 SK020・021・022・048・049・061・063・064・066 出土遺物実測図 (1/3)

IV面調査区西壁沿いで検出する。SB032にコーナー部分を切られる。南北長約3.7m、壁高20cmを測る。埋土は黒褐色砂である。住居内施設は検出していない。遺物は小破片のみであるが土師器・須恵器が出土しており、切り合ひ関係から7世紀代に位置づけられる。

出土遺物(第10図 6) 土師器碗である。内面は同転ナデの後丁寧にナデを行い平滑になっている。胎土には径1~2mm砂粒を含み、焼成は堅緻で色調橙色を呈する。

SK065(第9図)

IV面調査区南側で検出し、SK063に切られる。平面形は不明瞭でやや歪な形となる。壁高5cm程である。住居内施設はなく火所も不明である。上師器甕小破片、袋状鉄斧が出土している。

出土遺物(第10図 7) 床面から15cm程浮いて出土した袋状鉄斧である。長さ7.5cm、幅4.3cmを測る。側身部は丁寧に面取りを行う。また袋部は整った長方形を呈する。

土坑(SK)

SK020(第11図)

III面中央部で検出する。平面径1mの円形を呈し、検出面からの深さ75cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、底面は径50cmの円形で、ほぼ平坦である。埋土は暗褐色砂である。遺物は少量で須恵器甕破片が出土している。

SK021(第11図)

IV面北端で検出する。長軸80cm、短軸55cmのやや歪な長方形を呈す。壁高10cm程で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色砂で、上面から須恵器が多く出土している。

出土遺物(第12図 8~16) 図示したのはいずれも須恵器である。8~12は蓋である。8~11は口縁端部を嘴状に折り曲げ、断面三角形に仕上げる。天井部外面は1/2ほどまで回転ヘラ削りを行う。12は低平な蓋で口縁端部を折り曲げ断長方形に仕上げる。折り曲げた端部はやや外方にふんばる。天井部外面の回転ヘラ削りは屈曲部の手前まで行っている。13・14は高台付き坏である。13は高台が低くつぶれ気味である。また蓋付は外方に開く。14は高台部分から欠損している。15・16は皿である。外底面はやや上げ底気味で全体に回転ヘラ削りを行っている。

SK022(第11図)

IV面北側で検出し、SC026を切る。南北長1.6m、東西長1.5mで平面隅丸正方形を呈す。断面はハ字状に聞く擂鉢形をなし、底面中央に深さ20cmの円形の掘り込みがある。埋土は黒色砂で、遺物は僅少である。

出土遺物(第12図 17) 17は滑石製の紡錘車である。径3.8cm、厚さ2.5cm、孔径9mmを測る。また側面は横方向に多くの擦痕がはいる。

SK048(第11図)

IV面南側で検出する。長軸1.1m、短軸復元長約70cmの平面長円形を呈する。検出面からの深さは50cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は褐色砂である。遺物は土師器・須恵器の小破片が僅かに出土するのみである。

SK049(第11図)

IV面南端で検出する。南側及び東側が擾乱で不明瞭となるが、平面長方形の土坑である。西側に一段高まりを有し、底面は中央に向かって緩やかに盛んでいる。埋土は淡黒褐色砂である。出土遺物には須恵器坏、鉄器がある。

出土遺物(第12図 18・19) 18は高台付き坏である。高台は屈曲部よりやや内側に貼り付けられ、

端部は外方に張り出している。19は折れ曲がった鉄釘であろう。身部は丁寧に鍛打されている。

SK061(第11図)

Ⅲ面中央部分で検出する。平面は径1.1mの円形を呈し、深さ35cmを測る。底面径は60cmで平坦である。埋土は黒褐色砂である。

出土遺物(第12図 20・21) 20は須恵器蓋である。口縁端部は緩く折り曲げている。大井部外面はヘラ切りを行う。21は色調赤褐色を呈する土師器蓋である。小破片で全体の調整等は不明である。須恵器の蓋に比べ胎土が精良で、砂粒は殆ど含まれていない。

SK063(第11図)

IV面南側で検出する。移動式カマドをすえつけた土坑である。削平によりカマドは基底部の一部分しか残存していない。据えつけた前面は10cm程掘りくぼめられ、埋土は熱を受けた暗赤褐色砂で上面には炭層が被っていた。また周囲の浅い溝みには炭が多く含み粘性が強くなった黒褐色砂が広がる。土師器壺・蓋、須恵器壺、陶質土器等が出土する。

出土遺物(第12図 22~28) 22は新羅系の椎形壺である。口縁部は玉縁状に成形し、下端部に明瞭な沈線を有する。胴部外面は平行のタキを行ったのちにカキ目を巡らせている。内面は指押さえにより当て具痕をナデ消している。色調は黒みの強い暗灰色を呈する。胎土には径1~2mm程度の砂粒を多く含み、一般的な新羅焼きに比べ器壁も6mm程度とやや厚めである。23・24は須恵器の高台付き壺である。断面台形の高台が真っ直ぐに貼り付けられる。23は口縁部全体に煤が付着しており、灯明皿様の使用を想定させる。24は外底面にクタキ状の板状圧痕が残る。25・26は土師器蓋である。内面は磨きにより平滑となる。27は土師器壺である。2次的に熱を受け一部赤変している。28は移動式カマドの基底部である。

SK064(第11図)

IV面東側で検出する。SE043に南側を削平されているため形状は不明瞭だが平面長円形を呈すると考えられる。深さは50cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は淡黒褐色砂である。遺物は少量だが土師器・須恵器の蓋等がある。

SK066(第11図)

IV面東端部で検出する。東半を調査区外に延ばすため形状は不明瞭である。深さは50cmを測り、底面は東側に向かって緩やかに深くなっている。土師器・須恵器の小破片が僅かに出土するのみである。

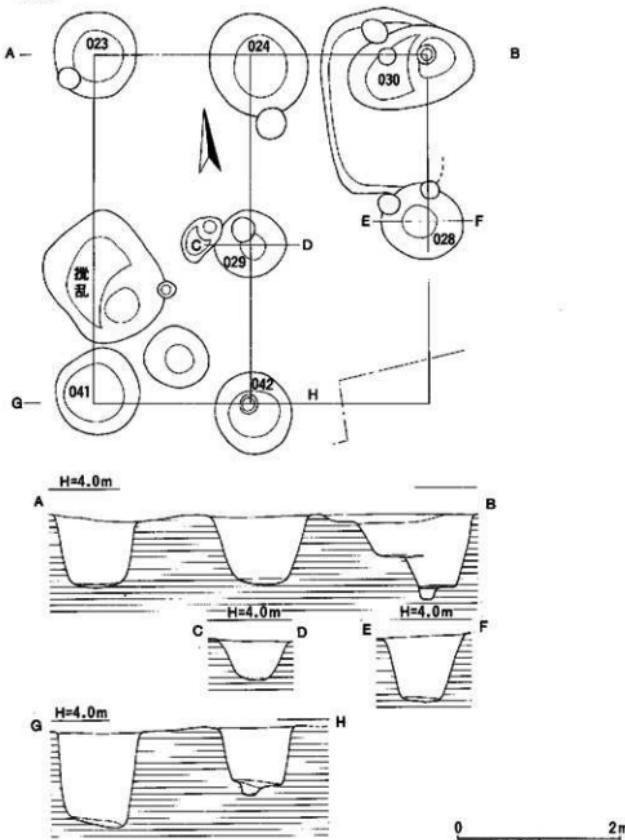
掘立柱建物(SB)

SB032(第13図)

IV面南側で検出するが、本来はⅢ面で検出すべき遺構である。主軸方向をN5°-Eにとる大型の建物である。建物南側は調査区外である。後述するSD062が方向・時期からSB032と一緒に施設と考えられるため、建物の南はこの溝の延長部分で区切られるものと想定される。この場合SB032は1間×2間、建物長は1辺4mの正方形であると考えられる。柱穴の中列及び東列では中央に束状のSP028・SP029が存在するが、西列では擾乱が比較的浅いにもかかわらず対応するピットが認められないことと、SP028・SP029の輪が建物主軸と大きくずれることから、この2本は補助的な柱と考えられる。柱は長円形・円形を呈し、多くは径1m深さ80cm~1mの円筒形をなす。埋土は黒褐色砂を主体とし、SP028・SP029は茶褐色砂である。土師器・須恵器、羽口・鉄器等が出土している。時期的には8世紀前半位に位置づけられる。

また同様な大型建物が南側に隣接する65次調査区でも707号・739号掘立柱建物の2棟検出されてい

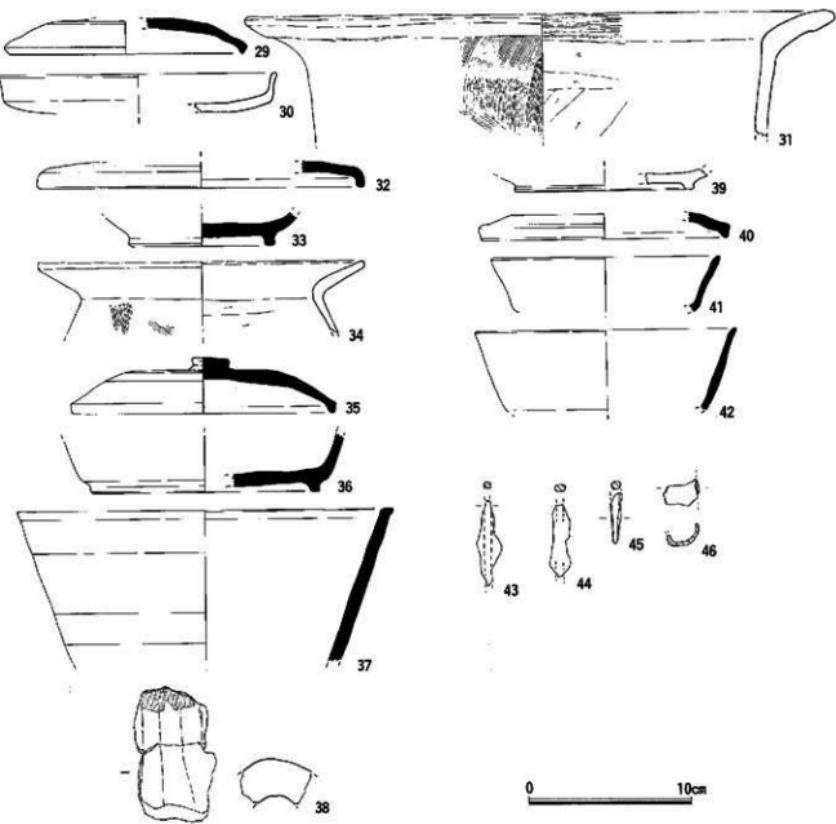
SB032



第13図 SB032 実測図 (1/60)

る。8世紀中頃とされ若干の時期差はあるものの周辺に広がる規格的な古代の建物は注目される。

出土遺物(第14図) 29・30はSP023出土。29は須恵器壊蓋である。つまみは欠失している。口縁部は嘴状に折れ曲がり、断面三角形を呈する。30は土師器の壊である。口縁部は短く直に立ち上がる。外面には赤色顔料を塗布する。31・43はSP024出土である。31は土師器壺である。43は棒状の鉄製品である。鋒化が著しい。44はSP028出土の棒状の鉄製品である。断面は長方形を呈する。32はSP029出土の須恵器蓋である。口縁部は直角に折れ曲がり、端部は四角く納める。33・34・45はSP030出土である。33は須恵器の高台付き壠である。34は土師器壺である。壠部につまみ上げが痕跡的に残り、古墳時代のものかもしれない。45は鋒化の進んだ棒状の鉄製品である。35～38・46はSP031の出土である。35～37は須恵器である。35はボタン状のつまみを有する。37は崩部がハ字状に真っ直ぐ開く鉢である。38は羽口破片である。外面は還元され青灰色を呈する。復元孔径は3cmである。46は用途不



第14図 SB032 出土遺物実測図 (1/3)

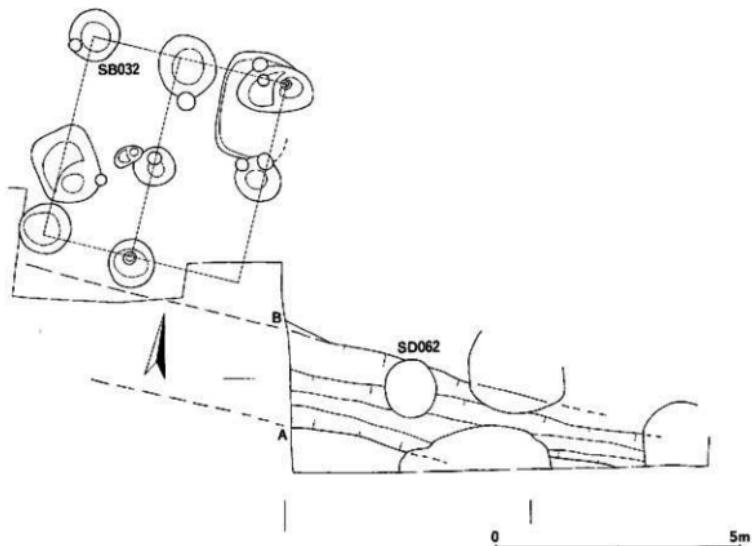
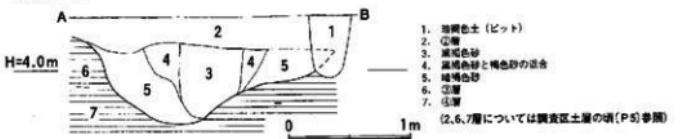
明の鉄製品である。厚さ2mを測る。39・40はSP041出土である。39は土師器の高台付き壺である。胎土は精選され、内外面丁寧に研磨される。40は須恵器の蓋である。41・42はSP042出土である。いずれも須恵器の高台付き壺である。

溝(SD)

SD062(第15図)

Ⅲ面調査区南端で検出する。10層上面から掘り込んでおり、幅1.8m深さ60cmを測る。壁は北側緩やかに立ち上がり、南側はやや急に立ち上がる。掘削方向はSB032の建物方向に一致させ、建物の南

SD062土層



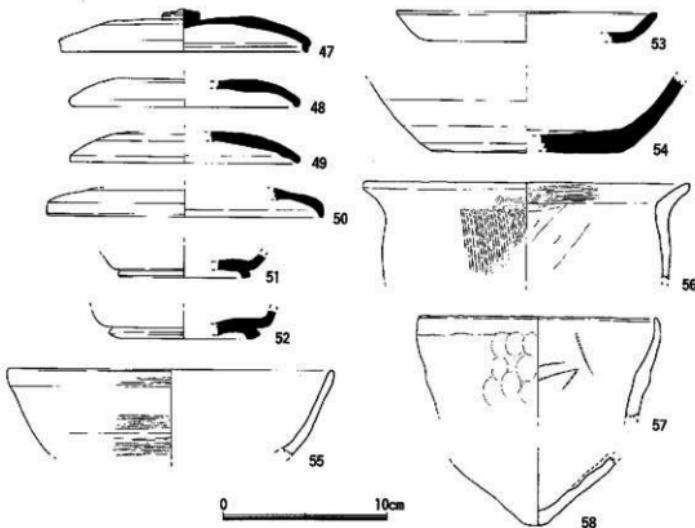
第15図 SD062 土層図及びSB032・SD062 配置図 (1/40, 1/100)

際には直接して掘削されていると考えられる。時期はSB032同様8世紀前半が考えられる。

出土遺物(第16図) 47~54は須恵器である。47~50は蓋である。口縁端部断面三角形をなす48~49と口縁部が「く」字状に折れ曲がる47~50がある。51~52は高台付き壺である。53は皿である。54は鉢の底部であろうか。外底面は回転ヘラ削りを行う。55~58は土師器である。55は杓である。内外面にミガキを施す。56は甕である。57~58は製塙土器である。外面はナデと削りにより、内面は指ナデ及びヘラナデを行う。

(2) 中世

I・II・IIb面で検出し、一部取り残した遺構をIII・IV面で振り上げている。井戸・土坑・土坑墓・ピットを検出する。掘立柱建物については検討を行ったものの建物として抽出する事は出来なかった。調査概要の項でも述べたように遺構の時期は11世紀末~14世紀前半にまとまっている。中でも12世紀中頃~末に属する白磁の出土が主体的に見られる。また13世紀代に多い龍泉窯系の蓮弁を有する碗は少量であるという特徴をもつ。



第16図 SD062 出土遺物実測図 (1/3)

井戸 (SE)

調査区内で井戸は計4基検出している。このうち3基は調査区境界にかかり、完掘できていない。各井戸に切り合い関係はなく、時期的にも近接している。

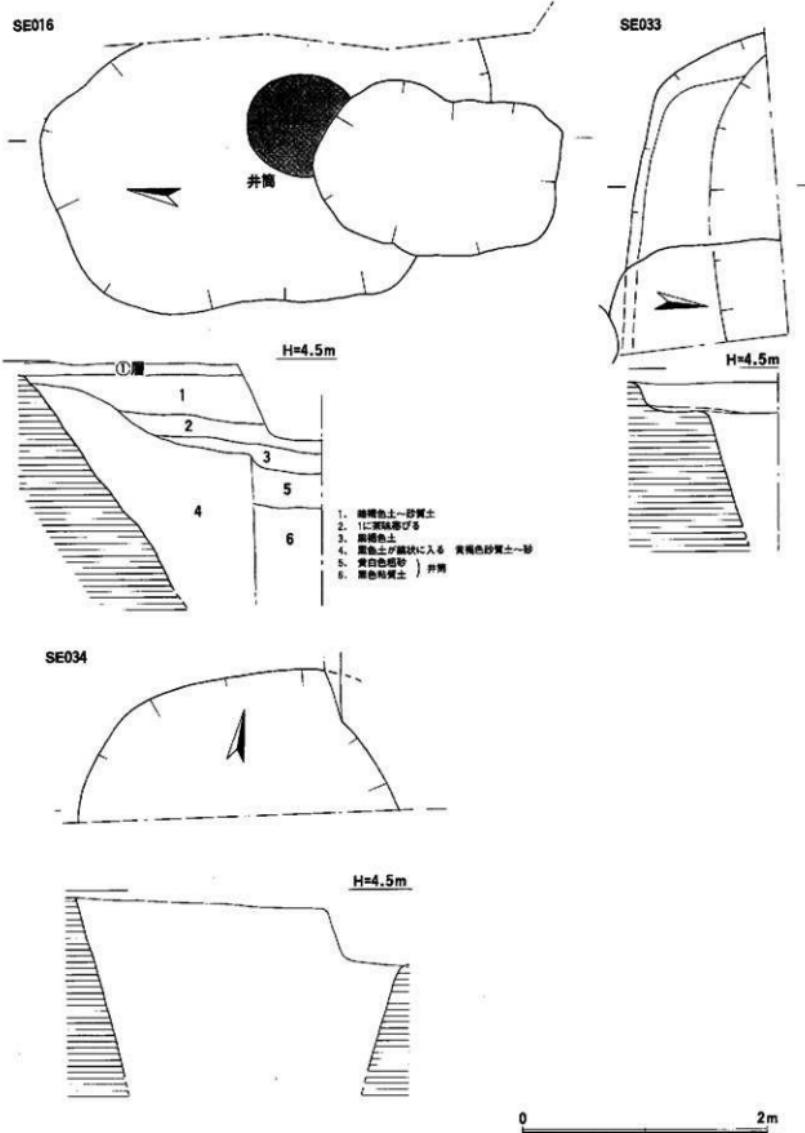
SE016(第17図)

Ⅱ面北側で検出する。東側部分を調査区外に広げるため西半分を中心として掘り下げを行うが、完掘には至っていない。掘り方上面は $3.6m \times 2.2m + \alpha$ を測り、長円形を呈する。井筒はやや西側により、径80cmを測る。井筒の木材は消失している。白磁碗・皿、青磁碗・皿、陶器鉢・壺・水注、土器小皿、瓦器碗、東播系鉢、瓦、土鍋が出土する。12世紀後半に位置づけられる。

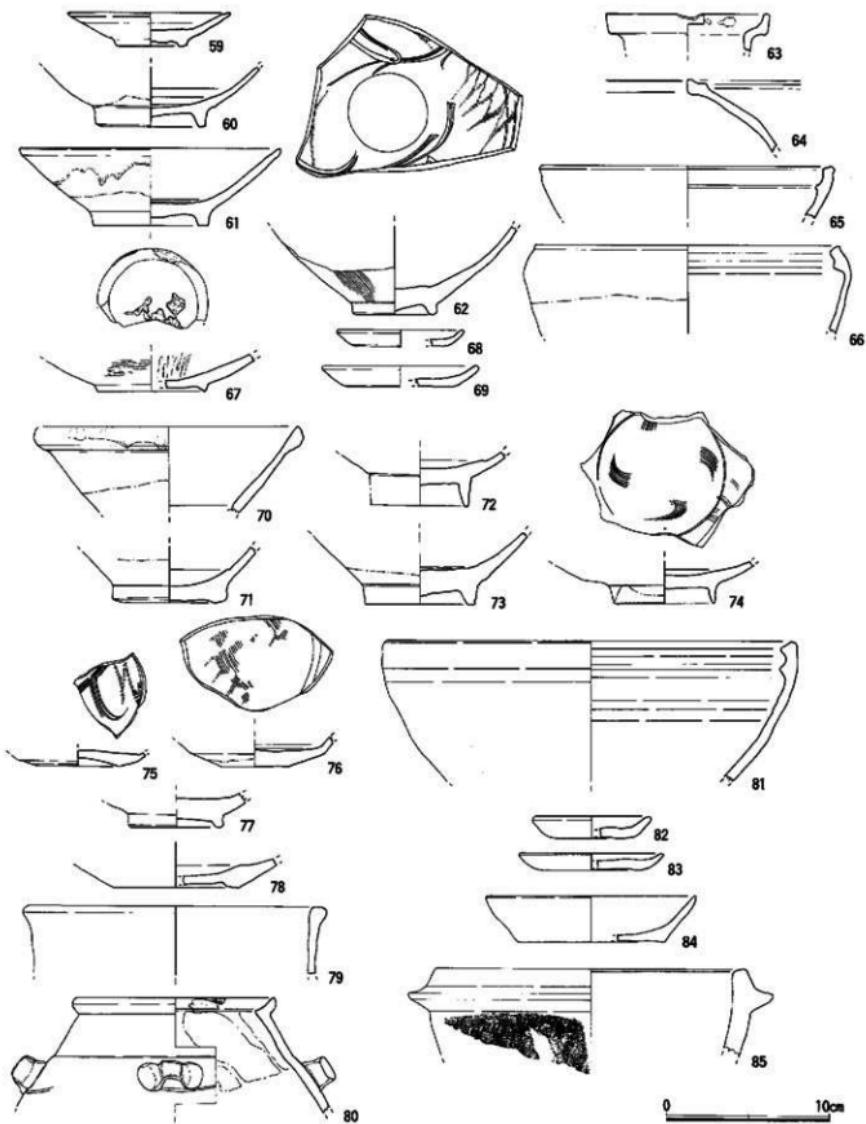
出土遺物(第18図 59 ~ 69) 59 ~ 61は白磁である。いずれも内底面の釉を輪状に剥ぎ取る。61は高台骨付に砂目跡が残る。また61は2次的に被熟し釉が発泡している。62は同安窯系青磁碗である。細かい横目による文様が施される。63~66は陶器である。63・64は壺である。63は二重口縁をなす。内側表面はガラス化し、口縁端部に注口状の窪みが見られる。生産行為にもちいられたものであろうか。64は無頸壺である。65・66は鉢である。共に口縁部内面に蓋受け状の段を有するが66は口縁部が内面に屈曲する。67は瓦器碗である。比較的丁寧なミガキが行われる。68・69は上部器の小皿である。外底面には糸切りが行われる。

SE033(第17図)

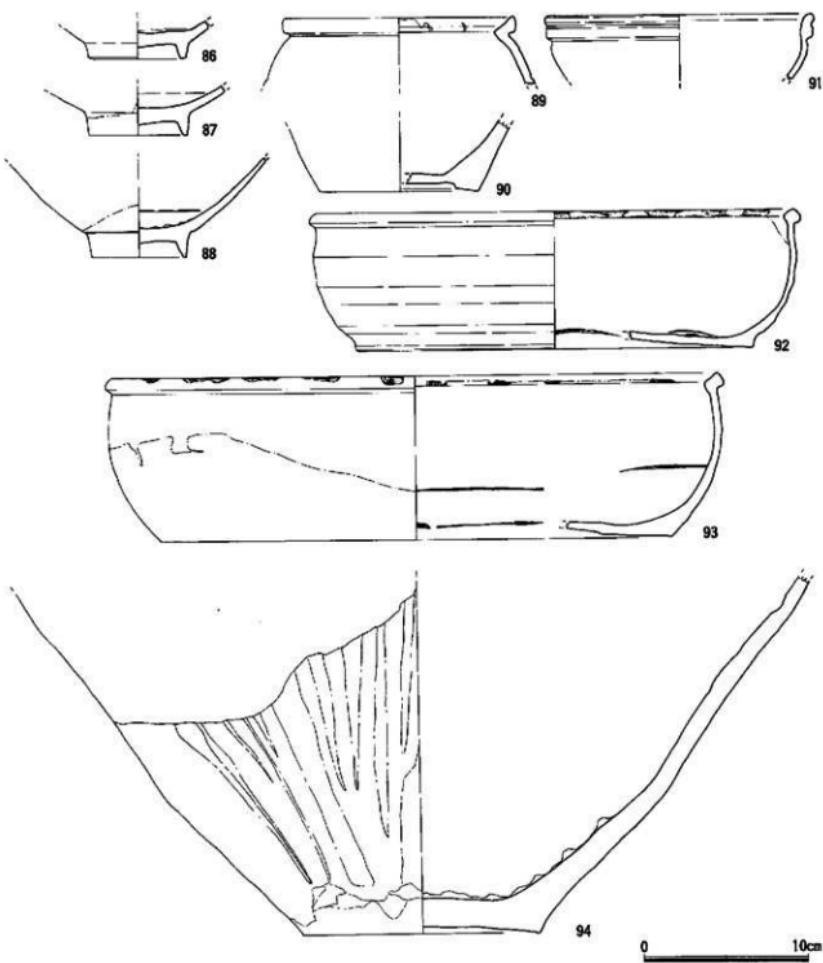
Ⅱ面東側で検出する。南側1/4程度検出したのみで、完掘していない。掘り方から内側に50cmくらい迄は深さ20cmで1段平坦面を有し、これより北側から崖が直立し深くほりこまれる。切り合いもししくは井戸廐棄以降に廐棄坑として使用された可能性があり、平坦面迄の出土遺物を「033」、これより



第17図 SE016・033・034 実測図 (1/40)



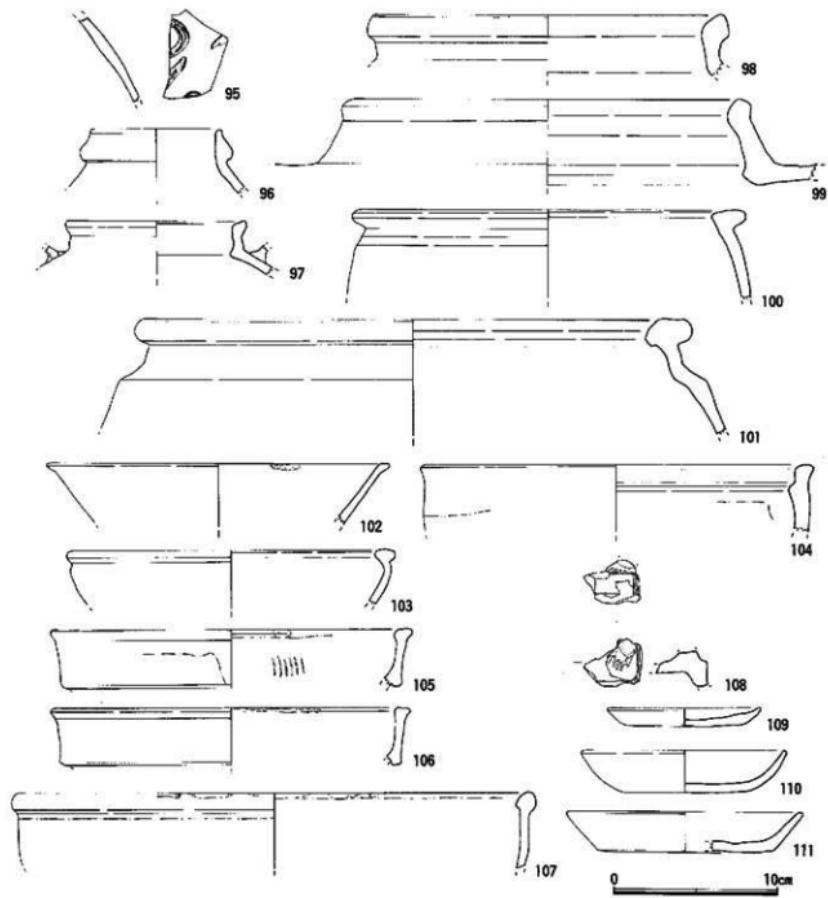
第18図 SE016 出土遺物実測図及び SE033 出土遺物実測図 1 (1/3)



第19図 SE033 出土遺物実測図 2 (1/3)

深くなる掘り込み部分を「033b」で取り上げを行う。埋土は033部分が黒褐色粘質土、033b部分が汚れた黒褐色砂質土である。白磁、青磁、陶器、土師器壺・小皿、瓦器、滑石製石鍋が出土している。033bは12世紀後半、033は13世紀まで下る。

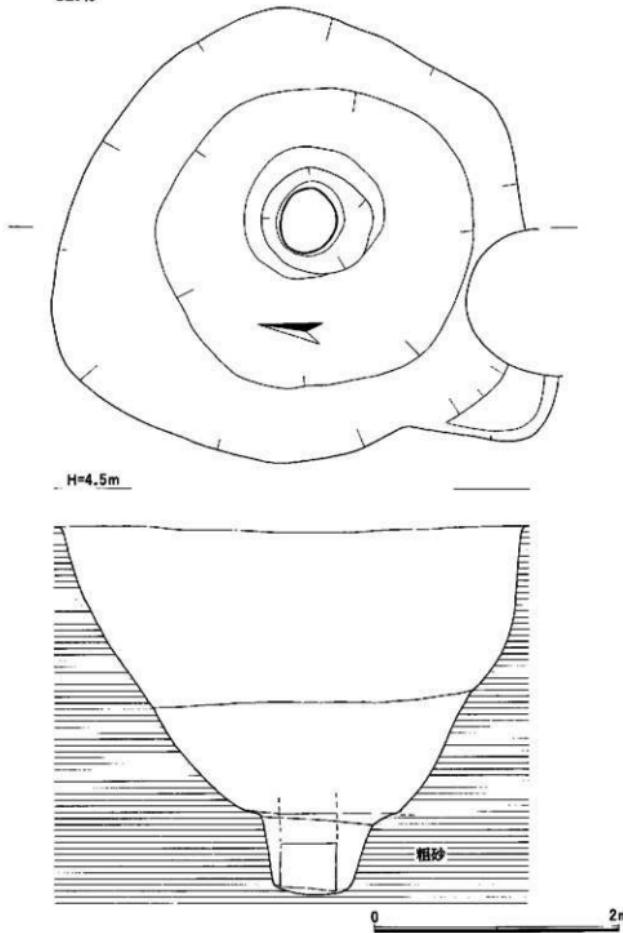
出土遺物(第18図 70~85・第19図) 70~85は033出土上、86~93は033bで取り上げた遺物である。70~74は白磁である。73は内底の釉を輪状に剥ぎ取る。74は内底に櫛目の花文を施す。75・76は同



第20図 SE034 出土遺物実測図 (1/3)

安窯系青磁の皿である。75は上げ底を呈す。77は龍泉窯系の青磁碗である。全面に施釉され、高台置付～内面に日跡として使用されたレンガ色の土が付着する。78～81は陶器である。78～80は壺である。80には耳部が貼り付けられる。81は鉢である。82～84は土師器小皿・壺である。外底面はいずれも糸切りである。口径はそれぞれ6.9cm、8.6cm、12.7cmである。85は錫が巡る滑石製石鍋である。

86～88は白磁である。86は内底の釉を輪状に剥ぎ取る。86は胎土は白色、87は胎土は黄褐色を呈する。89～94は陶器である。89・90は壺である。90は上げ底となる。92・93は盤である。口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。94は壺である。緑釉が施され、内底には砂目跡が残る。

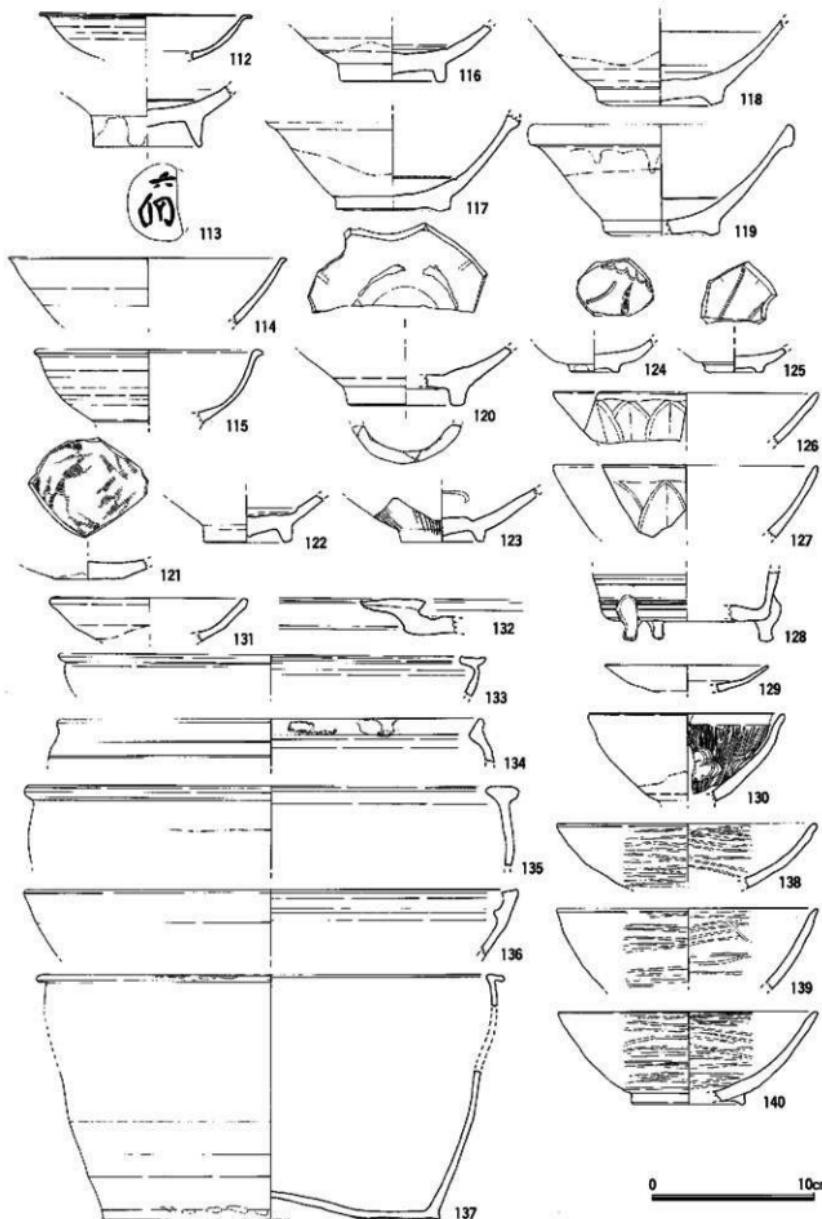


第21図 SE043 実測図 (1/40)

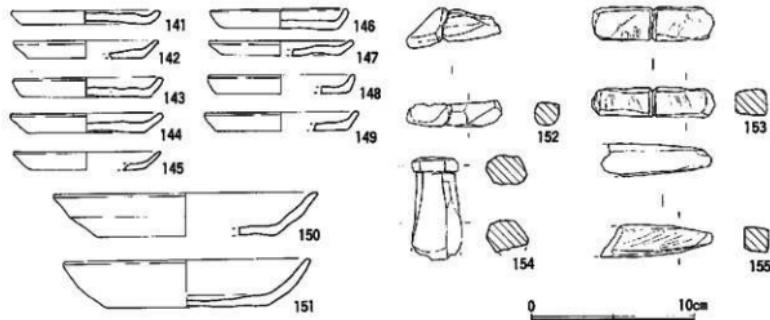
SE034(第17図)

II面南端部で検出する。南半部分は調査区外に広がり、完掘できていない。掘り方復元径約3mを測る。埋土は灰褐色砂で井筒部分は調査区外に存在するものと考えられる。白磁、青磁、陶器、土師器坏・小皿、東播系鉢、瓦が出土している。

出土遺物(第20図) 95は青磁壺破片である。釉面は暗緑灰色を呈し、外面に鉄絵を施す。96~107は陶器で、器種が豊富である。96~99は壺である。97は肩部に耳部を貼り付ける。100・101は壺である。



第22図 SE043 出土遺物実測図1 (1/3)



第23図 SE043 出土遺物実測図 2 (1/3)

102~104は鉢である。105・106は擂鉢である。107は盤で口縁端部内外面に目跡が残る。108は陶製品である。人物の左足が認められ、台上に人物を配する製品の台座部分と考えられる。表面には緑釉を施す。109~111は糸切りの土師器である。口径は順に9.2cm、12.2cm、14.2cmである。

SE043(第21図)

II面東側で検出する。平面径3.8mの円形を呈し、検出面からの深さ3mである。検出面から2.3m迄は擂鉢状に掘り込まれ、その底面から径90cm深さ60cmほど掘り込み、この部分で井筒の痕跡を検出する。埋土は汚れた淡黒色砂～褐色砂である。白磁、青磁、天目、青白磁、陶器、土師器壊・小皿、瓦器壊、瓦、砥石、滑石製品が出土する。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

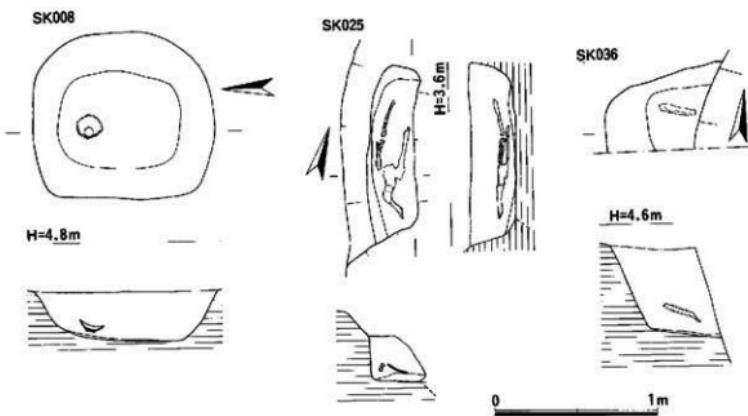
出土遺物(第22・23図) 112~119は白磁である。112は皿である。口縁端部を外方に引出し、平坦面を作る。113~119は碗である。113は外底面に「六綱」の墨書が残る。118は内底の釉が輪状に剥ぎ取られる。120~128は青磁である。120は越州窯系の碗である。釉調は濃緑色で全面に施釉する。内面に片彫り風の旋線がある。121~123は同安窯系青磁である。124~128は龍泉窯系青磁である。128は香炉である。釉調は透明感のある灰緑色で、外底面が露胎となる。129は青白磁の皿である。130は天目碗である。内面には全体に文様が施されるが、顔料が剥落し痕跡のみが残っている。顔料は金色のものであろうか。138~140は瓦器壊である。138は内面が被熱し煤が付着している。131~137は陶器の皿・壺・鉢・盤である。137はSK050出土資料と接合する。141~151は外底面糸切りの土師器である。152~155は滑石製品である。この他縦耳の石鍋が出土している。

土坑墓(SK)

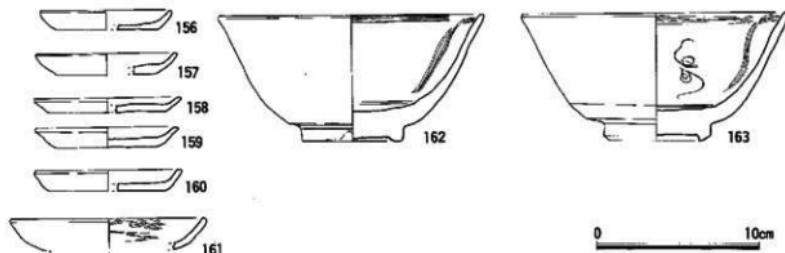
形態・人骨の出土などから埋葬遺構と判断できたものをここで報告する。人骨はいずれも遺存状態が不良で取り上げは行えなかった。

SK008(第24図)

I面中央部分で検出する。長軸1.1m、短軸1mを測る隅丸長方を呈する。底面は北側に向かってやや高くなっている。埋土は白色の小ブロックを含む締まりのない土である。また底面北側に青磁碗(163)が据えられている。この他埋土中から土師器壊・小皿、瓦器、碗等が出土する。12世紀中頃～後半に位置づけられる。



第24図 SK008・025・036 実測図 (1/30)



第25図 SK008 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物(第25図 156~163) 156~160は外底面糸切りの上部器小皿である。口径は7.9cm~8.9cmである。161は瓦器の壊である。内面はミガキ、外面にはナデを行う。162・163は龍泉窯系青磁の碗である。内面に割花文を有する。163底面に据えられたものである。

SK025(第24図)

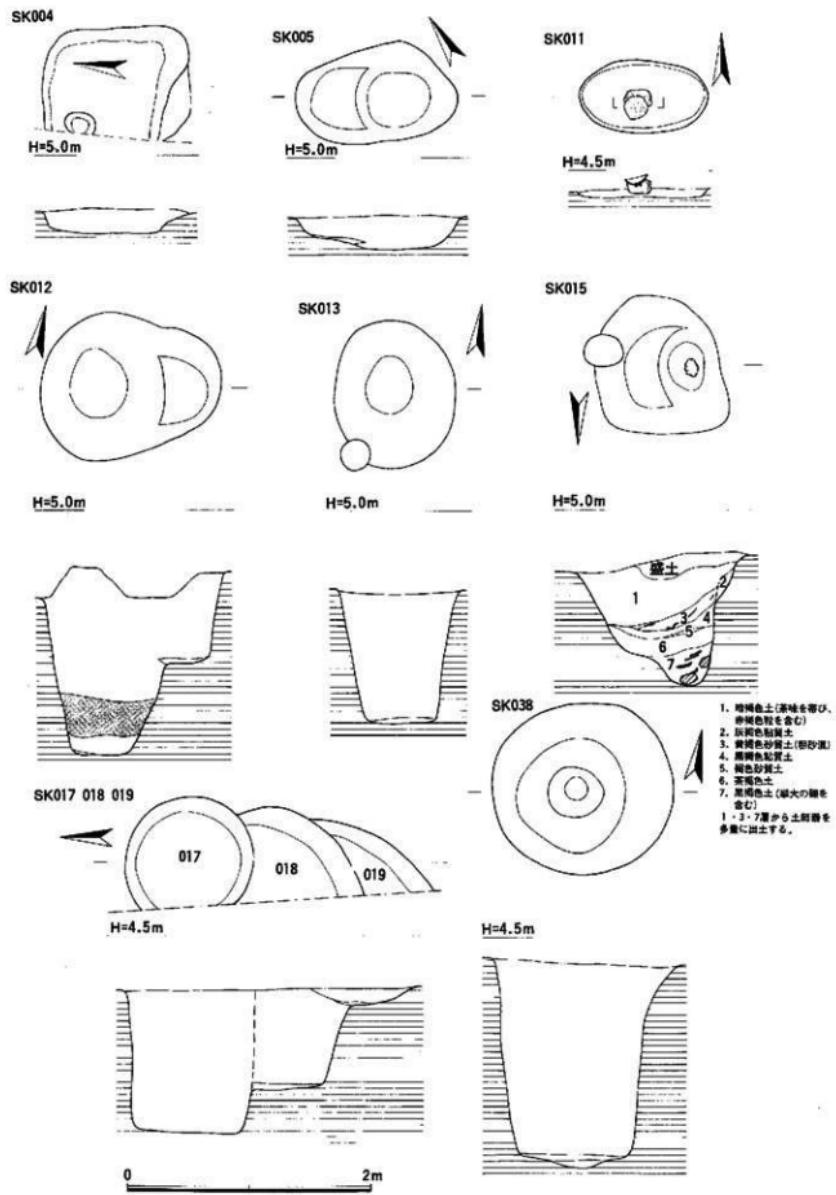
調査区北側で検出し、SE016に削平される。北側を頭位にした人骨の右側上半身が残存している。木棺の痕跡はなく、土坑墓と判断した。遺物は出土していない。

SK036(第24図)

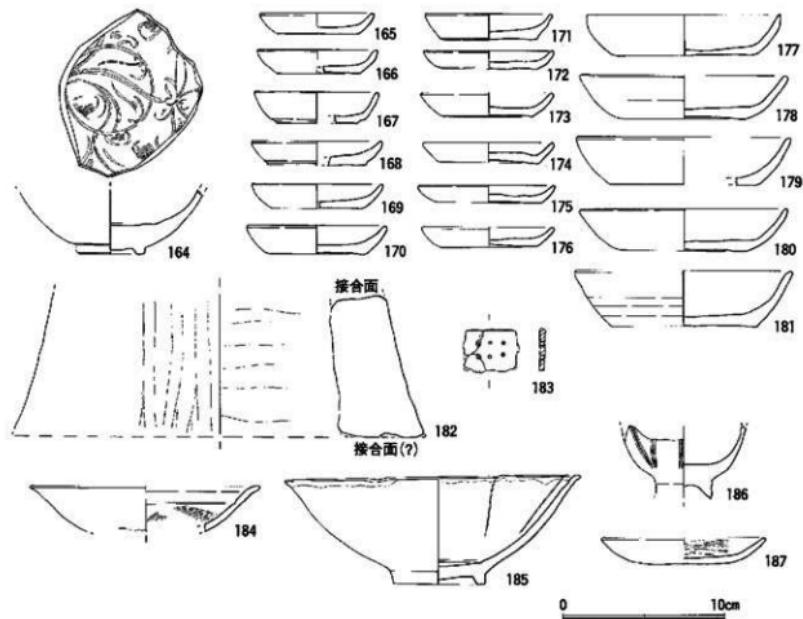
調査区南端部で検出する。大部分をSE034に削平され、人骨の一部分のみが検出された。埋土は淡黒色砂で、白磁破片が出土する。

土坑(SK)

SK004(第26図)



第26図 SK004・005・011・012・013・015・017・018・019・038 実測図 (1/40)



第27図 SK004・005・011 出土遺物実測図 (1/3)

I面北側で検出する。掘り方は1.2m×約1mの長方形を呈し、深さは20cmを測る。埋土は焼上土の混ざった暗褐色土である。白磁、青磁、陶器、糸切りの土師器壺・小皿、瓦器碗が出土している12世紀中頃～後半に位置する。

出土遺物(第27図 164) 龍泉窯系青磁碗である。高台は小ぶりで、疊付の一部まで施釉される。外面は無文で、内面に劃花文を施す。

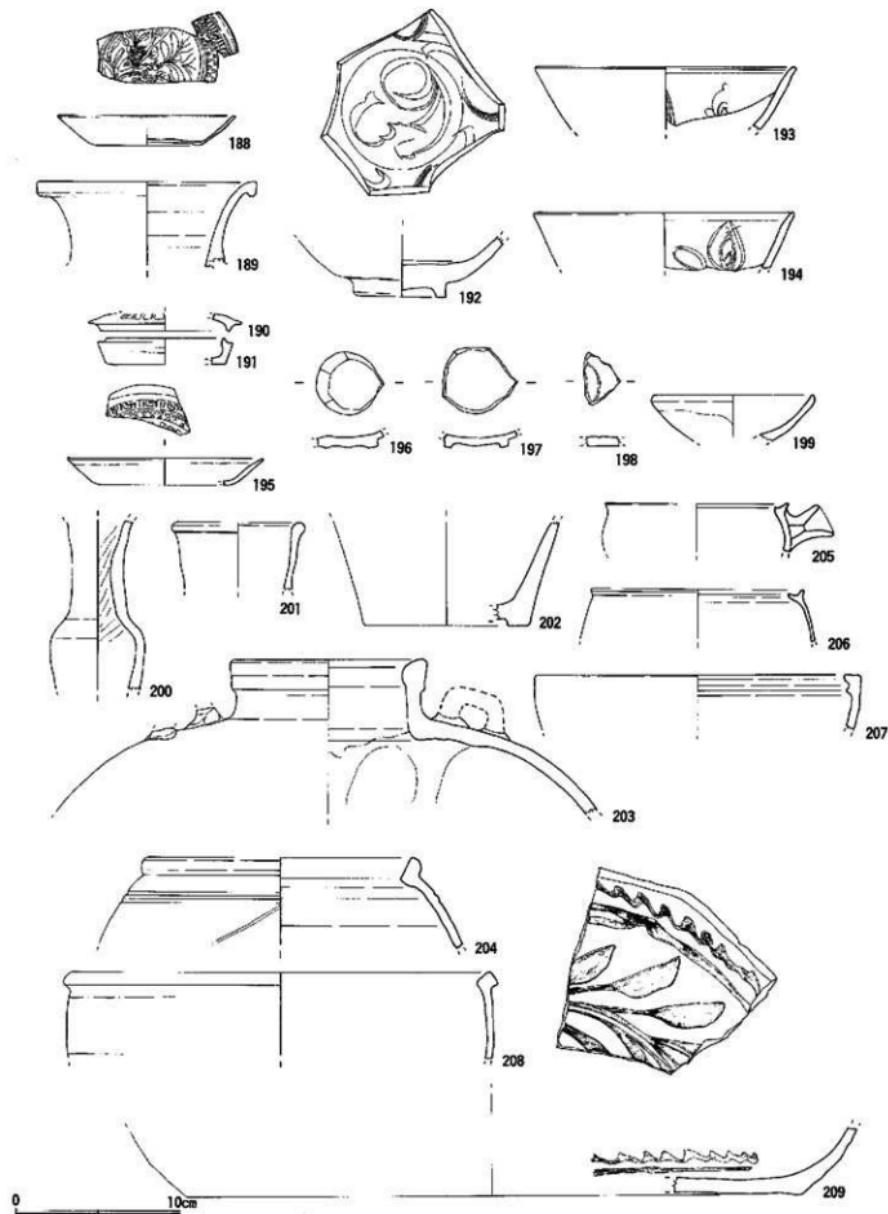
SK005(第26図)

I面北側で検出する。東側が一段深く窪んでいる。埋土は焼上土の混ざった暗褐色土である。土師器壺・小皿が廃棄されていた。その他白磁、青磁、緑釉陶器、瓦器碗、釘、飾り具状の鉄製品が出土している。13世紀前半～中頃か。

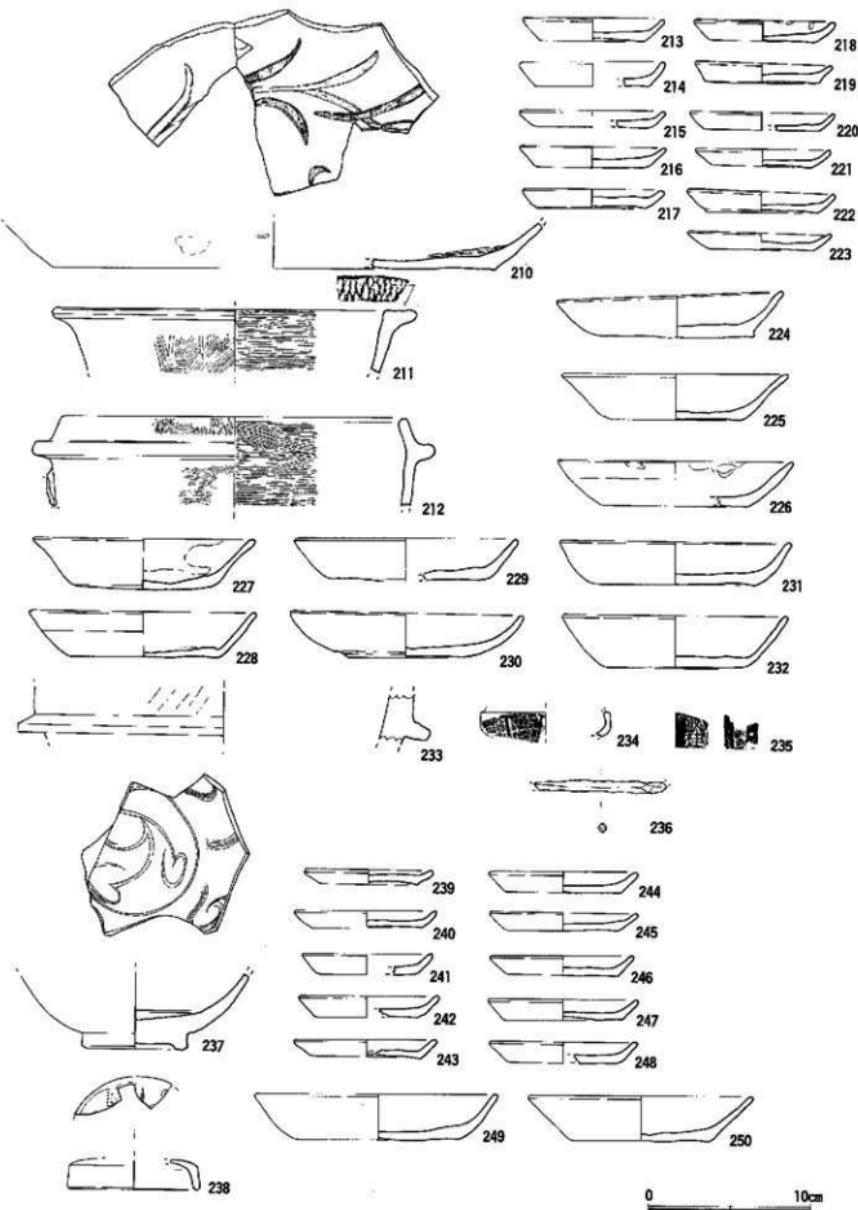
出土遺物(第27図 165～183) 165～181は土師器壺・小皿である。壺口径は11.8cm～13.2cm、小皿口径は6.9cm～8.4cmである。外底面はいずれも糸切りによる。182は円筒形状の土製品である。器壁3.7cmを測り、底部はやや幅広がりとなり器壁5cmである。胎土は精選され砂粒は非常に少ない。2cm程度の粘土帯を輪積みにして成形し、外面は丁寧な縱方向のヘラミガキ、内面は横方向の指ナデを行う。痕跡的に赤色顔料の塗布も観察される。183は飾り金具状の鉄製品である。

SK011(第26図)

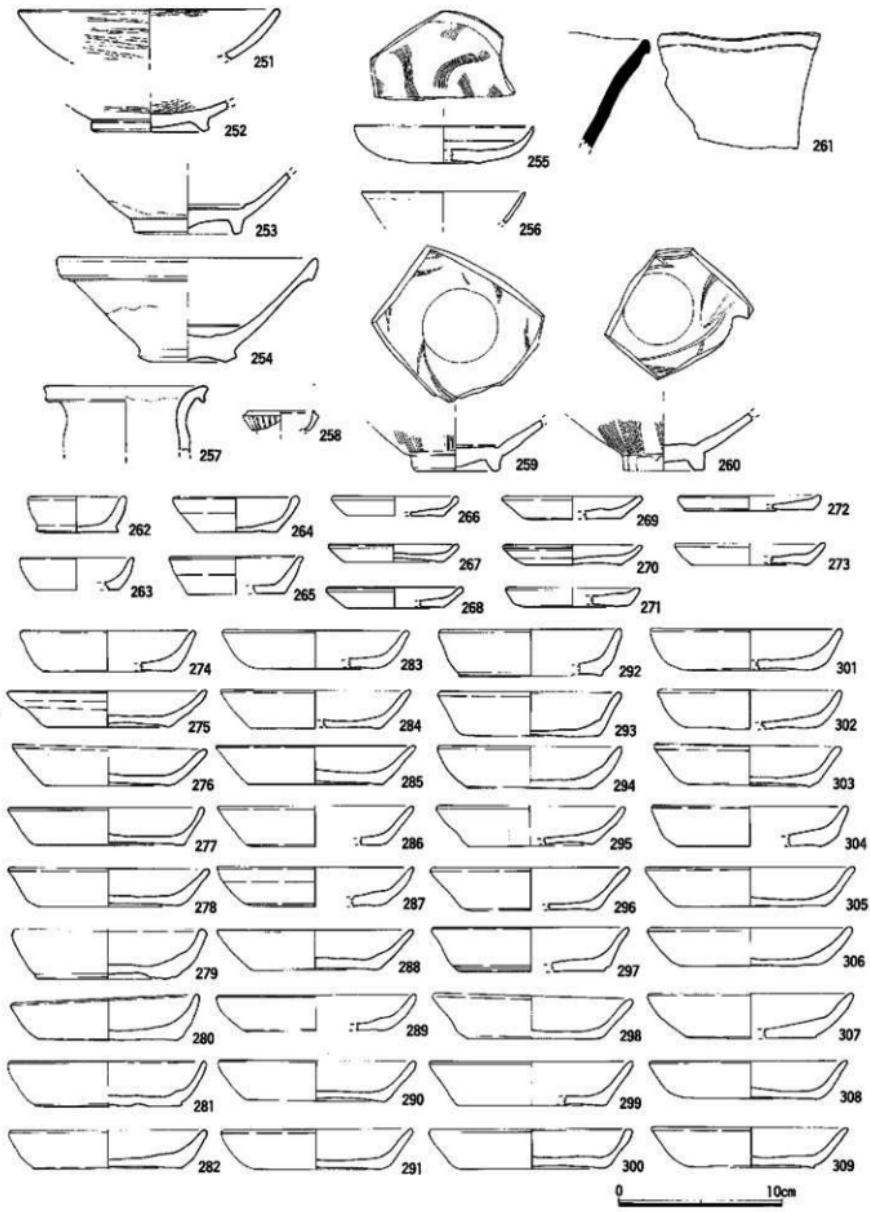
II面中央部で検出する。1.1m×0.6mの長円形を呈し、深さは7cmである。土坑中央に20cm強の角



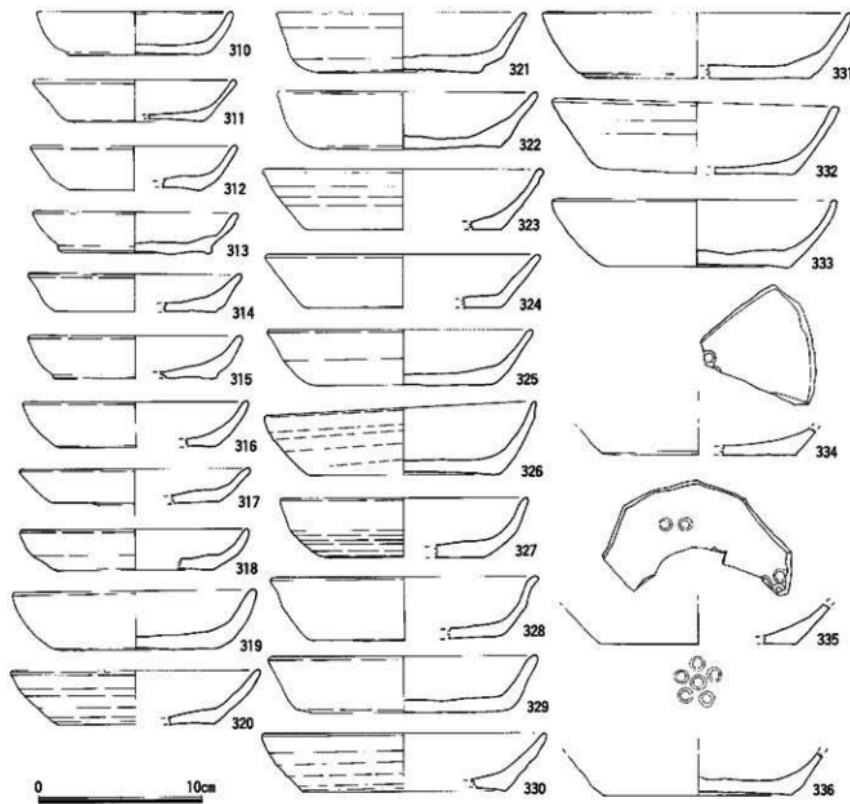
第28図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)



第29図 SK012 出土遺物実測図 2 (1/3)



第30図 SK013 出土遺物実測図及び SK015 出土遺物実測図 1 (1/3)



第31図 SK015 出土遺物実測図 2 (1/3)

環が据えられ、これに寄り掛かるように白磁碗(185)が据えられている。埋土は焼土粒を含む暗褐色土である。白磁、青磁、陶器、土師器壊、瓦器が出土する。12世紀代であろう。

出土遺物(第27図 184~187) 184・185は白磁である。184は皿で内面に櫛描きの文様を有する。185は口縁部が輪花となる碗である。また輪花の刻みから内面に白堆線をいれる。186は陶器の碗である。187は瓦器の皿である。

SK012(第26図)

I面北側で検出する。SK005に切られる。平面的には長円形の土坑として検出したが、東側の平坦面より掘り下がる部分は明らかに埋土が異なっていた。このため2基の切り合いの可能性を考え、検出土面から70cmの平坦面までを012で取り上げ、これ以下の円筒形の掘り込み部分を012bで取り上げ

行つた。埋土は012部分は白色ブロックを含む黒色土で012b部分は締まりのないふかふかの黒褐色土である。出土遺物には白磁、青磁、陶器、青白磁、天目、土師器坏・小皿、土鍋、石鍋、滴下津、釘、青銅製品がある。また012bの下位から貝殻、獸骨が大量に出土し(図面アミ部分)混土貝層状を呈している。012は12世紀後半~13世紀初頭、012bは12世紀中頃~後半に位置づけられる。

出土遺物(第28・29図) 118~236は012出土、237~250は012b出土である。

188~191は白磁である。188は口禿の皿であるが混入の可能性が高い。内底には印花の魚藻文、胴部には雷文帯と花文を施す。190~191は合子の蓋と身である。蓋の外面には菊花文を配す。身は胴部下半から露胎となる。192~194は青磁碗である。195は青白磁の口禿の皿である。文様は188と同じである。196~197は天目碗の高台部分より上を割り取ったものである。198は綠釉陶器破片で、外面露胎となる。199~210は陶器である。211~212は上師質鍋である。211は口縁部上端面にヘラの刺突痕が残り、接合部分の剥落と考えられる。213~232は外底面糸切りの土師器小皿・坏である。233は滑石製の石鍋。234は土師質の合子の身状の破片である。外面に繩目状の文様が施される。235は厚さ5mmの須恵質の板状品である。内外面に文字があり、内面は判読不能で外面には「叙(?)桂」と陽刻される。236は棒状の青銅製品である。237は青磁碗。238は青白磁の合子蓋である。239~250は外底面糸切りである。

SK013(第26図)

II面中央部で検出する。平面1.2m×1mの長円形を呈し、深さ1.1mを測る略円筒形の土坑である。壁は真っ直ぐ落ち込み、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂質土である。白磁、青磁、陶器、糸切りの土師器坏・皿、瓦器が出土する。12世紀後半代か。

出土遺物(第30図 251・252) 共に瓦器碗である。251は外外面へラミガキを行うが内面はナデによりミガキの痕跡が消える。252は高台がしっかり立ち上がる。

SK015(第26図)

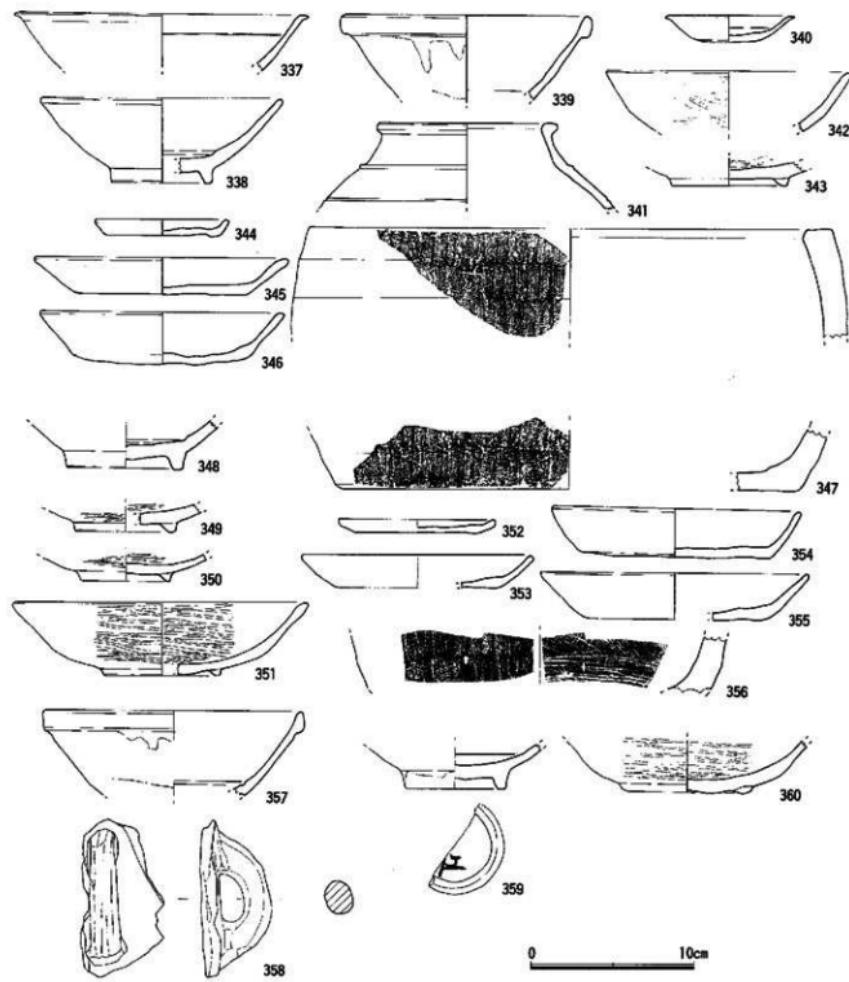
II面中央南側部分で検出する。土層観察からI面の遺構と考えられる。東側に一段平坦面を有し、西側を深く掘り下げる。基底部には掌大の舟碟を据えている。3層及び7層から土師器坏を主体とした遺物が多量に出土する。7層出土坏が3層出土分に比べ比較的完形の製品が多い。また陶磁器の出土は僅少で、上師器の廃棄土坑と考えられる。上師器坏には梅花状の印文を有する大型の製品が見られる。また他には白磁、青磁、瓦器、東播系鉢、獸骨、釘が出土する。13世紀後半~14世紀に位置づけられる。

出土遺物(第30図 253~309、第31図) 253~258は白磁である。253は内底の釉を輪状に剥ぐ。259~260は同安窯系の青磁である。261は東播系鉢である。262~336は土師器小皿・坏である。全て外底面は糸切りである。334~336の大型の坏内底には印文で梅花文が施される。

SK017(第26図)

III面北側で検出する。平面径1m、深さ1.2mを測る円筒形の土坑である。底面は平坦で、SK013に形態が類する。埋土は上半2/3は茶褐色土、以下は黒色土である。SK018を切るが検出面から40cm迄は切り合いを確認できず、遺物をまとめて取り上げている。白磁、陶器、土師器坏、瓦器碗、滑石製石鍋、釘が出土する。

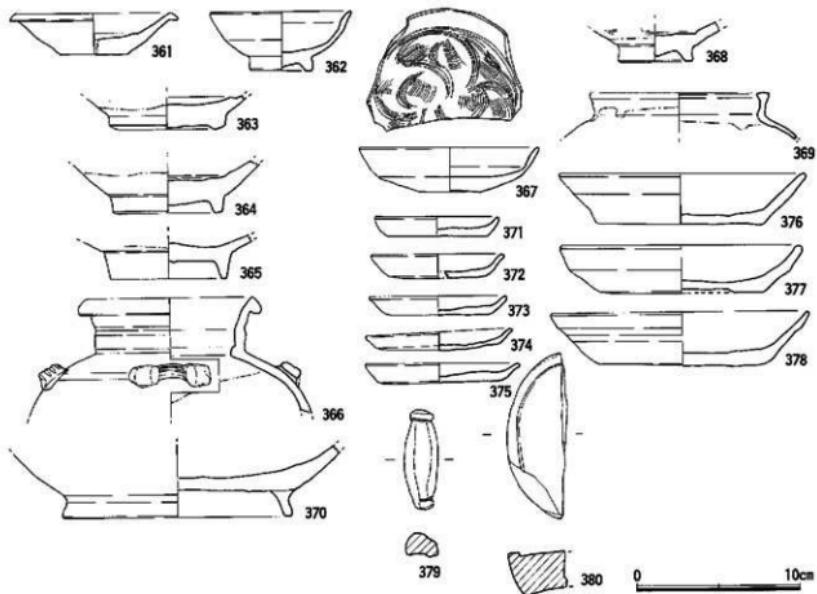
出土遺物(第32図 337~356) 337~347は017・018でまとめて取り上げた遺物である。337~339は白磁、340は青白磁皿、341は褐釉陶器壺である。342~343は瓦器碗、344~346は上師器である。347は滑石製石鍋である。348~356は017出土である。348は内底輪状に剥ぐ白磁である。349~351は瓦器碗である。352~355は土師器である。356は滑石製石鍋である。



第32図 SK017・018・019 出土遺物実測図 (1/3)

SK018・SK019(第26図)

SK017に北側を削平される。018・019の埋土は共に茶褐色土で平面的には切り合い関係を確認することが出来なかった。一連の造構とすれば、南側に一段平坦面を有する土坑となる。遺物は平坦面部



第33図 SK038 出土遺物実測図 (1/3)

分を019で取り上げ、017上層部分と共に掘り下げる残りの底面から40cmを018で取り上げを行った。白磁、瓦器椀、東播系鉢、瓦等が出土している。

出土遺物(第32図 357~360) 357・358は018出土。357は白磁である。358は上師質の把手で内面は刷毛目を施す。359・360は019出土。359は白磁で外底に墨書きあり。360は瓦器椀である。

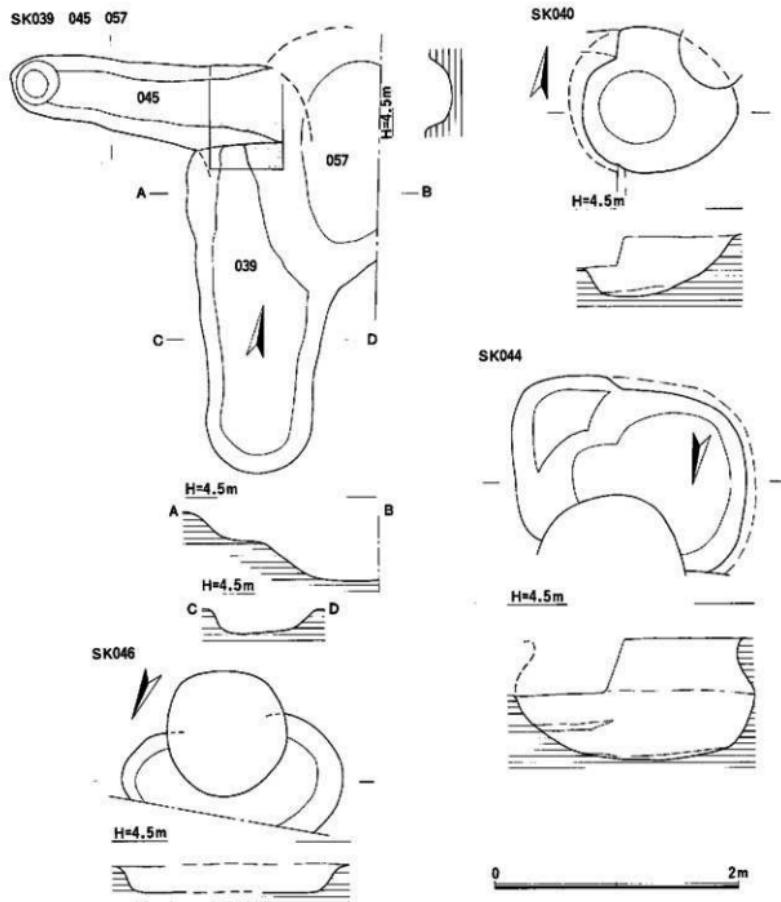
SK038(第26図)

II面南端で検出する。平面径約1.4mの円形を呈し、深さ1.7mを測る。底面中央が径40cmで深さ7cm程浅く窪む。埋土は黒褐色砂質土で、中央の窪み部分は黒色の粘質土がへばりついている。白磁、青磁、青白磁、陶器、土師器壺・皿、瓦器椀、東播系鉢、瓦、石錘、硯、釘等が出土する。12世紀中頃～後半に位置する。

出土遺物(第33図) 361～366は白磁である。364は内底輪状に剥ぎ取る。367・368は青磁。369は陶器壺である。370は土師器の高台壺皿である。371～378は外底糸切りの土師器である。379は滑石製石錘で25gを測る。380は石製の硯である。

SK039(第34図)

II面東端で検出する。深さ20cm程の溝状の土坑である。埋土はしまりのない茶褐色土でSK045とは埋土が異なるが、切り合い関係は不明瞭である。また北側は更に30cm程深くなり、長円形状の土坑となるが、これはSK057として遺物を取り上げる。白磁、青磁、青白磁、陶器、糸切り土師器壺・皿、瓦、滴下津等が出土する。



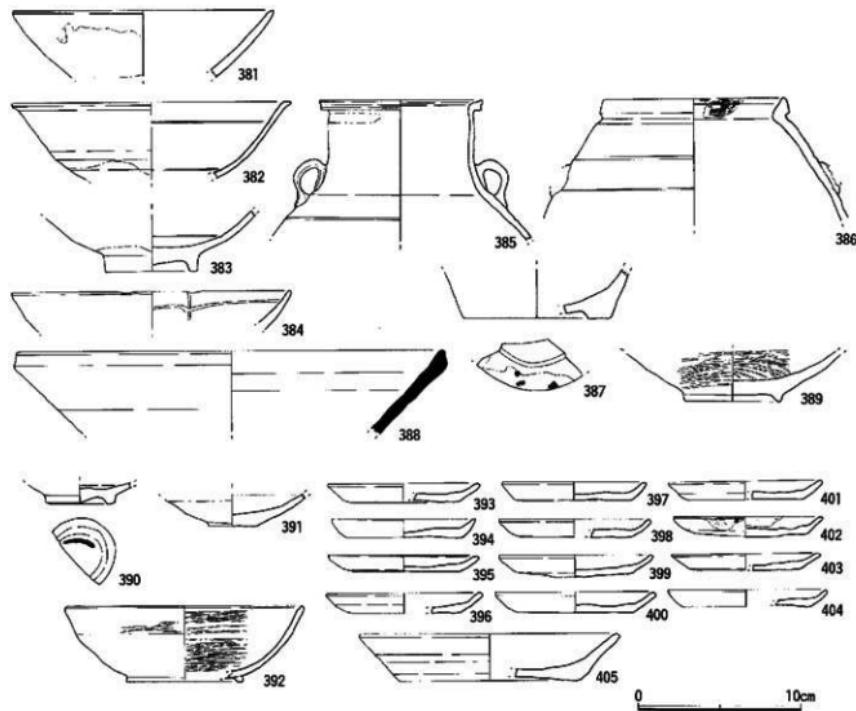
第34図 SK039・040・044・045・046 実測図 (1/40)

出土遺物(第35図 381) 白磁碗である。釉調は淡灰白色を呈する。

SK040(第34図)

II面東側で検出し、SE043を切る。径1.2m×1.5mの長円形を呈し、深さ45cmを測る。埋土は灰褐色土である。白磁、青磁、陶器、糸切り土師器壺・皿、土師器碗、瓦器、東播系鉢が出土する。

出土遺物(第35図 382~389) 382・383は白磁碗である。384は青磁碗である。口縁部は輪花となり窪みから継方向に白堆線がはいり、口縁部に平行して片切り彫りが施される。385~387は陶器壺。388は須恵質の鉢である。389は丁寧に研磨された土師器の柄である。



第35図 SK040・044 出土遺物実測図 (1/3)

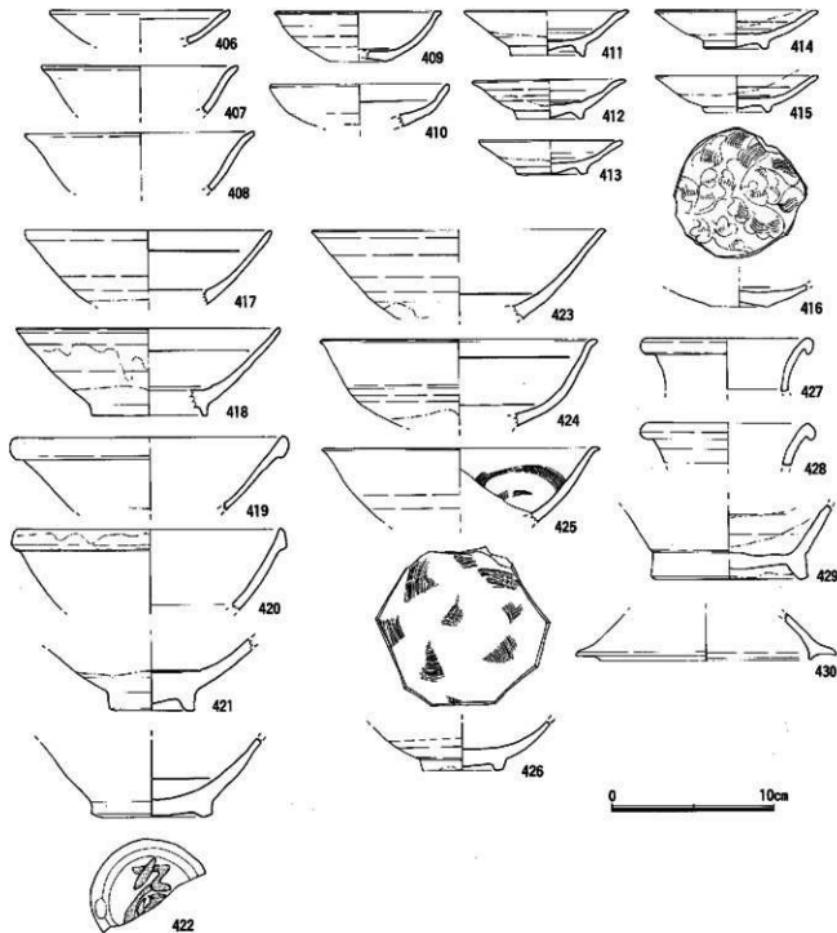
SK044(第34図)

II面南端で検出し、SE043に一部切られる。擾乱で東側が欠失するが、本来は平面長方形を呈し、断面は袋状をなす土坑である。東側コーナーに一段平坦面を有し、検出面からの深さは1mを測る。埋土は黄褐色砂をバンド状に含む黒(褐)色土である。白磁、青磁、陶器、土師器壊・小皿、瓦器椀、滑石石鍋、釘が出土している。12世紀中頃に位置づけられる。

出土遺物(第35図 390~405) 390は内底輪状剥ぎ取りの皿である。外底に墨書きを有する。391は青磁皿。392は瓦器椀である。393~405は外底糸切りの土師器である。

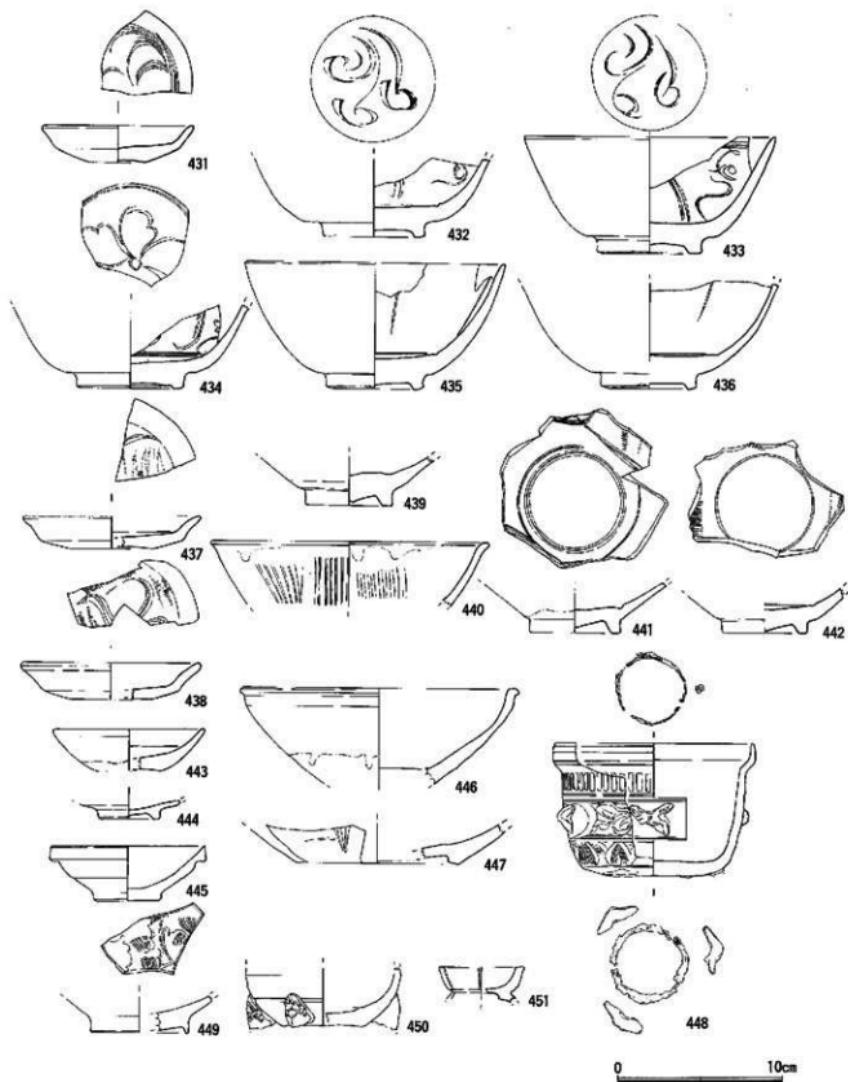
SK045(第34図)

II面東端で検出する。幅60cm強、深さ20cmの溝状の土坑で、SE043を切る。東端部分(アミ部分)の約80cm×60cmの範囲内で破片となった陶磁器がコンテナ2箱分まとまって出土している。SK039・SK057との切り合いが不明瞭であるが、陶磁器の出土状況からこの部分から矩形に曲がり、SK039を切るものと考えられる。埋土はブロックまじりの土でSK039とは異なる。遺物は白磁、青磁、青白磁、陶器の他糸切り土師器壊、瓦器椀、瓦質捕鉢が出土している。12世紀中頃～後半であろうか。

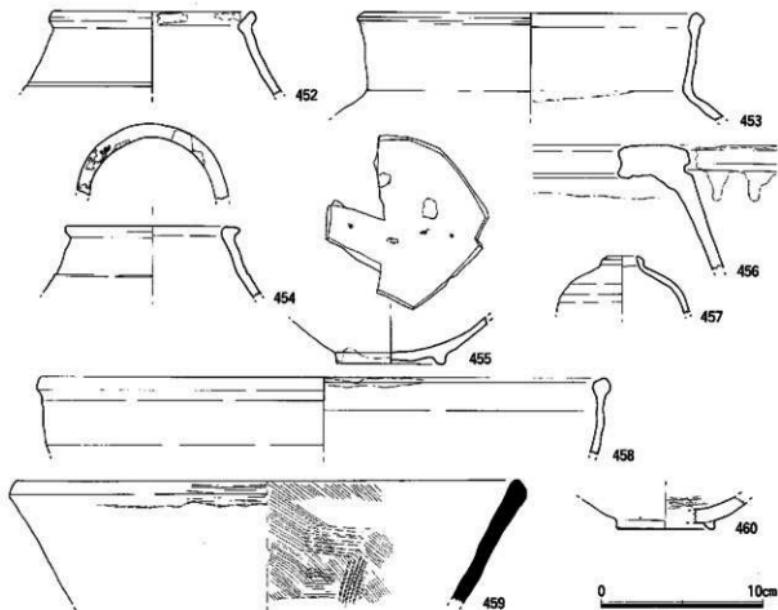


第36図 SK045 出土遺物実測図 1 (1/3)

出土遺物(第36図～第38図) 406～430は白磁である。406～408は口禿である。混入であろうか。407は外底に墨書を有する。「九綱(?)」か。431～448は青磁である。448は越州窯系の水注であろうか。448は香炉である。三足となるが脚部は全て欠損する。外面は3分割され、下段に蓮弁を刻み、中断には片切り彫りの文様上に動物らしい像を貼り付ける。外底及び内底に目跡が残る。北宋前半台のものであろう。449～451は青白磁である。450は香炉である。内面及び外底は露胎となる。451は内面露胎の



第37図 SK045 出土遺物実測図 2 (1/3)



第38図 SK045 出土遺物実測図 3 (1/3)

燐台である。452～458は陶器である。458は綠釉の盤である。459は須恵質の拂鉢である。460は瓦器碗である。

SK050(第39図)

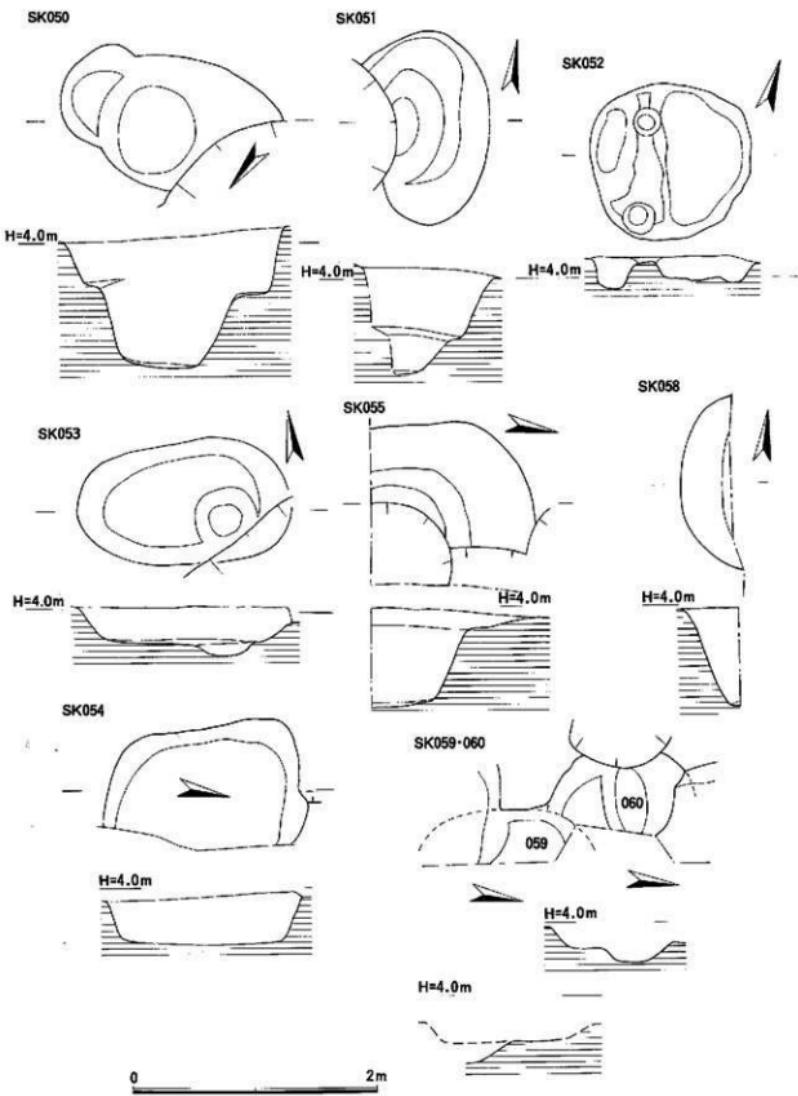
Ⅲ面東端で検出し、SK060を切る。複数の上坑の切り合いの可能性もあるが、埋土からは判断できなかった。東西に平坦面を有し、中央が更に円筒形に60cmほど掘り込まれる。埋土は灰・炭を多量に含む黒褐色土で、灰が多く含まれているためかしまりがない。白磁、青磁、陶器、土器器坏・小皿、瓦器碗、瓦、滑石製石錠が出土する。12世紀後半～13世紀前半に位置する。

出土遺物(第40図) 561～565は白磁である。561・562の内底は輪状に剥ぎ取る。565は燐台であろうか。566は同安窯系青磁である。567・568は陶器鉢である。569・570は瓦器碗である。571～592は外底面系切りを行う土器器坏・小皿である。

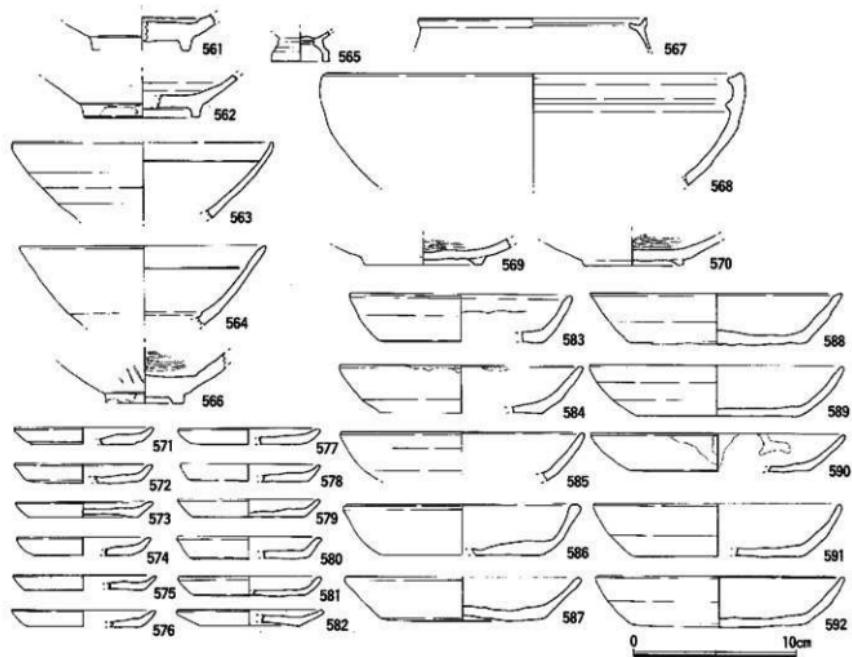
SK051(第39図)

Ⅲ面東側で検出する。1.6m×1.1mの長円形を呈し、深さ60cmを測る。埋土は黒色土である。白磁、青磁、青白磁、陶器、土器器坏・小皿、瓦器碗、瓦、硯、釘が出土する。また602の陶器壺はSK055出土資料と接合する。13世紀前半～中頃に位置づけられるものか。

出土遺物(第41図 593～623) 593～595は白磁である。596・597は同安窯系青磁、598・599は龍泉窯系青磁である。600は口縁部が輪花となる青白磁の皿である。601～603は陶器である。604は円面鏡



第39図 SK050・051・052・053・054・055・058・059・060 実測図 (1/40)



第40図 SK050 出土遺物実測図 (1/3)

である。605~623は外底面糸切りを行う土師器である。

SK052(第39図)

Ⅲ面中央南側で検出する。平面径1.3mの円形を呈す。埋土は灰色土である。底面に細かな凹凸が多く見られ、人為的な掘り込みでない可能性が高いが、遺物も比較的多く出土しているためここでは土坑として報告する。白磁、青磁、陶器、土師器小皿、瓦が出土する。

出土遺物(第41図 624~626) 624は陶器壺である。625・626は糸切りの土師器小皿である。

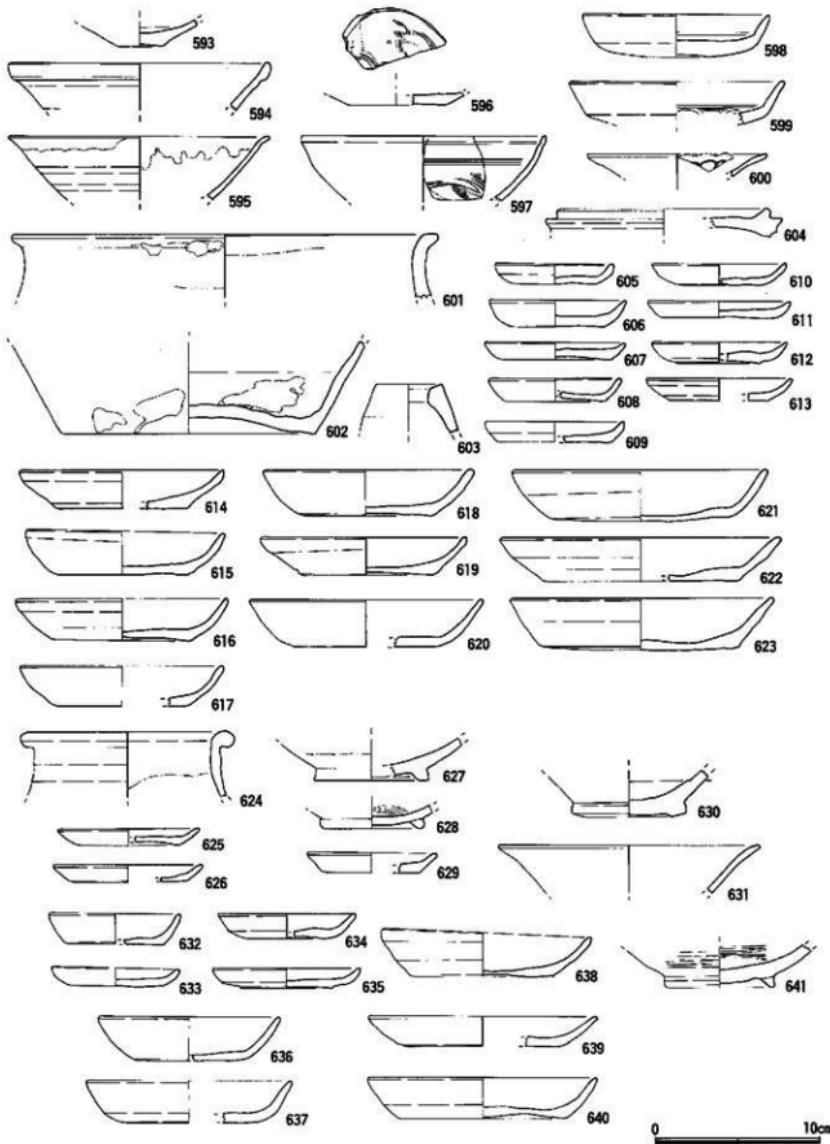
SK053(第39図)

Ⅲ面東端で検出する。平面1.8m×1mの長円形を呈す。埋土は黒褐色砂質土である。白磁、青磁、陶器、土師器壺・小皿、瓦器が出土する。

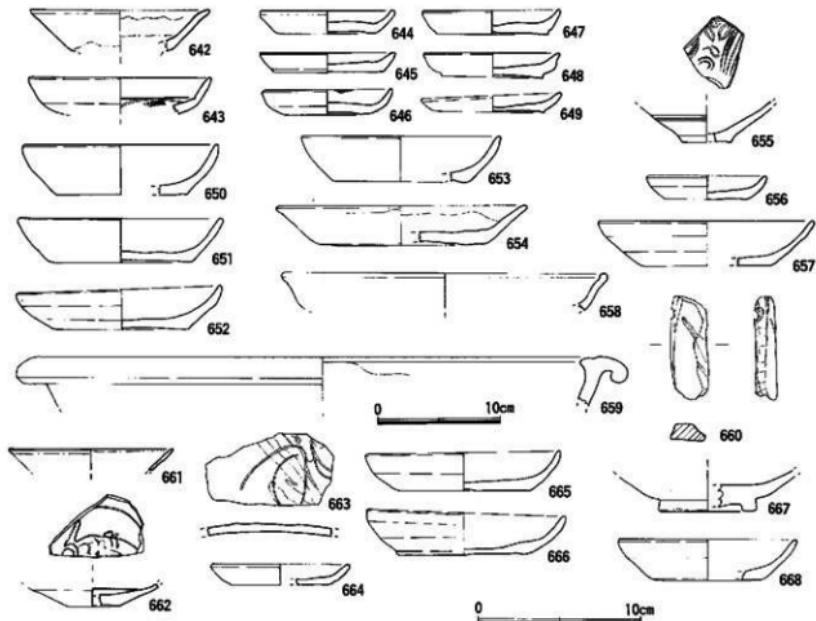
出土遺物(第41図 627~629) 627は白磁碗である。胴部下半から露胎となる。628は瓦器碗である。629は糸切りの小皿である。端部内面に僅かに煤が付着する。

SK054(第39図)

Ⅲ面東端で検出する。SK058・055を切る。南北長1.6mを測り方形～長方形を呈すると考えられる。深さは30cmを測り、底面は平坦である。埋土は灰褐色土である。白磁、青磁、陶器、土師器壺・小皿、瓦器碗が出土する。13世紀後半から14世紀前半である。



第41図 SK051・052・053・054 出土遺物実測図 (1/3)



第42図 SK055・057・058・060 出土遺物実測図 (659は1/2、その他は1/3)

出土遺物(第41図 630～641) 630・631は白磁碗である。632～635は外底糸切りの土師器小皿である。636～640は土師器坏である。639はヘラ切りで、他は糸切りである。641は瓦器碗である。

SK055(第39図)

Ⅲ面南東隅で検出する。1/4程度確認したのみで形状は不明瞭である。検出面からの深さは70cmを測る。埋土は灰褐色土である。白磁、青磁、陶器、土師器坏・小皿、瓦、土鍋が出土する。13世紀前半から中頃に位置づけられる。

出土遺物(第42図 642～654) 642は高台を有する白磁皿である。2次的に被熱する。643は龍泉窑系青磁皿である。644～654は外底糸切りの土師器坏・小皿である。

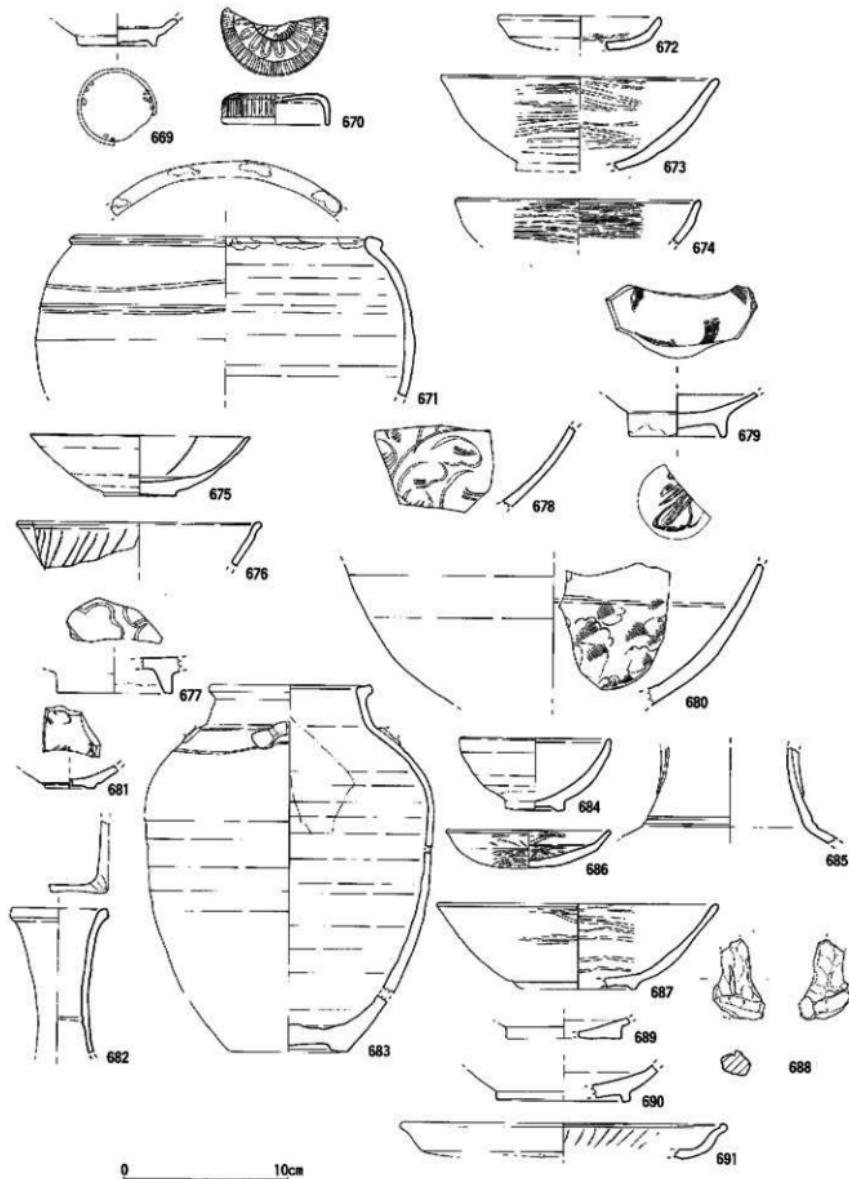
SK057(第34図)

Ⅱ面東端で検出する。SK039の北側に位置しこれより更に30cm深くなるが、先後関係は不明瞭であった。白磁、青磁、青白磁、土師器坏・小皿、滑石製品が出土する。

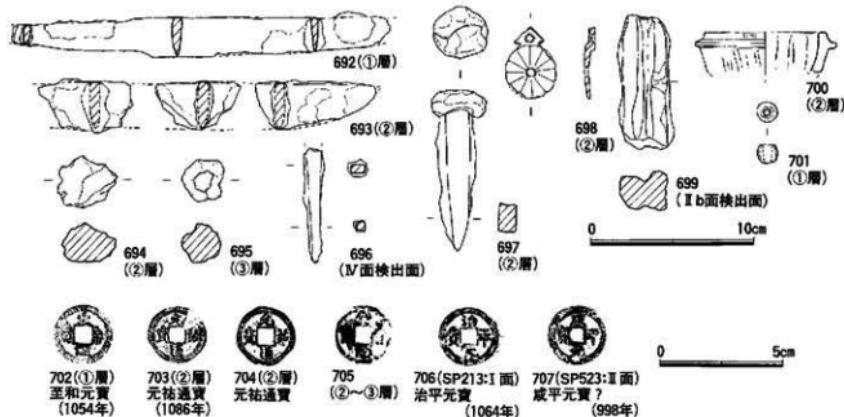
出土遺物(第42図 655～660) 655は青白磁の碗である。内面に印花が施される。656・657は糸切りの土師器である。658は赤褐色を呈する精製の坏である。659は陶器盤である。660は滑石製品である。半分が欠損しているが、横方向に穿孔される。

SK058(第39図)

Ⅲ面東端で検出する。平面形は円形を呈すると考えられる。埋土は灰褐色土である。白磁、青磁、



第43図 その他の遺物実測図1 (1/3)



第44図 その他の遺物実測図2 (702~707は1/2、その他は1/3)

陶器、土師器坏・小皿が出土する。13世紀後半~14世紀前半に位置する。

出土遺物(第42図 661~666) 661は白磁の口禿皿である。662は青磁皿である。663は磁州窯系の陶器盤底部である。内面に緑釉と黄釉を施す。664~666は糸切りの土師器である。

SK059(第39図)

Ⅲ面東端で検出する。先後関係はSK059→SK060→SK050となる。平面は円形を呈すると考えられ、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色土。白磁、青磁、陶器、糸切りの土師器坏・小皿が出土する。

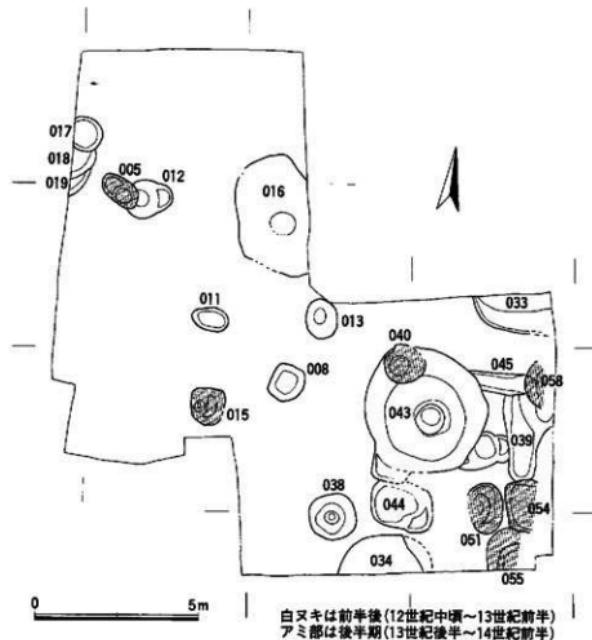
SK060(第39図)

Ⅲ面東端で検出する。長軸約1.2mの長円形を呈する。埋土は灰褐色土。白磁、青磁、陶器、土師器坏・小皿が出土する。

出土遺物(第42図 667・668) 667は龍泉窯系青磁碗である。668は糸切りの土師器坏である。

(3) その他の遺物(第13・44図)

包含層及びピット等で出土した遺物の一部をここで報告する。669・671は越州窯系青磁。670は型作りの青白磁合子である。672~674は瓦器。674は桔梗型の瓦器碗である。675~680は白磁である。679には花押と考えられる墨書き有り。675は広東系の平皿。677~680は廣東西村窯か。681は福建連江窯の小碗である。682は全面施釉の青磁瓶である。683は四耳壺。684は天目碗である。685は陶器であるが、内面全体にガラスが付着しており堆塗としての使用が考えられる。686・687は瓦器である。688は用途不明の土製品である。胎土は精良で焼成は硬質である。製品の内型であろうか。689は畿内系の絵釉の碗、690は狼投の灰釉の碗であろうか。691は暗文を有する土師器碗である。692~697は鉄製品他である。692・693は小刀である。694は不定形の鐵冶錠である。695は鐵塊形遺物である。697は完形の鑿である。698は青銅製の鍋釣り手金具。699は104gを測る滑石製石錘。700は滑石製石鍋のミニチュアである。701は青色のガラス玉。702~707は銅錢である。錢銘及び初銘年を記す。



第45図 1期検出構成図 (1/150)

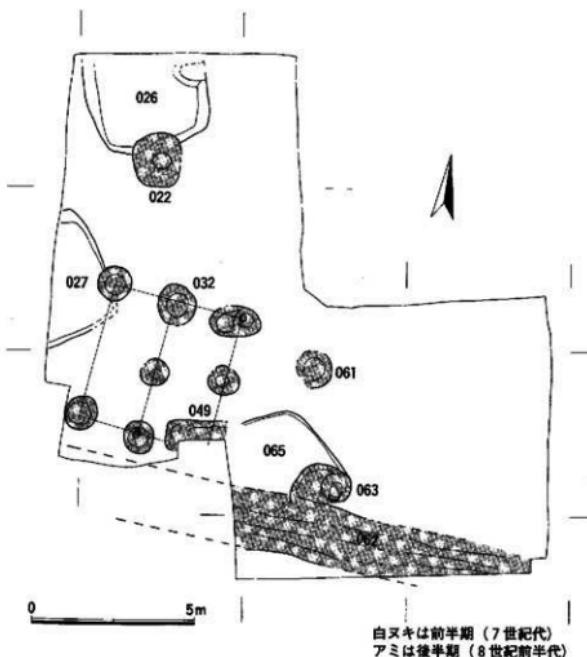
3. 小結

今回の発掘調査では多くの遺構・遺物を検出した。本報告ではその全てを網羅したとは言いがたいが、簡単に調査結果についてまとめておきたい。

今回の調査では遺構の所属時期は7世紀～8世紀(1期)と12世紀中頃～14世紀前半(2期)の大きく2期に分けることができる。調査概要の項でも述べているように本調査区ではこの時期以外の遺構は非常に少ない。この状況は隣接する33・65次調査区などでも同様の様相を示しており、一帯の調査における特徴となっている。

1期は前半(7世紀代)の堅穴住居跡と後半(8世紀前半代)の大型建物と共に伴う溝に代表される。周辺の33次・59次・65次調査では古墳時代前期初頭—前半の堅穴住居群及び同時期の鍛冶関連遺物が検出されている。99次調査地点はこの3地点に挟まれる位置にあり、本調査地点で該期の遺構が認められない点は注目される。本調査地点で堅穴住居跡が確認された7世紀代は遺構が散漫で北側33次調査に見られるのみである。また8世紀前半の大型建物及びこれに伴う溝は南側65次調査でもこれに類する建物が2棟検出されている(第3図参照)。65次調査遺物では官衙的様相を示しているが、建物の構成・範囲等未だ不明な点が多い。

2期は12世紀中頃-13世紀前半と13世紀後半-14世紀前半に分けることができる。主体は前半期に



第46図 2期検出遺構配置図 (1/150)

あり、中でも12世紀中頃～後半に位置づけられる遺構を中心とする。出土遺物の特徴としては土師器壊・皿類は殆どが外底面系切りを行うものである。また陶磁器は白磁が遺物の主体をなし、なかでも碗V類および内底の釉を輪状に剥ぎ取る皿類が目につく。青磁では割花文を施す龍泉窯系I類碗・同安窯系I類碗が卓越することはないものの一定量を占めている。反対に一般的にみられる鍋蓮弁を有する龍泉窯系青磁が極端に少ないという点が特徴的である。中世におけるこのような遺構・遺物のあり方は33次・65次等に共通しており、都市としての博多のあり方を考える材料となるであろう。また後半期は遺構・遺物の量が前半期に比べ極端に減少する。中でもSK015は土師器壊を大量投棄した土坑として注目できる。該期の土師器大量投棄土坑は65次調査区でも認められ、大量消費という都市的様相を示す遺構として検討されている。以上の2期の様相は博多遺跡群内の調査地点周辺域の位置づけを表すものと考えられるが、その示す事象については明らかにする事はできなかった。今後の検討材料としたい。



写真2 調査区北壁土層



写真3 I面全景（東から）



写真4 II面西半全景（東から）



写真5 II面東半全景（東から）



写真6 Ⅲ面西半全景（東から）



写真7 Ⅲ面東半全景（東から）



写真8 M面西半全景（東から）



写真9 M面東半全景（東から）



写真10 SC026（南から）



写真11 SC027（東から）



写真12 SC065（北から）



写真13 SK021（北から）



写真14 SK022（北から）



写真15 SK063（北から）



写真16 SB032 柱穴北半（西から）



写真17 SB032 柱穴南半（西から）



写真18 SD062 (東から)



写真19 SD062 土層



写真20 SE016 (西から)



写真21 SE033 (南から)



写真22 SE034（北から）

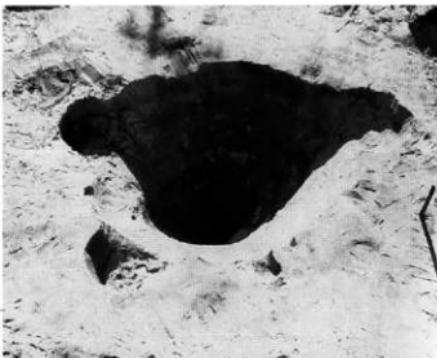


写真23 SE043（東から）

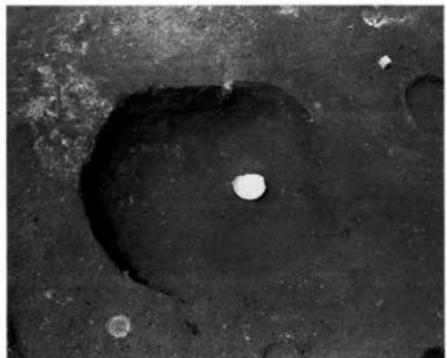


写真24 SK008（東から）



写真25 SK025（南から）



写真26 SK036（南から）



写真27 SK004（西から）

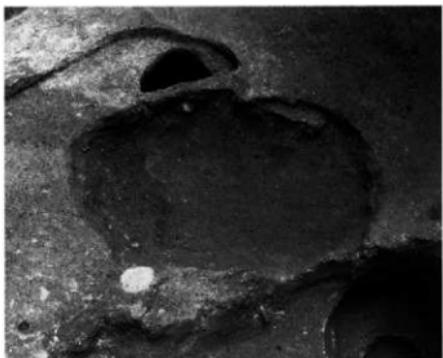


写真28 SK005 (北から)

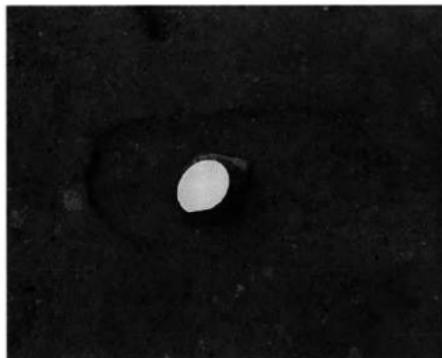


写真29 SK011 (南から)



写真30 SK012 (北から)



写真31 SK013 (西から)



写真32 SK015 土層



写真33 SK015 (北から)



写真34 SK017・018（東から）

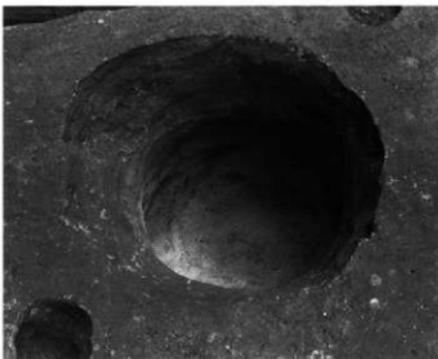


写真35 SK038（北から）



写真36 SK044（北から）



写真37 SK050（西から）



写真38 SK053（東から）



写真39 SK055（西から）

博多遺跡群 第101次調査報告



写真1 作業風景

I はじめに

1. 調査にいたる経過

平成8年9月19日付けで日本ドーアーチェック製造(株)支店長井上勝氏より埋蔵文化財課宛に博多区下呂服町484の物件(331.31m²)に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号8-2-292)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群(分布地図番号48-0121)に含まれている地域である。

このため埋蔵文化財課では平成8年10月30日に申請地内で試掘調査を行い、その結果現地表から2.3m下の黄白色砂で遺構を確認した。埋蔵文化財課では遺跡の存在する旨を回答し、埋蔵文化財の取扱について協議することとなった。協議の結果ビル建設により遺構の破壊が避けられないため申請地全体を対象として発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立した。これを受けて委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成8年12月16日～平成9年1月14日の期間で行った。調査対象地は331.31m²で、搬入口確保のため対象地北側の調査は不可能となり調査面積は180m²となった。また遺物はコンテナ21箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、事業主体である日本ドーアーチェック製造(株)をはじめとして只松建設の皆様には調査についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 日本ドーアーチェック製造(株)

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口譲治

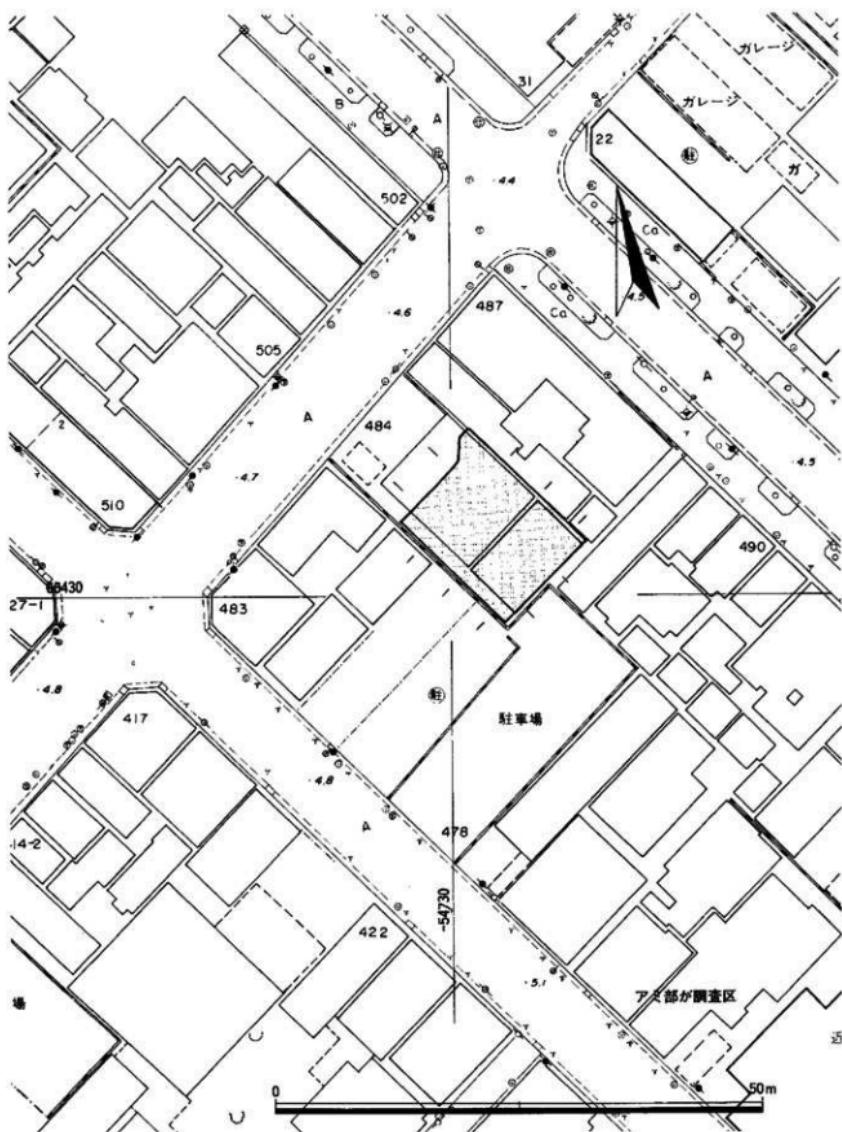
調査庶務 第1係 西田結香

調査担当 第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 安元尚子 平本恵子 久保山勝弘 永田儀子 指原始子

整理作業 花田則子 池瀬千尋 大吉輝了 吉村智子 小池温子 中村幸子 増田ゆかり 草場恵子

高津千尋 小路丸良江 山野妙子 今林加津江 太田次子 石谷香代子 星野明子



第1図 調査区位置図 (1/500)

II 調査報告

1 調査概要

博多遺跡群は那珂川と石堂川に挟まれ、博多湾に面した砂丘上に立地する。砂丘は3列存在し、内陸側2列を博多浜、博多湾に面した北側の1列を息の浜と呼称している。今回調査対象と成了るのは息の浜の東端部分にあたる。博多遺跡群のこれまでの調査成果・歴史的環境については既報告書その他関連文献に詳しいのでここでは割愛する。また調査対象地の大まかな位置については99次調査報告の第1・2図(2・3P)を参照されたい。

調査地点は着手前は既設建物の解体が終了した更地の状態で標高約4.5mであった。調査は重機による表土剥ぎから開始した。調査区層序は地表から90cmまでは盛土(1層)、140cmまでは暗褐色土(2層)、160cmまでは灰褐色土(3層)、210cmまでは淡灰褐色土(4層)、230cmで地山である脆弱な海成の淡黄白色砂・粗砂(5層)に至る。試掘調査の結果、遺構は3・4・5層上面で確認された。3・4層上面では近世後半、5層上面では中世後半期以降の遺構が確認されていたが、3・4層上面では擾乱が大きく遺存状態不良であると判断したため、最終面の地山面での調査に止めることとし、この上面までを機械で除去した。遺構面標高は北端で2.2m、南端で標高2.3mとほぼ平坦である。

検出遺構は15世紀以降に限られ、井戸、溝、掘立柱建物、土坑、石組遺構、ピット等を検出した。この中で井戸についてはSE005・041の2基の瓦組の井戸を検出しているが、近代以降の埋没と判断したため遺構の報告からは除外している。

土師器・陶磁器以外には鍛練鍛冶津の出土が非常に多く、炉壁、椀形津、不定形津、ガラス質津等種類が揃っている。多くの遺構から出土していることから、鍛冶炉の検出はなかったもののこの地点で鍛練鍛冶作業が行われていたことが想定される。この他銅津も僅かであるが出土しており、青銅関係の鉄物生産も行われていた可能性がある。またほとんどの遺構は主軸を現在の町割りに揃えるか、もしくは5°前後東に振れているが、基本的に現町割りに沿うものであり時期的に現在の町割りの基礎となった所謂太閤町割りとの関連が考えられる。

2. 遺構と遺物

掘立柱建物(SB)

掘立柱建物は4棟を復元している。建物は全て東西棟で主軸方位をほぼ同じくしている。建物は規則的に配置されており時期的に近接した遺構群であると考えられる。

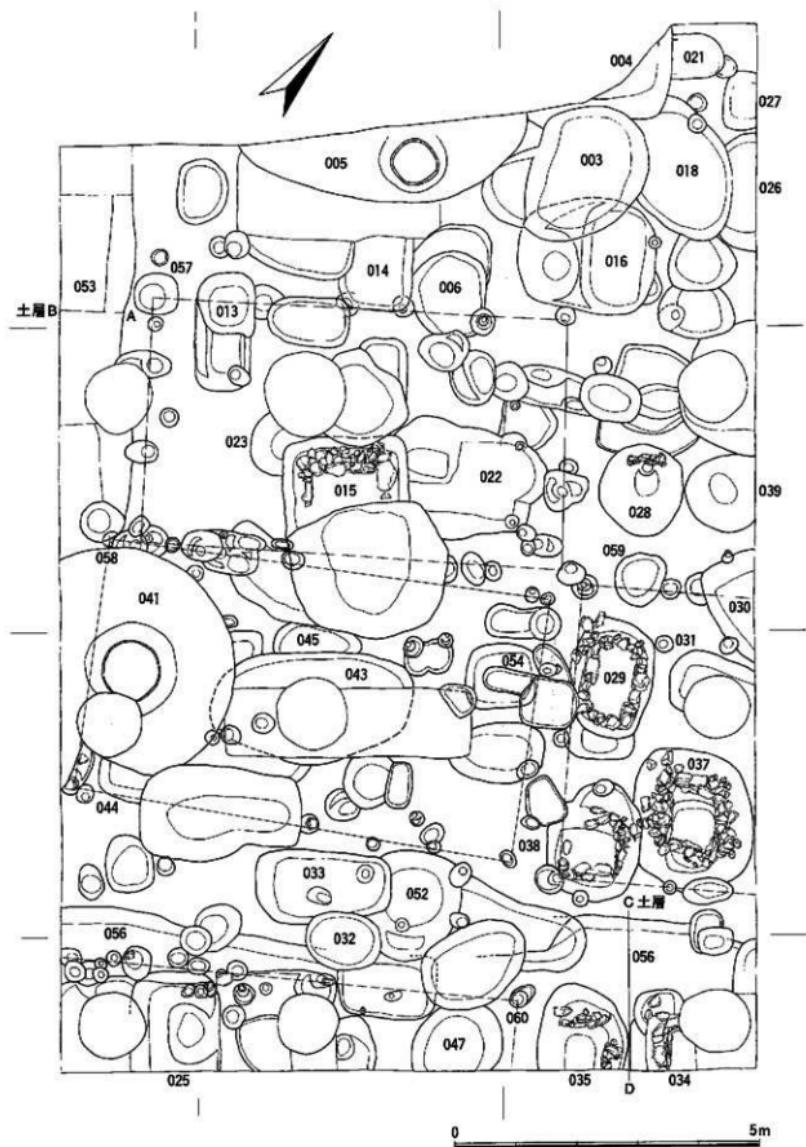
SB057(第3図)

最も北側で復元した掘立柱建物で、主軸方位をN-57°-Eにとる。3間×5間の東西棟であり、梁行4.2mで柱間1.2m~1.4m、桁行6.8m~7mで柱間1m~1.5mを測る。柱穴は梁側がややおおぶりで根石等は見られない。SP117から中国製の陶磁器が出土している。

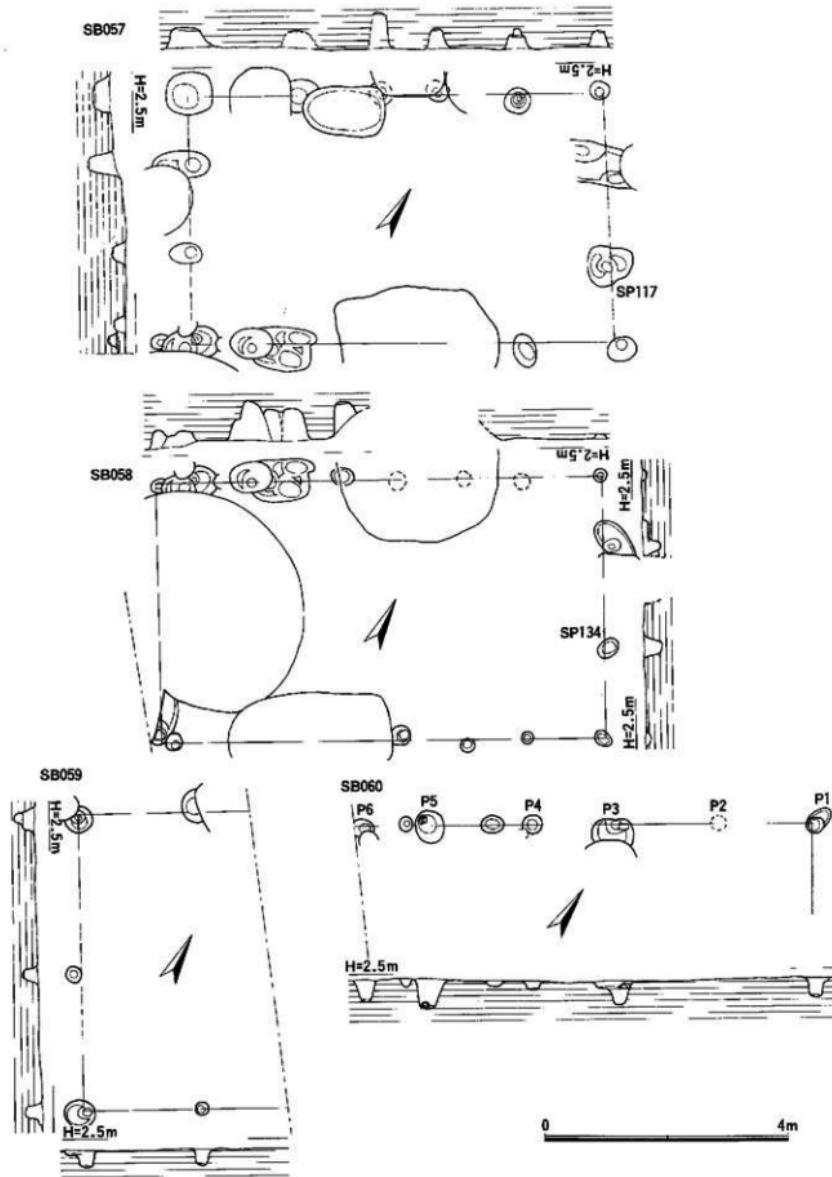
出土遺物(第4図 1・2) いずれもSP117出土である。1は磁器碗である。胎土は灰色、釉調は透明感のない灰白色を呈す。器面全体に貫入が見られ、内底面及び高台疊付内側に砂目が僅かに残る。また高台疊付は釉が剥がれ落ちる。2は陶器の耳付き壺である。胎土は径1mmの砂粒を含み灰色を呈し、器面には黒褐色の釉が施される。耳の下肩部には重ね焼きの痕跡が残る。

SB058(第3図)

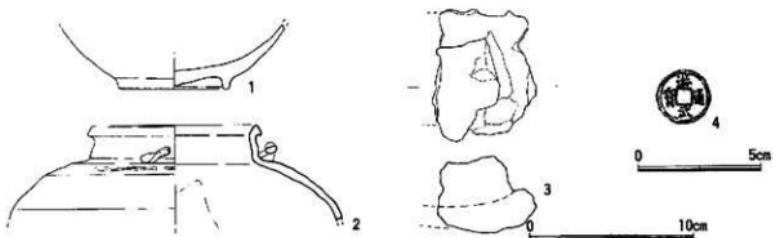
SB057の南側に接して復元した掘立柱建物で、主軸方位をN-63°-Eにとる。SB057とは主軸方位がやや異なり、これに切られる建物である。3間×6間の東西棟であり、梁行4.3mで柱間1.2m~1.6m、



第2図 調査区全体図 (1/80)



第3図 SB057・058・059・060 実測図 (1/80)



第4図 堀立柱建物出土遺物実測図(4は1/2、その他は1/3)

桁行7.3mで柱間1m~1.4mを測る。柱穴は小型で径20cm~30cmである。

出土遺物(第4図 3・4) 3は楕円形鋳治滓である。半ばから欠失しているが、2段に形成され平面形は長方形に近い。表面には凹凸があるが、全体に平滑である。木炭痕は一部残存するが、鋳造剝片は観察できない。4は「洪武通寶」である。

SB059(第3図)

SB058の東側に平行して復元した掘立柱建物で、主軸方位をN-60°-Eにとる。SB057に切られ、位置的な関係からSB058とは併存する建物と考えられる。2間×2間以上の東西棟であり、梁行4.8mで柱間2.4m、桁行2.6m以上で柱間1.5mを測る。梁行がSB058より僅かに長く、柱間もより広くなっている。

SB060(第3図)

SB058の東側に2.5m離れて復元した掘立柱建物で、主軸方位をN-60°-Eにとりこれに平行する。東西棟であるが梁方向は不明である。桁方向はSB058などから考えると、調査区西端のピットで建物の西端を限る可能性が高いと考えられ、この場合P1~P6の5間で桁行7.4m、柱間1.5mとなる。

土坑(SK)

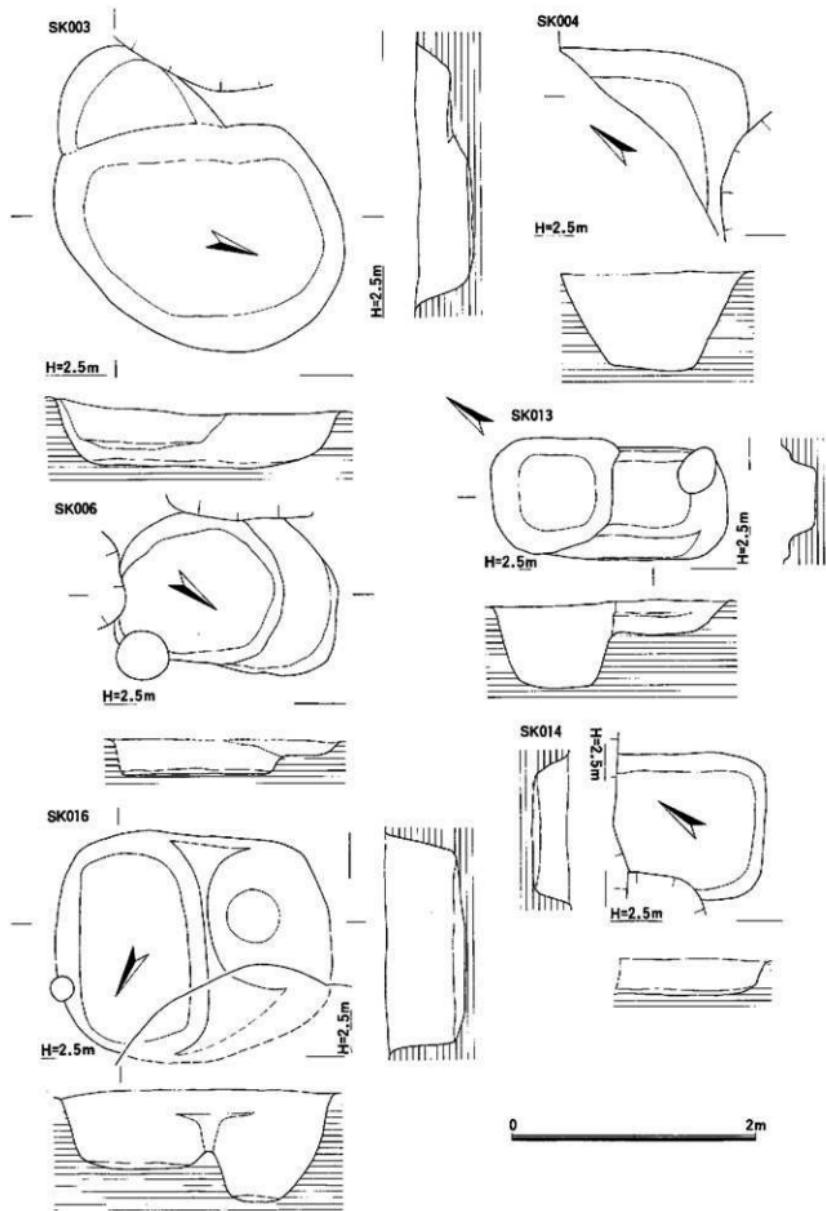
SK003(第5図)

調査区北側で検出し、SK001・016を切る。やや歪んだ隅丸長方形を呈し、深さ50cmを測る。西側の半円形の張り出し部は切り合ひ関係を有する土坑であるが埋土が似ており切り合ひが不明瞭である。埋土は水分を多く含み粘性の強い暗黒色土である。出土遺物には土師器壺・小皿、瓦質火鉢・擂鉢、備前焼擂鉢、肥前系磁器、鉄製釘、不定型楕円形鋳治滓、貝殻・魚骨・獸骨等残滓が出土している。18世紀~19世紀に位置づけられる。

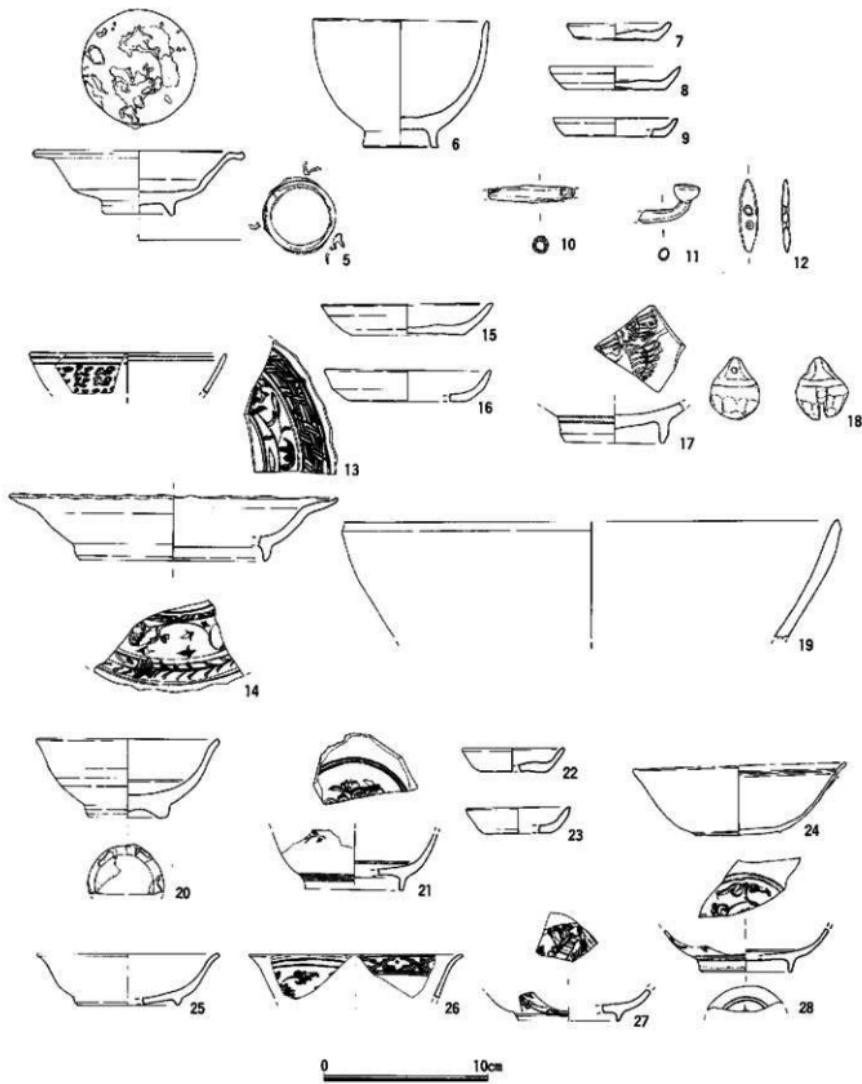
出土遺物(第6図 5~12) 5は灰色の唐津系の溝縁皿である。高台疊付及び内面には砂目跡が残る。6も唐津であろう。褐釉の碗である。7~9は糸切りの土師皿である。10・11は青銅製の煙管である。12は内部に木質が残る。12は青銅製の飾り金具であろうか。

SK004(第5図)

調査区北端部で検出す。SK003に切られ、SK021を切っている。大半が調査区外にのびるため詳細は不明瞭であるが、平面(長)方形の土坑であろう。深さ80cmを測り、底面は平坦である。埋土はやや砂性を帯びた暗褐色土である。明代染付、上師器壺、瓦質の火鉢・擂鉢、国産陶器、鋳治滓が出土している。



第5図 SK003・004・006・013・014・016 實測図 (1/40)



第6図 SK003・004・006・013・014・016 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物(第6図 13~16) 13は明代の染付である。13は外面に省略された唐草を施す。14は肥前系の染付皿である。口縁部は波状を呈する。15・16は灯明皿である。

SK006(第5図)

調査区北側中央部分で検出し、SB057に切られる。平面は歪な長方形を呈し、北側に一段平坦面を有する2段掘りとなる。下段までの深さ30cmを測り、底面には細かな凹凸が残る。埋土は灰褐色砂質土である。明代染付・土師器坏・小皿・瓦質の火鉢・擂鉢・土師質土器・ガラス質滓・不明鉄器が出土する。

出土遺物(第6図 17~19) 17は明代の染付碗である。見込みに花文を描く。18は完形の土鉢である。19は土師質の鍋である。外面全体に煤が付着している。

SK013(第5図)

調査区北側で検出す。長方形土坑と隅丸方形の土坑が切り合うが先後関係不明のため同時に掘り下げている。白磁・染付・備前焼・店津皿等が出土している。

出土遺物(第6図 20) 李朝の碗である。高台部分に砂目跡が残る。口縁部の一部にのみ煤が付着している。胎土は灰色、釉潤は青みを帯びた灰色を呈する。

SK014(第5図)

調査区北端部で検出す。長方形の土坑で壁高30cmを測り底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土である。明代の白磁・染付・土師皿・国産陶磁器・鉄釘・壁体・ガラス質滓・銅滓・獸骨が出土する。

出土遺物(第6図 21~23) 21は明代染付の碗である。外面に花文を描く。22・23は糸切りの土師皿である。22には口縁端部に煤が付着している。

SK016(第5図)

調査区北側で検出す。上面では長方形であったが、底面では長方形と略円形の掘り込みに別れている。埋土は全て黒褐色土で、一連の掘り込みと考えられる。上面から銅碗・明代白磁・染付・土師皿・国産陶磁器・不明滑石製品・釘等の鉄器などが出土している。

出土遺物(第6図 24~28) 24は青銅製の碗である。内面に2条の圓線が巡る。高台も鋳込まれるが底部の方が外に張り出さため不安定である。口縁部の欠損する部分に縱方向に2cm程の突線があり、注口があったのであろうか。25は明代の白磁皿。26~28は明代染付の碗である。26は端反りで内面四方擗文、外面唐草文を描く。27は外面に唐草文、28は見込み・外面に唐草文を施す。

SK018(第7図)

調査区北側で検出す。平面長方形を呈し、壁高40cmを測る。底面は平坦である。白磁・染付・土師器坏・皿・瓦質鉢・羽釜・土師質の鍋・国産陶磁器・鉄釘・鐵塊系遺物・楕形鍛冶滓が出土する。

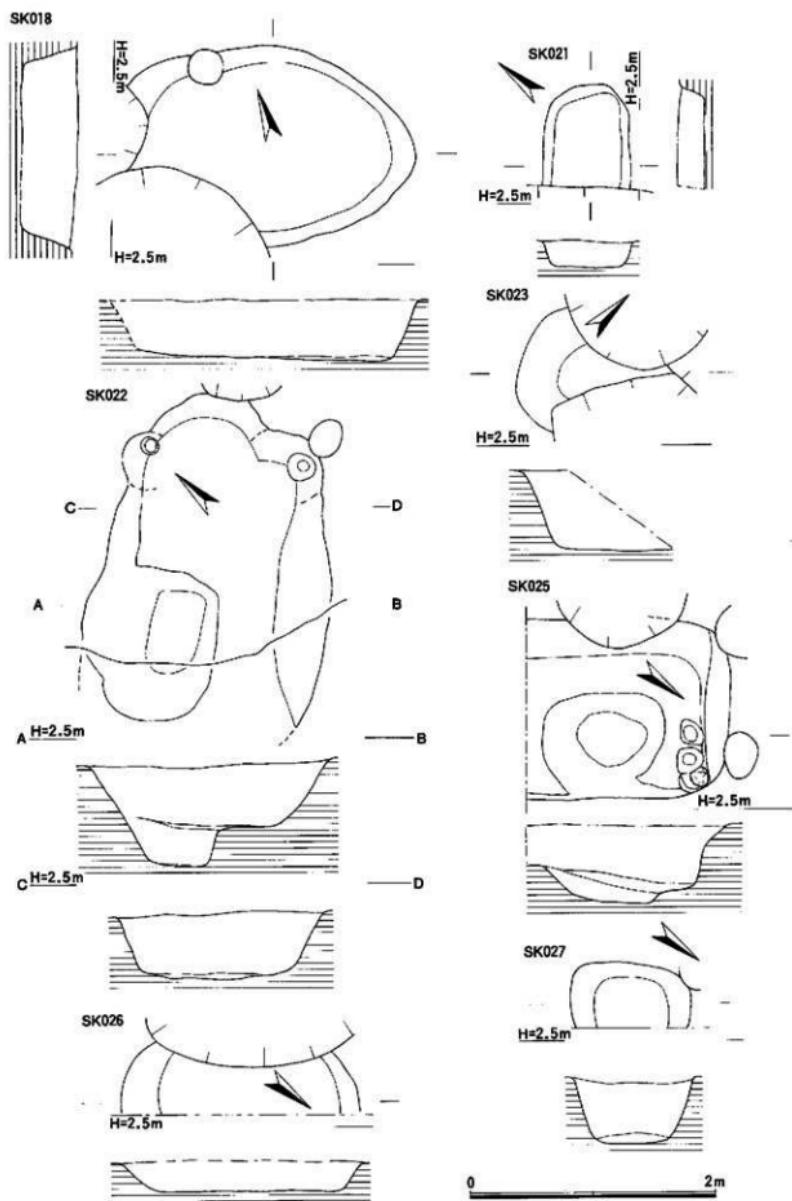
出土遺物(第8図 29~32) 29は李朝の白磁である。内面と高台縁付に砂目跡が残る。30は土師器皿、31は坏である。いずれも底部糸切りである。31は胎土に砂粒を含み、器壁が厚手である。32は楕形の鍛冶滓である。2段になつて形成されており、上面には木炭痕が多く付着している。

SK021(第7図)

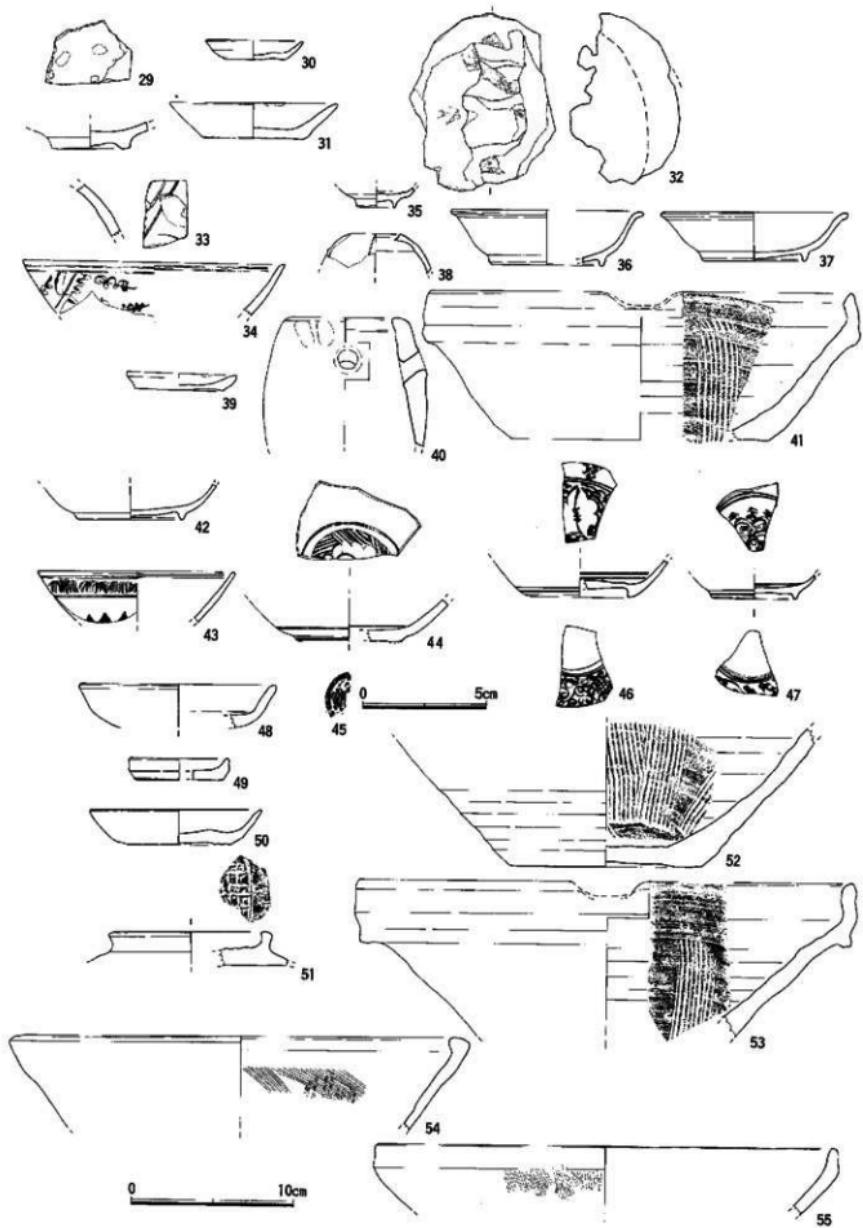
調査区北端部で検出し、西側をSK004に切られる。埋土は黒褐色土である。平面長方形で壁高は20cmである。底面は平坦。白磁・鉄絵・染付・土師器坏・瓦質土器・土師質土器・鐵塊・獸骨が出土している。

出土遺物(第8図 33・34) 33は磁州窯系の鉄絵壺の破片である。下地は乳白色で、外面に花文を施す。元代のものか。34は染付の蓮子碗である。16世紀前半に位置付けられる。

SK022(第7図)



第7図 SK018・021・022・023・025・026・027 実測図 (1/40)



第8図 SK018・021・022・023・025・026・027 出土遺物実測図 (45は1/2、その他は1/3)

調査区中央で検出し、石組造構のSX015に切られる。略長方形の土坑でピット状の掘り窓みを除いて底面は平坦である。16世紀代に属し、中国産の青磁・白磁・陶器・綠釉壺・染付・土師器坏・皿、瓦質土器、上師質土器、国産陶磁器、石臼、釘等の鉄器、ガラス質津、銅津などが多く出土している。

出土遺物(第8図 35~41) 35~37は明代の白磁である。35は全面施釉で、内底のみ輪状に剥ぎ取る。36・37は端反りの皿で高台疊付のみ露胎となる。38は綠釉の小壺である。釉は明るい緑色を呈する。39は糸切りの灯明皿。40は靖壺である。焼成は非常に堅緻である。41は備前焼の擂鉢である。

SK023(第7図)

調査区中央北側で検出する。SX015等で削平され全体は不明瞭である。埋土は暗褐色土である。中国産の白磁・青磁・染付・土師皿・瓦質擂鉢・瓦、銅錢1/4破片1点、椀形銀治津などが出土している。16世紀に位置づけられる。

出土遺物(第8図 42~45) 42は明代の端反りの皿で、高台疊付が露胎となる。43・44は明代染付である。43は口縁部外面に波濤文帯を巡らし、胴部には芭蕉葉文を描く。45は銅錢の1/4破片である。銘については不明である。

SK025(第7図)

調査区南端で検出する。SD056埋め立て後に掘削されている。平面長方形に復元でき、壁高50cmを測る。埋土は暗褐色土。中国産白磁・青磁・染付・土師器坏・皿、国産の瓦質土器・土師質土器・陶器、炉盤・ガラス質津・銀治津が出土する。16世紀代に属する。

出土遺物(第8図 46~53) 46・47は明代の染付である。外面に唐草文を有する。48は明代の青磁皿である。内底は釉が飛んでいる。49・50は糸切りの上師器である。49は灯明皿である。51は瀬戸焼きの綠釉陶器である。おろし目が刻まれる。52・53は備前焼の擂鉢である。

SK026(第7図)

調査区北端部で検出する。長円形を呈し、壁高25cmを測る。底面は平坦である。埋土は淡黒色砂質土。明代青磁皿・土師器坏・瓦質擂鉢・土師質土鍋、椀形銀治津が出土する。

出土遺物(第8図 54) 周防型の瓦質の擂鉢である。内面は粗い刷毛を行った後にすり目を刻む。口縁端部は内側に粘土帯を貼り付け肥厚させる。

SK027(第7図)

SK026の北側で検出する。壁はしっかりとおり、壁高50cmを測る。明代青磁・染付・土師器坏・瓦質土器羽釜・鉢・土師質土鍋、鉄釘、鐵治津が出土している。

出土遺物(第8図 55) 瓦質の鉢である。口縁部は「く」字に屈曲し、外面をやや窪ませる。外面には短い綫刷毛を行う。

SK030(第9図)

調査区中央東側で検出する。壁はしっかりと立ち上がり、底面はほぼ平坦である。十層はレンズ状に堆積する。中国産青磁・色絵・土師器皿・瓦質土器・土師質土器が出土している。

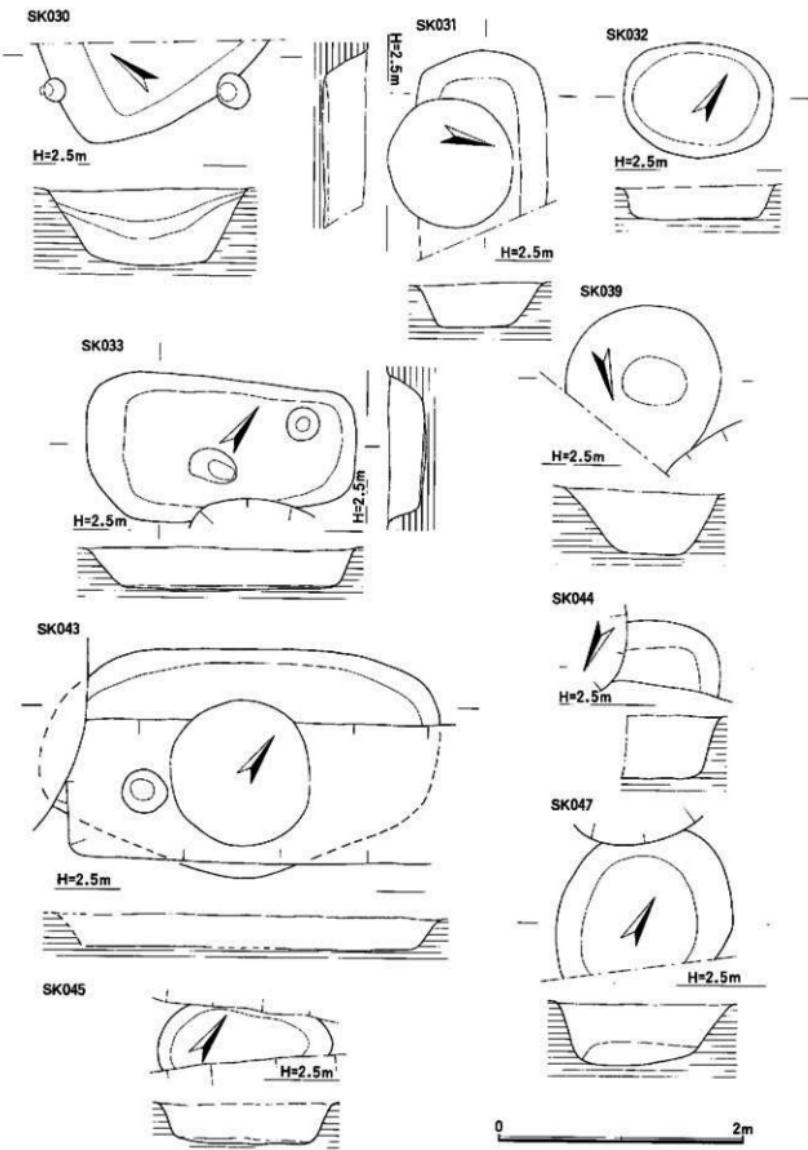
出土遺物(第10図 56) 明代赤絵皿の破片である。白色釉を下地にして赤茶色及び緑色で彩色する。

SK031(第9図)

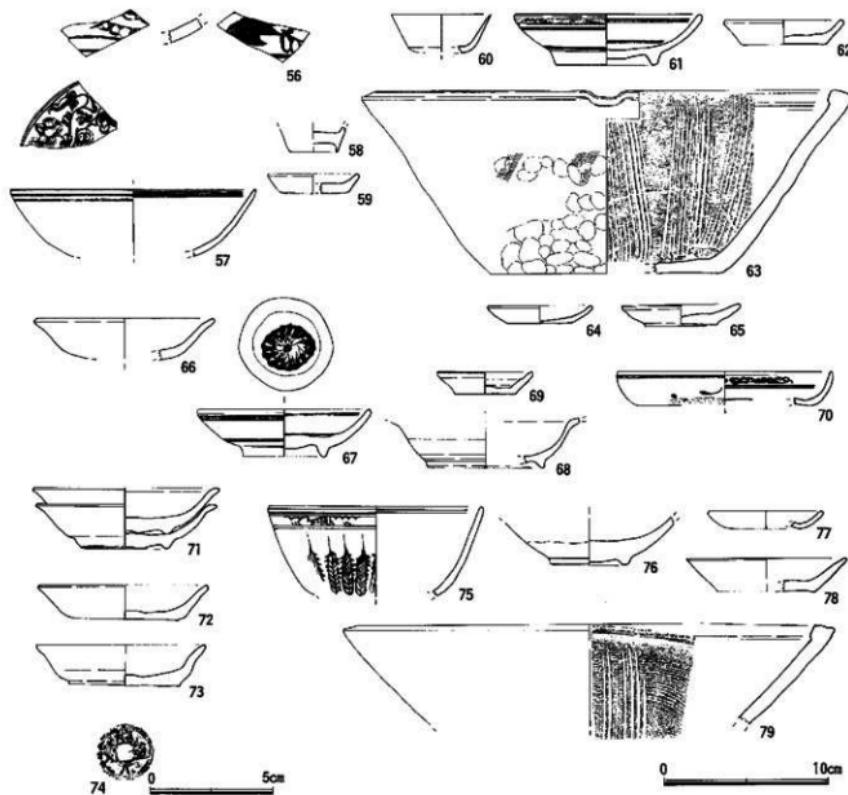
SK030の南側で検出する。隅丸形の土坑で、埋土は炭化物を多く含んだ褐色砂質土である。16世紀代の明代染付碗・土師器坏・土師質の土鍋が出土している。

SK032(第9図)

調査区南側で検出し、SK033を切る。1.2m×1mの平面長円形を呈し、壁高25cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。中国産白磁・染付・土師器坏・皿、瓦質の羽釜・擂鉢が出土する。16~17世紀



第9図 SK030・031・032・033・039・043・044・045・047 実測図 (1/40)



第10図 SK030・032・033・039・043・044・045・047 出土遺物実測図 (74は1/2、その他は1/3)

代に属する。

出土遺物(第10図 57~59) 57は明代染付碗である。外面に花文を有する。58は明代白磁の小底である。内底は輪状に釉を剥ぎ取る。59は外底糸切りの土師器小皿である。

SK033(第9図)

調査区南側で検出し、SK032に切られる。長軸2.2mの長方形を呈する。壁高は30cmを測り、底面は平坦である。埋土は暗褐色砂質土。中国産白磁・青磁・染付、土師器小皿、瓦質土器、備前焼窯、土錘、釘、鉄塊、銅錢が出土している。16世紀後半~17世紀に属する。

出土遺物(第10図 60~62) 60は明代の白磁杯である。内底が輪状に釉剥ぎとなる。61は明代染付碗である。内底は全て釉剥ぎ。福建產か。62は外底糸切りの土師器小皿である。

SK039(第9図)

調査区中央東側で検出する。径1.3mの略円形の土坑である。埋土は褐色砂質土で明代白磁、土師器坏・小皿、瓦質の擂鉢・羽釜、鐵釘1本、蝶体、ガラス質滓が出土する。

出土遺物(第10図 63~65) 63は周防型の瓦質擂鉢である。口縁端部は内側に折り曲げて肥厚させる。すり目は胴部内面及び内底に施される。64・65は外底糸切りの土師器小皿である。

SK043(第9図)

調査区中央で検出する。トレンチ等で大半が欠失するが、長さ3.2m、深さ20cm程度の土坑と考えられる。埋土は暗褐色土である。中国産の白磁・染付、土師器小皿、瓦質擂鉢、備前窯、土師質土鍋、土錐、鐵釘3本、炉壁、鍛冶滓等が出土する。16世紀~17世紀前半代のものか。

出土遺物(第10図 66~69) 66は端反りの青磁皿。67は福健産の明染付皿である。内底は輪状はぎ取り、中央に花文(菊?)を配する。68は白磁皿である。疊付が露胎。69は土師器小皿である。

SK044(第9図)

調査区西側で検出する。削平でコーナー部分の残存である。中国産白磁・染付、土師器坏、用途不明鉄器が3点出土する。16~17世紀に属する。

出土遺物(第10図 70) 明代染付である。胴部外面屈曲部に帯状に砂目が付着する。

SK045(第9図)

調査区中央で検出する。長円形の土坑である。壁高25cmで底面は平坦である。中国産白磁、土師器坏、瓦質擂鉢、備前陶器、土師質土鍋、銅錢1点、鐵釘、ガラス質滓、銅滓が出土する。

出土遺物(第10図 71~74) 71は窯着した明代の端反り白磁皿である。疊付に砂目が残る。72・73は外底糸切りの土師器坏である。74は銅錢であるが、判読不能である。

SK047(第9図)

調査区南端で検出する。略長円形の土坑である。壁高30cmを測る。中国産の白磁・青磁・染付、土師器坏・小皿、瓦質擂鉢・羽釜、備前擂鉢、鐵製火鉗、釘、椀形鍛冶滓が出土している。

出土遺物(第10図 75~79) 75は明染付碗である。76は唐津の陶器碗である。独調は灰白色である。77は土師器小皿、78は坏である。79は周防型の瓦質擂鉢である。

SK052(第11図)

調査区南側で検出する。壁がしっかりと立ち上がり底面が平坦な土坑とこれを切るやや歪な円形土坑の2基の土坑出土遺物を調査時の不手際で混同したためここで報告する。出土遺物は中国産の白磁・青磁・染付、土師器坏・小皿、瓦質擂鉢、備前窯、土鍋、土錐、炉壁、鍛冶滓等が出土している。16世紀代。

出土遺物(第12図 80~86) 80・81は明代白磁皿である。81には高台内側に砂目が残る。82~84は明染付皿である。84は芭箆底である。85・86は外底糸切りである。

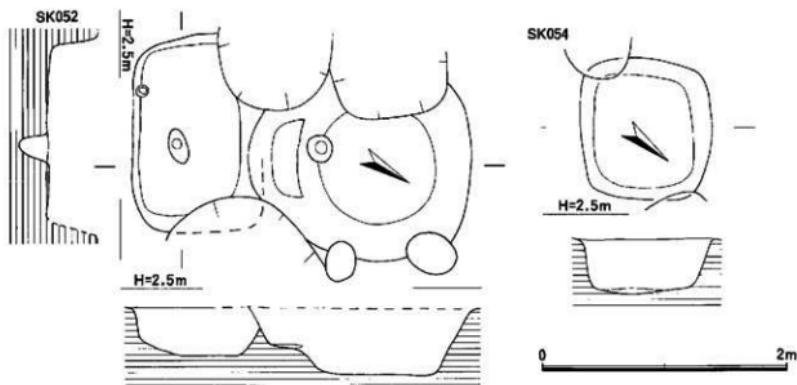
SK054(第11図)

調査区中央で検出する。平面正方形で底面が平坦な土坑である。埋土は黒褐色土である。中国産白磁・青磁・染付、高麗碗、土師器坏、瓦質擂鉢、備前擂鉢、土鍋、土錐、炉壁、用途不明鉄器が出土。

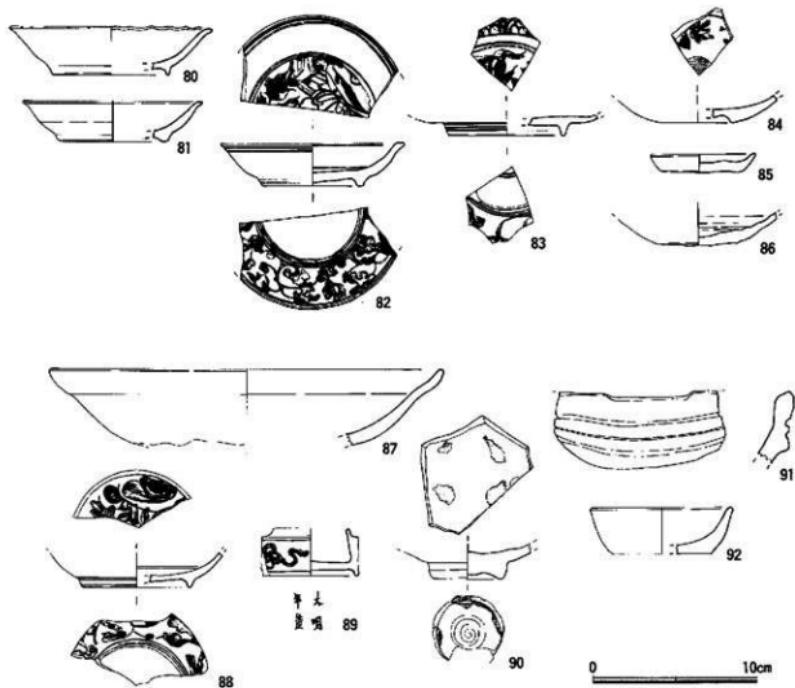
出土遺物(第12図 87~92) 87は褐釉陶器の鉢である。88・89は明染付である。88は外側唐草、内面には花文を描く。89は合子である。90は高麗の碗である。内底面に4箇所砂目が残る。91は備前窯の擂鉢注口部分である。92は外底糸切りの土師器坏である。

石組造構(SX)

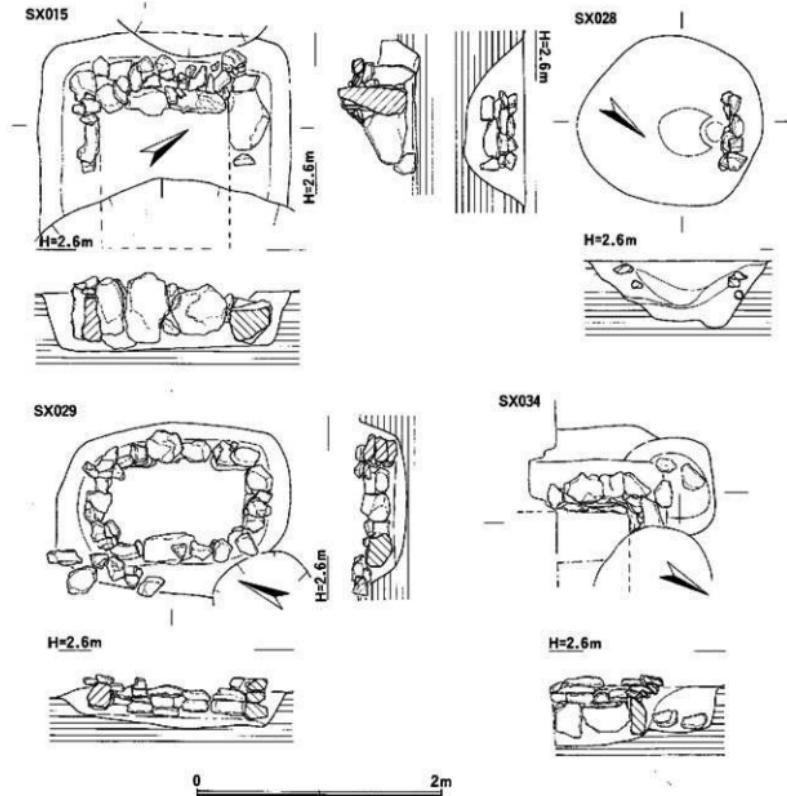
石組造構は全てで7基検出した。この内5基が調査区南東部分に方位を描いて並んでいる。この5基は他の2基と比べて掘り方、石積み法などに規格性を有し、有機的関連を持っている可能性がある。



第11図 SK052・054 実測図 (1/40)



第12図 SK052・054 出土遺物実測図 (1/3)



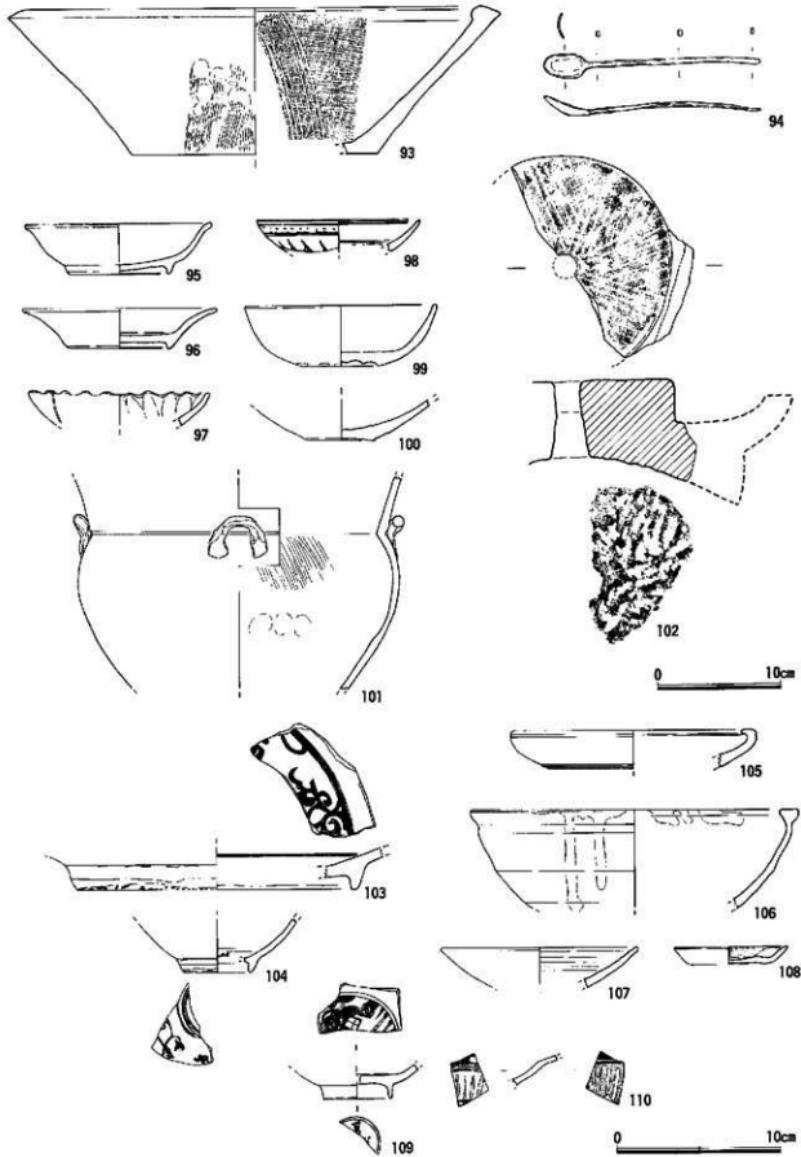
第13図 SX015・028・029・034 実測図 (1/40)

また石組遺構の性格については不明であるが、いずれも下層埋土に水分を多く含み粘性をもった黒色土が堆積している。この埋土は他の遺構に見られないもので、石組遺構に共通する。土壤の分析等を行っていないため明確ではないが、汚水・汚物の投棄場所とし使用されたと考えられる。

SX015(第13図)

表土剥ぎ時に攪乱坑とともに、東壁の右組を取り去ってしまったため復元となるが、掘り方は $2.4\text{m} \times 2.1\text{m}$ の長方形、石組内法は一辺 1.1m の方形を呈する。最下段のみであり、大きめの偏平な石材を立てて据えている。おそらくこの上面には小ぶりの角砾が組上げられるものと考えられる。明染付、土師器壺・小皿、瓦質の擂鉢・火鉢、備前焼壺、鐵釘、ガラス質洋、銅匙等が出土する。15世紀後半～16世紀に位置づけられる。

出土遺物(第14図 93・94) 93は周防型の擂鉢である。口縁端部は内側に蒲鉾状に肥厚させる。94



第14図 SX015・028・029・034 出土遺物実測図 (102は1/4、その他は1/3)

はほぼ完存する青銅製の匙である。

SX028(第13図)

掘り方は径1.4mの略円形で、断面は擂鉢状を呈する。他の石組造構と異なり、北側の一辺にしが石組はなされていない。断面南側の石材は2・3石のみで石組とはなっていない。他の3方向は板材等を使用したのであろうか。埋土はレンズ状に堆積し、他の石組同様に粘性の強い黒色土が石組内に堆積している。中国産の白磁・青磁・陶器・染付・土師器坏・瓦質の火鉢・国産陶器・釘・茶臼が出士している。16世紀代に位置づけられる。

出土遺物(第14図 95~102) 95・96は明代端反りの白磁皿である。97は青磁菊花の皿。98は芭蕉葉文を描く明染付。99は国産陶器の皿で、薄緑色の釉がかかる。瀬戸か。100は外来の土師器坏である。101は陶器の鉢である。頸部に耳が貼り付けられる。中国陶器か国産か不明である。102は砂岩製の茶臼である。下臼の破損品である。

SX029(第13図)

掘り方2m×1.4m、石組内法1.1m×0.6mを測る。最下段から20cm~30cm大の同じサイズの角礫を積み上げている。中国産の青磁・陶器・染付・土師器坏・小皿・瓦質羽釜・擂鉢・備前焼擂鉢・鉄釘・判読不能の銅錢1枚が出土する。16世紀後半~17世紀前半か。

出土遺物(第14図 103~108) 103は明染付大皿である。胎土は黄白色で下地が白濁しており、福建産であろう。104は明染付の碗である。105は口縁部を内側に巻き込む青磁の盤。106は陶器の鉢である。107・108は土師器である。107は外来系の坏である。

SX034(第13図)

コーナー部分のみ検出する。最下段は板状の石材を立てて据え、その上に小ぶりの偏平な石材を積み上げる。他の石組にくらべ板状の石材を用いているため積み上げが丁寧な印象を与える。明染付・土師器坏・瓦質擂鉢・釘2本が出土する。16世紀後半~17世紀前半。

出土遺物(第14図 109・110) 明染付である。109は碗である。110は皿である。内外面ともに副部を暗文状に仕上げる。

SX035(第15図)

石組の最下段部分のみが残り、西側は石組が存在しない。掘り方は石組内部に当たる部分が大きく窪んでいる。中国産の白磁・青磁・染付・土師器坏・小皿・瓦質羽釜・火鉢・備前焼窯・土師質土鍋・釘・銅錢が出土する。16世紀代と考えられる。

出土遺物(第16図 111~114) 111は筈底の明染付皿である。112は瓦質の羽釜である。113は外来系の土師器坏である。114は銅錢である。質が悪くやや薄っぺらい。判読は困難。

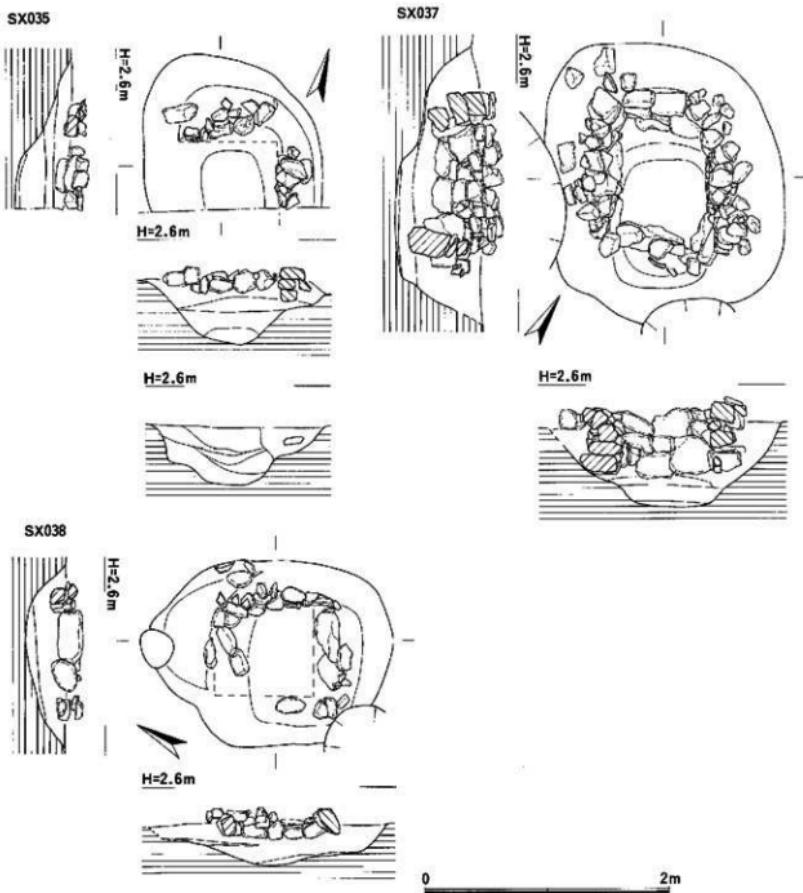
SX037(第15図)

掘り方2.2m×2m、石組内法90cm×70cmを測る。小口部分は比較的大ぶりな角礫を用い、長側部分は下段に30cm大の角礫を用いるがそれから上は10~20cm程度の小礫を積み上げている。使用石材から考えて石組自体もこれからさほど高くならないものと考えられる。中国産の白磁・青磁・染付・土師器坏・小皿・瓦質土器・備前焼擂鉢・土鍋・羽口・楕円形鐵治津・釘等が出土する。16世紀後半~17世紀前半にあたるものか。

出土遺物(第16図 115~120) 115は備前焼擂鉢。116・117は土師器である。117は外来系か。118は土師質の土鍋である。119は瓦質の擂鉢。120は羽口で復元口径2cmである。

SX038(第15図)

西側コーナー部分を中心に石組が乱れている。復元の内法は80cm×70cmである。15~20cm大の角礫



第15図 SX035・037・038 実測図 (1/40)

を基底から積み上げている。中国産白磁・青磁・染付、土師器壺、瓦質土器、土師質土鍋、釘、不定形物が出土する。16~17世紀代に属する。

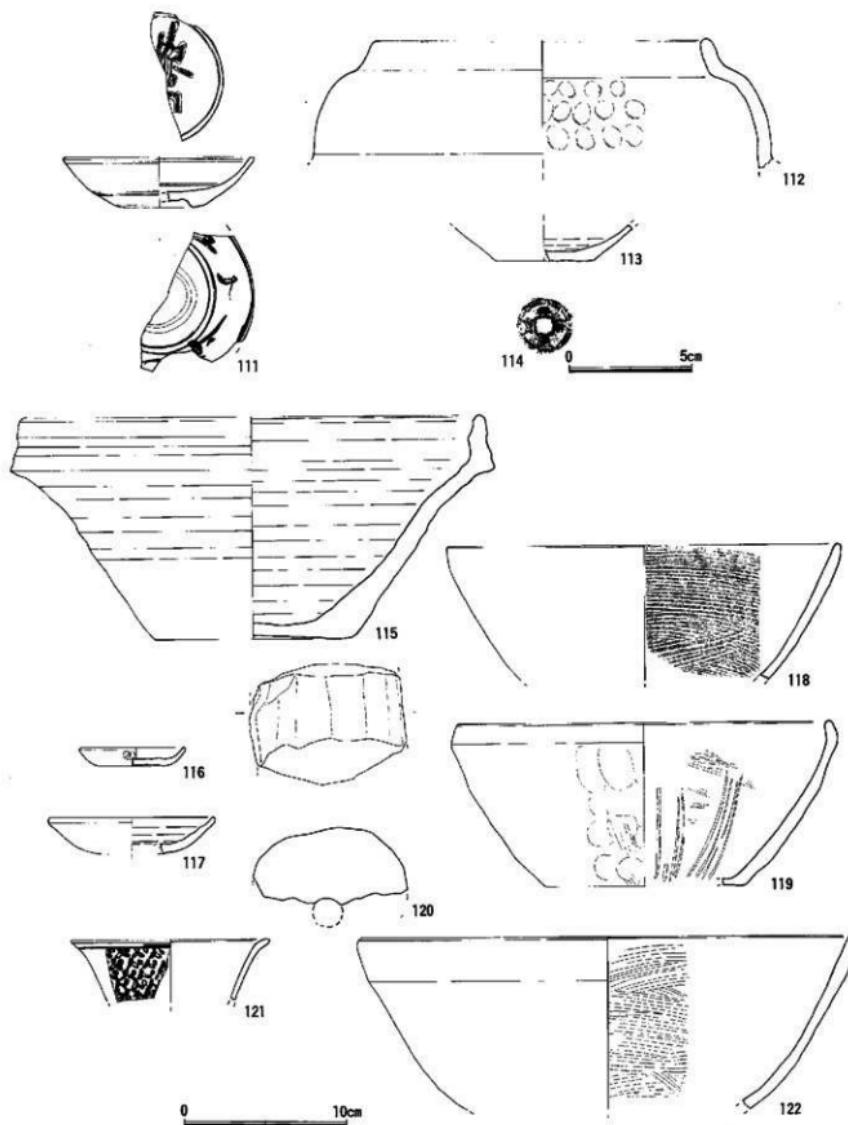
出土遺物(第16図 121・122) 121は唐草文を描く明染付碗である。122は土師質の土鍋である。

溝(SD)

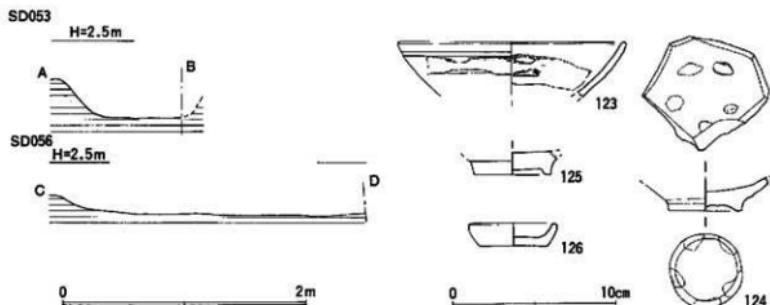
溝は2条検出する。いずれも調査区境界に沿いこれに平行する溝である。

SD053(第17図)

調査区西壁沿いに検出する。復元幅2m弱、深さ30cmを測る。埋土は褐色砂質土。土師器壺、瓦質



第16図 SX035・037・038 出土遺物実測図 (114は1/2、その他は1/3)



第17図 SD053・055 断面図及びSD056 出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

擂鉢、肥前系染付、土鍋、釘、銅津、鐵冶津が出土する。

SD056(第17図)

調査区南壁沿いに検出する。埋土は褐色砂である。草高10cmを測り、底面は平坦である。南壁沿いの遺構は全てこの溝埋土上面から掘り込んでいる。溝として報告しているが、砂丘の段落ちの可能性もある。青磁、李朝陶器、明染付、土師器壺、瓦質擂鉢、土鍋、鐵冶津、釘が出土する。

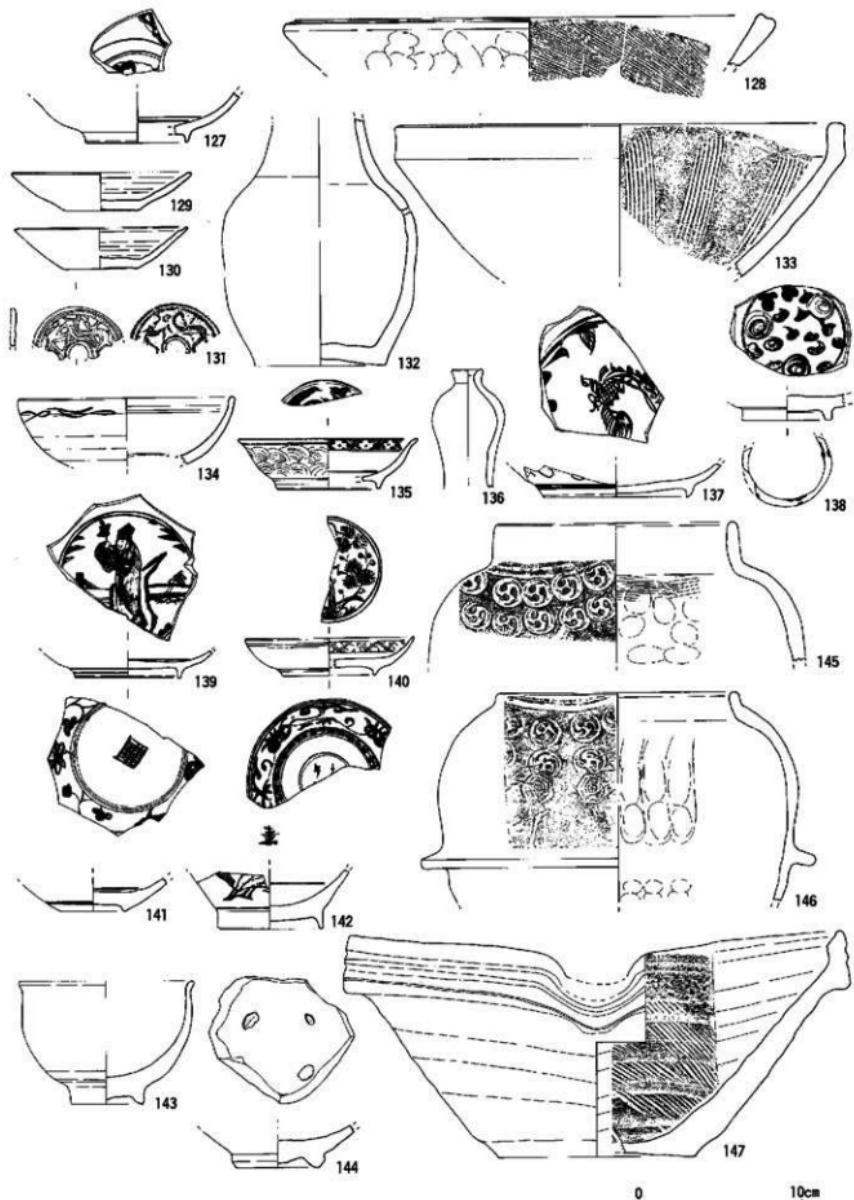
出土遺物(第17図 123~126) 123・124は朝鮮陶器の碗である。123は白色の刷毛目を描き、124には砂目が残る。125龍泉窯系の青磁碗である。外底に墨書きらしい痕跡が残るが不明瞭。126は土師器小皿である。

その他の遺物(第18図)

その他の遺構・検出面から出土した遺物をまとめて掲載する。127・135・137・138は明染付である。134は青磁碗、136は磁器小瓶である。釉調は暗い青色である。139~142肥前磁器である。143・144は唐津の碗。132は国産陶器の瓶である。128・133・145・146は瓦質土器である。145・146の羽蓋にはスタンプを施す。147は備前焼の擂鉢である。この他検出面から銅錢3枚が出土しているが鑄のため判読ができない。また遺構検出時に炉壁・楕円形鐵冶津等の鐵冶関連遺物がコンテナ1箱分出土している。

3 小結

本調査は息の浜の東端部付近の調査である。検出した遺構は16世紀以降に属するものが大半で、土坑・石組遺構のほとんどが16世紀~17世紀前半に位置づけられるものであった。また掘立柱建物は時期は不明瞭ながらも切り合い関係等から、17世紀代に属する可能性が高い。息の浜の開発史については周辺の調査報告で詳細な検討が成されている。特に本調査100m西側で行われた第82次調査(第449集)結果と本調査結果は類似する点が多い。本調査結果のみでは不明な点が多く課題として残った。今後周辺の調査が進むことが予想され、今後検討をかさねたい。



0 10cm

第18図 その他の遺物実測図 (1/3)



写真2 全景1（北西から）



写真3 石組造構群（西から）



写真4 全景2（北西から）

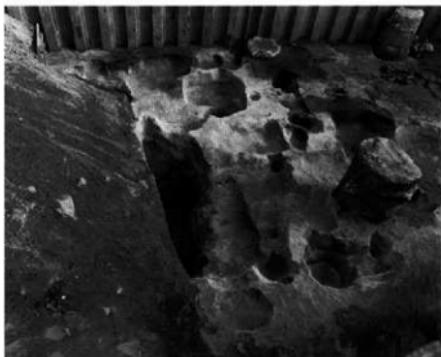


写真5 北端部全景（西から）



写真6 SX015（南から）



写真7 SX015 北壁

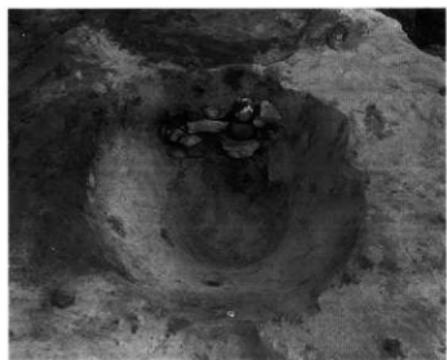


写真8 SX028（西から）



写真9 SX028 土層



写真10 SX029（東から）



写真11 SX034（北から）



写真12 SX035（西から）



写真13 SX037（南から）



写真14 SX037（東壁）

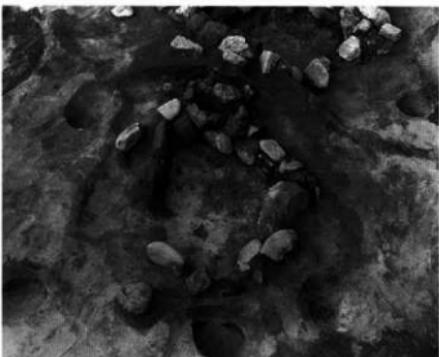


写真15 SX038（西から）

博多 65

— 博多遺跡群第99次・第101次発掘調査報告 —

1998年（平成10年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 博巧印刷株式会社

福岡市南区郡の川1丁目9番7号
